

之も天覽競技なればこそと思ふ。どうかいつも斯くありたいと思ふ。

くりかへしていふ、陸上競技のすべては出来るだけ一つところに綜合されてゐたならばと思ふ、柔道は小石川にある、剣道は外苑にあるが、あの青年會館の壇上で、しかも二組づつ仕合つて、さうした設備の問題も將來に對して、いろいろと考へさせられる。

此盛典に洩れてる競技に對しても、お氣の毒にも思ふ、付け加へたいものもある。又さらに天覽競技に組み込まれるべきもの、それも時間の延長と相かねて考へられる。

幻燈のやうに廣前に整列してお迎へするがよいか、お前にて活動映畫のやうに行進する入場式がよろしいか、之れも考へさせられる。さらに樂屋落ちのいろいろの記事も散見したが、既に樂屋の話は舞臺へ出すのはどうかと思ふ。何んとしても始めての試みである、よくあれまでいつたものであると感心を通り越して不思議とさへ思はれる。

我等は今回の催しが失敗に終ると此競技大會計りでは無い、一般スポーツ界にまで非常な打撃になる事を氣にかけてゐた。幸に成功をつげた、告げたらばこそ毎年やるがよい、設備も擴張充實すべしといふので、豫算も一躍百萬圓といふ記事さへ新聞紙上に散見するのである。スポーツ界の爲め慶賀の外ない。此の如きは國のみならず都市にも大きな刺戟を與へた事と思ふ、大阪でも次で東京でも綜合運動場の計畫があるといふ。どうかその早く實現するやうにと、心からの

るものである。

神宮大會は秩父宮殿下の御令旨を奉戴して一回と調整され充實さるべきである。何んとしても天覽を仰ぐといふ事が全國民衆に通じ體位の向上スポーツの精進にいかに関覺めしめうる事か、此重大時局に直面し人的資源の向上を要とするの秋、天覽の光榮に浴したる本競技の無事終了を見て、只々聖恩の無量無限なるに感激あるのみである。(一四、一一、體育日本)

對支文化工作

國民使節などと事々しく看板をかかげずに、スポーツの國際的な競技を催すことは、お互に明かな明るい氣分を興へ、わざとでなく、相互の理解を深め親善を増し、我餘裕ある力を現實に周知せしむる事になる。(革新、十四年七月號)

甲子園の思ひ出

第十二回の静岡と大連

甲子園の思ひ出？

も一つさかのぼつて鳴尾の思ひ出がまざまざと浮かんでくる。

甲子園が楷書ならば鳴尾は草書である。甲子園が官立の洋式建築ならば鳴尾は和式建築の私塾といふ感じがする。

鳴尾の競技場を取巻いた棧敷、その前に旗を振り振り音頭をとつた應援隊のコーラス。

宮島さんの神主は

おみくじひいて申すやう

いつも廣商はカチカチカツチカチ

これが對敵松山商業では東雲さんの神主となりいつも松商がカチカチカツチカチと歌つたもの

であるが、あの鳴尾における野性的な草書にくづされた應援風景はもはや甲子園では見られない。ただ一寸ここに書き添へておくことは、七月の十六日に長岡市の時局講演會に出かけた時、悠久山のグラウンドで小學校の陸上運動會が開かれてる。その應援歌に古いなじみの宮島さんの神主はといふあのカチカチ節の歌が子供たちの口々から高々と越後路の果てで歌はれてゐたことである。

僕は紀州生れで官廳生活は東京から臺灣を一と廻りして、それから朝日新聞社へ入社した。その朝日でも大阪が本社であり、いつも關西ばかり勝つてゐるから、どうしても同じことならたまには關東にも勝たせたいといふ意識が潜在してゐる。そこへ和歌山にひいきがつき、臺灣に同情がわき、おのづから朝鮮、關東州にも好感が持たれた。自分は秉公持平の氣持ちであり、公平なる同情の分配は獨り肥料に限らないつもりであるが、どうもそばから仲間がワイワイと景氣づけたり氣の毒さうになぐさめられたりするからどうにも仕方がない。だから和中や嘉義農林の時は球場にありて親しく見るに堪へかね席をはづしたこともある。君乞ふ笑ふなかれ、まあさうしたことが人情とでもいふのであらう。

だから和中二連覇で井口選手に優勝旗を渡した時などは晴れがましい嬉しいなんともいへない一種いふにはれない氣持であつた。僕は紀州生れであり和中へは一年半通學したのだから、あ

あした時は胸が一杯になつて涙がにじみ出るのも仕方がない無理がないと思ふ。それだけに和中の三連覇と思ひ込んでみると、ダークホース甲陽が慧星のごとく現はれて、優勝戦に和中を敗つた時は全然がっかりした。それだけにまた常勝和中を倒した甲陽であるからには、これからうんと活躍してほしいと思つたに、それきり姿をかくした時には、なんとなく物足りぬ感じが止めあへなかつた。

さらに前後あれほど泣けたことがないといふのは、第十二回の優勝戦の時である。いやその最後の閉會式の時である。

第十二回には准々優勝戦に静岡は前橋と實に延長十九回戦をつづけた。この延長戦はいづれも年少氣鋭の中學選手であり、いづれも關東よりの精鋭であつた。だから甲子園の大衆見物はそこになんらの身びいきとかなんとかかんとかさうした邪念？ なく、プレイするものも見るものも甲子園原頭においてもつとも白熱の最高極度にのぼつた忘れ得ぬ思ひ出として記憶に深く刻まれるはずと思つてゐる。

さうした白熱的の延長戦を越してから准優勝戦に静岡は高松中に勝ち、一方では大連商業は和中に勝つてゐる。この大連商業は第九回に始めて鳴尾に顔を出してから、次で第十回の甲子園の初舞臺には准優勝まで進出し、廣島商業に七對六で惜敗してゐる。あくる第十一回にはまた准優勝ま

でこぎつたが高松商業に敗れてゐる。それから第十二、第十三、第十四と連年甲子園原頭に出場してゐるが、さて第十二回の准優勝まさしく三年つづいての准優勝戦には、古豪和中と戦つて一對零で勝ち抜いたのである。だから優勝戦静岡對大連となつてはこれほど全國野球ファンの熱を高め、高血を沸かしたものが無いと思ふ。

僕は忘れもしない。この時の優勝旗授與式には健闘し抜いた静岡中學のためにうれし涙をとどめ得なかつた。さらに敗れて損はず、勝てる静岡中學を拍手して送つた大連商業のためには、また同情の涙が溢れ泣けて泣けて仕方がなかつた。たしかに當時の記憶はハッキリと残つてゐる、故村山前社長が胸一杯の感激にあふれつつ、大連の選手たちの前にゆかれて懇切にあいさつされた。われら同人みな涙をのんで先社長のあとについていつた。あの時がどうしても一番ふかく記憶に印せられてゐる思ひ出である。たしか優勝戦には最終戦に参加するものとして第二位者に記念賞をおくる事になつたのが、第十二回大會からであつたかと記憶する。僕としては後の第十七回の中京と嘉義農林の優勝戦これは臺灣に縁の深い僕として、嘉義農林のプレイ振りには二重三重のひいき目があつた。さては第十九回の准優勝戦であつた中京と明石の二十五回の延長戦など、記憶をたどればそれからそれと、くさぐさの思ひ出も湧いてくるが、結局第十二回大會が甲子園の野球競技として記憶に刻み込まれてゐる尤も深い思ひ出である。

感謝の一念

我等ははからずも日本に生れた。しかも明治大正昭和の御代に生を享けた、誠に有りがたい事と思ふ。

私は書生や、下女、下男の使へない家に育つたから、若い頃は庭の掃除に打ち水。縁側の拭掃除にランプの油さし、クツミがき、掘井戸から風呂への水汲み、酒屋、青物屋への使ひあるき、年賀状の名刺くばりをした。

電車はまだ無い、人力車、圓太郎馬車、鐵道馬車はあつたが、通學には一回も乗つた事が無い。いつもてくてく徒歩をつづけた。それが十五歳までは育つまいといはれた、ひ弱い私の體位建直しの土臺をつくつてくれたのである。

敢て負け惜しみをいふのでは無いが、今日のやうに交通の利便が普及發達して、おのづから體位の低下をみちびきつつある時代に生れ合はした現下の青年諸君は、必しも仕合はせであるとは

思へない。

私は人間一人前として、するだけの事はした。はや六十六歳になつてゐるが、猶健康に恵まれてゐる。國の恩に兩親や、先生や、友人の恩に感謝するばかりである。此の上は、どうか誰にも邪魔にならぬやうに、多少とも手助けになるやうに、そしていつも温かい心持ちでありたいとつとめてゐる。

再び生れない命だから長命はしたい、しかし難病で自ら苦しみ、又みなさまに世話や面倒をかけたくない。凡て天命を待つ外はないが、アツサリ往生したい、先づそれまでは少しの時も惜しまれて、好きな撞球、碁將棋なども我慢してやめてゐる。

近頃時の尊さがしみじみと分つて來た。必ずしも餘命が短くなつたからでも無い、年を経る毎に、月を重ねる毎に、ますますおのれの足らざる事が分つてくる。そこへ世の中がますます複雑になつてくる。あれも知りたい、これも學びたい、聞きたい、読みたい、話したい、書きたい、といふ熱が高まるばかりである。朝夕感謝の念にあふれつつ。

(キング)

戦時下の結婚徳義問題

- 一 甲種合格で入營（出征）待期中
- 一 許婚を残して出征の場合
- 一 式前應召

出征すると生死が知れない。凡ては無事凱旋して後の話であるといふ。これは小楠公の出陣の時の如く必死を覺悟してゐる時は、いかにも「ながらふべくもあらぬ身」であるから「かりの契りをいかで結ばん」といふ心持ちもうかがはれるが、……太閤記十段目尼ヶ崎の段のやうな場合もある……この度のやうな時は、生死はかりがたきも、先づ無事凱旋を原則とするから、許しあひ思ひあつた仲である。出征すれば生死はかりがたないだけに、せめて結婚の式をあげてゆく、不幸な破目になればそれは覺悟の前である。原則として無事にかへれば丁度赤ん坊が生れてるなどは朗かでもあらう。むろん氣の乗らぬのに強ひて舉式する要もなければ、また舉式しようとい

ふのをわざわざ差止める要もないと思ふ。

一 遺族扶助料めあての結婚

この題目の趣旨はよく分らない、ただ扶助料を欲しさに結婚するといふなら怪しからぬことと一言に排斥するまでである。

遺族扶助料めあてではないが、内縁の夫婦がこの際舉式してでかけるといふなら、それは結構なことである。たとひ出征しなくとも、内縁のままであることが既に違例である。まして出征するとなれば舉式してよろしい。殊に子供が生れる、また妊娠でもしてをれば、私生子といふことはあらゆる點より見て好ましくない。出征の有無は別として舉式しておくのが自然である。

一 戦地にある人を待つ場合

ただ待つてゐてよいではないかといふまでである。若し更に他に結婚の問題が起つた時にどうするかといふに、既に婚約までしてあるとすれば、その婚約した出征者との約束を反古にするのはよろしくない。もちろん婚約は絶対でない、時に破約といふこともあり得るが、破約するとすれば、婚約した出征者と書面によりてもわだかまりなく解決できるやうな特種の事情があれば格

別、さなくば歸還して後の話にゆづるべきである。

一 夫戦死の場合再婚の可否

この問題は簡単にいかない。その家庭に老夫婦また夫の兄弟……その妻の有無……ありや否や、何よりも既に幼ない子供ありや否や、さうした事態を中心にして、くさぐさの経済問題などもか
らんでくるので、各個の場合に直面して見ないと一律に可否はいへない。

原則としては、そのまま後家を通すことが考へられる。また本人がその心持ちであれば、何も再嫁を強ふべきではない。そこに日本の婦人のいはゆる婦徳がある。しかし、いづれは若い婦人のことであり、もしまだ子供もなければ、夫側の両親などより嫁さんに縁を切り里がへりをすめる例も少くない。またさうなつても必ずしも非難すべきでないと思ふ。また子供のあるときは、後家を通す氣にもなり、また通しやすい場合もあるが、その中には繼父繼母というても、それが必ずしも意地悪くつらくあたるものと限らないと同時に、父なし兒といふものはいぢらしい好ましくないものであるから、もし亡き夫の弟とか、さうした人と再婚することが、本人なりまた子供なり、また老夫婦などの仕合せになることもある。いづれにしても、再婚を強ひる要もなければ、また必ずしも再婚は怪しからぬと非難すべきでもない。凡ては各個の場合の實情に即すべき

である。

一 傷痍軍人との結婚

これは問題なく結構なことである。ありがたいことと思ふ。當然の話であるが、夫は妻の志をくみとりて、ひがんだりねぢくれないで、おつとりと妻の同情をうけ入れてゐる。妻もまたいつつまでも當初の同情をつづけて、どこまでも、女房らしくつつましやかに、みとりをつづけ、いつつまでも御互に感謝感激のうるほひの生活をおくつてほしい。

以上要をつくしがたいが、なほ次の二點を申しそへたい。それは古今東西男女は自から相似たる半々の數にかはりがたない。乃ち男女互に孤獨の生活となることは例外である。ところで、妻の死亡の時は何等怪まれずに、當然のやうに後妻をめとる。しかし、夫が死亡の時は、妻は後家を原則とし、未亡人とまでいはれてゐる。固より男と女は一律にはいへないが、婦人方には御氣の毒千萬と思ふ、理窟に合はない。

次に時局はこれから第二世を残してゆくべき大事な人たを亡くし傷け、また病にかからしめる。また出征中には内地の妊娠率が當然減少する。かたがた人口の質の向上とその數の増加につき、今から一層の關心が拂はるべきである。

大日向村と滿洲移住

大阪朝日會館開拓農民の夕講演

一 東京から出かけて来た

東京の方へ引越しまして、大分朝日會館にも御無沙汰をしてをるので、今日は久し振りに里歸りといふ氣持でやつて参りました。今日は前進座のファン諸君がここへ集つて長十郎君などの素顔でも見る、それからあとに映畫や劇があるから、別に私が出なくてもよいのであります。今日は東京ではアメリカから歸つて来た須磨大使館参事官のあちらの話があり、陸軍の清水情報部長の現下の歐洲の大勢に關する話もある。私の關係してをる國策研究會では電力飢饉に對する打合せ會、午後には物價委員會の小麥の部會があり、文部省の教育審議會では大學と専門學校を主題とせる特別委員會があり、いろんな會合がつづいて私はこちらへ來にくかつたのであります。どうしても今日は出かけて來なければならぬことになつてゐました。といふのは今日の私の講

演は遠い遠い滿洲の吉林で長十郎、飯右衛門の兩君と堅く約束してしまつてゐたからです。

二 信州佐久の大日向村

私は前進座に縁が深い。縁が深いばかりではない、分村移民の大日向村にも關係が結ばれてる。皆さんの中には長野縣へお出でになつた方もおありと思ひますが、スケートで名高い諏訪の湖、二十四孝の十種香でお馴染のあの諏訪と、山梨縣の甲府とを繋いでをる中央線の中程に小淵澤といふ驛があります。それから又一方で信越線が輕井澤から信濃の長野善光寺へむけて走ると、今朝も煙りが三筋立つといふ淺間の山の麓に小諸の宿があります。この小淵澤と小諸とを結んでをる鐵道は日本中で一番高い八ヶ嶽の山麓をはしる鐵道、その山麓に沿うて、信濃川の上流なる千曲川に沿ひ小諸へむけ走つて行くと羽黒下といふ驛がある。この羽黒下から千曲川へ流れ込む支流抜井川に沿へる村が大日向村であります。

三 分村移民の計畫されたわけ

信州は大體各府縣のなかでもあまり自然に恵まれない縣であります。この抜井川に沿ふ大日向村は山の間の細い谷合で田畑は狭く少なく、かつかつに暮してゐる状態にあります。今度の芝居

では和田君の筆によりいろいろ脚色されてをりまするが、村の連中の借金が三四十萬圓にもなつてゐる、村税の滞納が一萬圓にもなつてゐる、仕方がないから村有林の木を炭に焼き、いはば賣り喰ひをしてゐる。立木はほとんど伐るが、あとの育ちは遅いから追つつかない、村有林も次第に禿山、裸山になつてくる、一體これからどうしたものかと、とつおいつの末に案出されたのが大日向村の満洲への分村計畫であります。私はこの信州の大日向村へも参りました。それから過般は満洲の大日向村へも参りました。それは別に前進座から頼まれて行つたわけでも何でもありません。私は満洲移住協會の理事をしてをるのであります。また拓殖委員會なり満洲開拓民審議會等の委員もつとめてをります。さうした立場から視察に参つたのであります。

四 あきらめの好い日本人

狭い内地に人が多過ぎる、海外へ發展しなければならぬ、といふことを私はほとんど三十五年筆にし口にしてをるのであります。日清戦役日露戦役には澤山の人がついて出掛けて行く、戦争が済むとその軍隊についてをつた御用商人も飲食店などもまた引揚げてしまふ、随分澤山の金をつかひ、少からぬ人命を失つたのであるが、さて花は咲いても實は結ばれないのであります。今度の支那事變でも償金は取らない、領土も取らない、と近衛聲明が公けにされてをります。しかし現に非常な犠牲が拂はれつつあるのであります。これで戦争が済む。それちや民國の方々、長長御邪魔さまでした、私共はこれで失敬しますとそのまま引揚げてしまつたのでは、この長い間の大きな尊い犠牲は皆な水の泡となつてしまふのであります。

五 満洲移民の必然性

歐洲の多くの國は日本ほど人口は増さないが、海外へどしどし進出してをります。イタリヤの如きは一時毎年二十萬三十萬といふ大人數が海外へ出掛けたのであります。日本は一年に百萬近い人が殖えるが、それちやいま世界にどれだけ移民が出掛けてをるか、進出してをるかといふと、この事變前までは、一年分の増加人口よりも遙かに少かつたのであります。そしてこの狭い島國で押し合ひへし合つてをるのであります。之を農村に例しても家族の増加に伴ひ一戸當りの田畑が次第に小さくなり狭くなる、これが日本の農村經濟の大きな行詰りとなるのであります。我々は満洲事變が済んで満洲國が建設された時分から、この未開の大陸へ澤山の人が移り込むことはいまいふ内地の農村の將來に幾分でも裕りがとれるわけであり、同時にまたさうした人達が多數現地に出かけ、その土地の満洲人などと手を握り合つて自然の資源を開發して行く、さうして將來新東亞の大きなブロックを建設し、日本ばかりではない、東亞民族お互ひの將來に輝かしい

曙光を見出さなければならぬ、さうした意味でこの満洲移民といふことにつき拓務省が主となり満洲國でも賛成して、御承知の通り毎年かなり多數の移民が満洲へ出掛ける事になつたのであります。

六 なぜに満洲移民が急務であるか

それで昨年私は満洲の移民村を方々廻りましたが、今年もこのほど廻つて参りました。このほど出掛ける前に満洲開拓民審議會が首相官邸で開かれまして、そこでいろいろと論議されましたが、その時にも日本では支那との間に大きな戦争がはじまつて、少からぬ人が現地に出掛けてる、そこへまた大阪とか東京とか大都市の附近に重工業がさかんに興つて、これにまた少からぬ人が地方から引つ張り出されてる、その上にまた満洲へ移民などといつても、もうさう人手はないのだ、それよりもまづ内地の人手の足りぬ方を埋める方が大事ぢやないかといふやうな質問もありましたが、しかしこの事變がすつかり片附いて現地をる兵隊さんが皆歸つて來る、重工業も戦争があればこそ今日だけ盛んにやつてをりますが、さて戦争が済めばどうしても多少共下火になります。今度は反動が來て失業だ、就職難だといふので、人手のあまり過ぎるときは來ないとは言へないのであります。そのときになつてさあ困つた、これから外へ出掛けようといふの

では手順が遅れます。いはゆる鐵は熱したときに打て、あついに打てといはれてをります。満洲でもいまだからまあ日本の息が強くかかつてゐますが、これから一日一日と未墾地を開く便宜はむづかしくなつてくる。いまは御承知の通り満洲では千七百萬町歩といふ大きな未墾地が横はつてをります。日本の田畑の約三倍のものが手付かずであるのであります。

七 満洲移民のさまざま

さうした意味で私共は満洲移民、満洲に限りませんが、要するに日本民族が海外に發展しなければならぬといふ心持で各方面との聯繫を密にする行動をとつて來たのであります。この満洲移民のなかでも、御承知の通り満鐵の自警團といつて鐵道沿線に移民してをるものもあります。それから集團移民といつて各地方から壯年の連中を引抜いて集團になつてくる移民もあります。チャムスに近い千振村、彌榮村などみなそれでありませぬ。又青少年義勇軍といふものもあります。あるひはまた林業移民といつて山林の仕事を専門に森林地帯へ入つて行く移民もあります。それから自由移民といつて銘々が自由に組合つて移民する、その一番著しい例は哈爾濱の附近にある天理村で、天理教の連中が移民してをるのであります。

八 分村移民の元村新村

ところで分村移民とはどういふものであるかといふと、これは大日向村がまづ最初の見本を示したのであります。これは若い連中ばかり引き抜かれて行くのではなくて、ある村が二百軒あれば二百軒、三百軒あれば三百軒、それを縦に割つてその二分の一とか三分の一が、各全戸の老幼男女をあげて移民するのであります。だからそこのお爺さんからお婆さん、息子も嫁も孫もみんな縦に割られて分村する。村がわかれて移民する即ち分村移民であります。その大日向村の移民をした満洲の新村の状態はどんな具合であるか、また移民したあとの信州の元村はどんな具合になりつつあるか、元村はそれだけ分村されたのだから、あとの戸数が少くなつたのである、いままでの一戸當りの田畑が五反百姓であつたとすれば、一町百姓になるといふ勘定であります。そこで元村の方では分村したあとの家がどう始末されたか、分村した連中のあとの土地田畑がどうなつたか、その人達の借金はどう始末されるのかといふので、私は元村へも視察に行き、また満洲の方へも視察に出かけたのであります。この前後にたまたま前進座がこの大日向村を劇にするといふことになつたのであります。

九 小説の大日向村

此劇はこの前にここへ立つて話された和田傳君の小説「大日向村」をもとにしてます。これは小説だから實際のことが軸にはなつてをりますが、そこは小説家の事として、うまいこと筆先に丸めて、お芝居になるやうに拵へてあります。この和田君の「大日向村」といふ本を持つて私が新宿を出ていまの小淵澤驛の方へ走る汽車中に、この本を読んで三ヶ所ばかりで涙がぼろぼろ出て来たのであります。なるほどこれなら脚色してもちよつと見物が泣かされるなと思ひました。尤も私がかういつて見ても、實物を見たときに皆さんが無理に泣かなければならないときばる必要はありません。或は私が存外涙もろいから泣けるのかも知れませんが、とにかく小説家はうまい具合にお筆先で泣かされるやうにでつちあげてあります。

一〇 事實と小説と脚本と

しかしそれにしても、私の懸念したのはあまりに實際とお筆先とチャンボンになつて居ります。たとへばそこに七萬圓以上の債權を持つ大地主が商賣をしてゐる、村の人たちがそれから借金をしてをるのであります。小説だからその債權者を相當悪者にせぬと芝居にならない、ちやうど忠

臣藏で高師直を極々悪人にしないと芝居にならないのと同じ事である。高師直は死んでゐるからよいやうなもの、吉良上野介の身代りにされて割りが悪い、吉良上野介も相當文句をいひたいのであらうが、いづれもう亡くなつてゐる。ところが此度の場合は生きてゐる人の身の上申しである。それを芝居の上とはいへあまり悪口をいはれると大に困る。村の後始末をつけるのに、この借金はまさか全額棒引になりもしまいが、これはかうもしようああもしようと妥協の折合談を考へてをつつても、今度の芝居で高師直なみの取扱を受けると、いま話をつけかけてゐる元村の後始末の進行に邪魔になる。脚本の方は大分手加減をしてをりますが、さりとて又手加減をしすぎると、芝居としては面白くなつて來るのであります。此點私も脚本に筆を入れてあるだけに、一言して各方面の諒解を求める次第であります。

一一 移民國策の意義

此脚本「大日向村」は現在の農村が如何に苦しいかといふことと、その救済方法として移民といふことを案出したわけであります。しかし移民といふものは自分の村の暮しが立たぬ、仕方がないから移民に行くといふのでなく、たとへ暮しが立たうとも日本内地では人があまり過ぎてゐるのだ。だから海外に進出する、さうした心組でありたい。大體日本では國民の半ば近いものが

農民であります。それで國民達の食糧を生産してをる。しかも朝鮮臺灣から年に約千五百万石も移入を仰いで居るのであります。つまり人手があまりかかり過ぎてをるのであります。されば現に少からぬ兵隊が現地に出掛けて行き、重工業の方へも澤山の人をとられ、馬も澤山徴發されるし、農村では人手も家畜の力もうんと減つてをるのが、昨年の作物も今年の作物も……今年はところによつて米の收穫が減つた地方もありますが、それは早魘の爲めであります……あれだけ人手が減つても大體同じだけの農産物が出來てをるのであります。それで今度戦争が濟んでみなが戻つて來たといふことになると、つまりその全數でなくとも相當の人數だけ餘分な人手が戻つて來たともとれるのであります。

一一一 滿洲の天候と溫度

それで私共は農村が苦しからうと苦しくなからうと、かういふ際には滿洲へ出かけて行かなければならない。狭い内地の五反百姓よりも滿洲で一軒の家で十町歩二十町歩の土地を持つ方がはればれして愉快ぢやないか。もつとも滿洲といふところは寒いところだ、氣候も悪いなどと、さういつたやうな評判もあります。しかし滿洲は日本内地より健康地です。私はたびたび筆にし口にしてる事ですが、御承知の滿洲は日本の内地よりも雨は半分か三分の一程度も少いのでありま

す。それだけ晴天の日が多いわけでありませぬ。晴天の日が多いから日光が直射する、それだけ紫外線にめぐまれます。だからあの寒いところにお米が出来るのであります。又温度は零度以下二十度、三十度、四十度と下るけれども、風が少い雪が少い、だから日本内地のやうにスキーをやめる場所は吉林方面に三四ヶ所しかない。雪も厚く積らない、風がないから冬も凌ぎよいのであります。どちらかといへば内地よりも健康的であります。

一三 移民村の病院

北滿の各移民地を廻りましても、昨年私が見舞つた第三次の瑞穂村へ行つても、そこにはやはり病院があります。皆さんは都會地にお在でだから醫者に不自由はありませんが、日本でも田舎ではまだ三千何ヶ村といふ醫者のゐない村があります、又醫者がをつても、いざ醫者にかかるとなると診療料とか藥代など入費がかさむから、つい醫者にかかるにしても手遅れになり易い、またかかつてから、醫藥の借金に焦付かれるといふことが多いのであります。移民村にはそこに病院が出来てゐるから村の人が手軽に診て貰へる、瑞穂村には現に病院がある。お醫者さんが一人と看護婦も一人をりますけれども、私が行つたときには入院してをるものは、一人もないのであります。

一四 醫師看護婦より産婆

けれどもそこには産婆は三人もゐる。醫者は一人で看護婦も一人、産婆だけが三人もゐるのはたしかに多過ぎるのであります。その村は二百軒ぐらゐるけれども、これが各戸十町歩ぐらゐづつの土地をもつて耕作してをる、だから二百戸が全部一ヶ所に集まれば、手近い自分の畑に行けるものもあれば、今度は二里も三里も行かなければ自分の畑に行かないものも出来て来る。そこでここに二十軒、かしこに三十軒といふやうにわかれて部落が點在してゐます。そのわかれた各部落の周圍に銘々が十町歩、二十町歩の土地を持つてをるのであります。その部落々々からここでも妊娠した、いやあちらでも生れる、いやこちらでもと、さうなると三人の産婆がかけ持つて廻り切れないのであります。そこへ、その産婆さんのおなかも又膨れますから。

一五 滿洲の廣さ平らさ

ところでこの滿洲の廣いといふことはお出でになつた方は御承知でせうが、大連で船から上つて、あれから奉天、新京、哈爾濱、黒河の北端まで、千六百キロ、大體下關から青森までの距離となります。それが大體一本筋です。それで大連から奉天まで四百キロほどの間には多少山が見

えますが、それから先は矢張りすつと一直線で隧道らしい隧道があるぢやなし、山らしい山も見
えるぢやなし、それが青森から下關にいたるまでぐらゐぶつ通して、前後左右一望際涯なしとい
ふのでありますから、まことにこれはれとしましたものであります。

一六 松花江の長さ大きさ

これをもう一つ科學的にいふと、哈爾濱を中心としたあの滿洲平野は勾配がほとんどないので
あります。勾配が約一萬分の一から二萬分の一といふ、一萬尺又は二萬尺で一尺の違ひ、かうい
ふのでありますからほとんど水平であります、だから洪水の出たときには水が捌けない、ただ天
日で干されるのをまつほかに捌けないのであります。私が長十郎、翫右衛門兩君と落ち合つて一
晩話し合つた吉林といふのは朝鮮と滿洲の境白頭山に源を發したる松花江の水が約五百キロ流れ
て來たところで、その吉林から八百キロ流れて哈爾濱、それから又五百キロ流れて佳木斯、佳木斯か
ら五百キロ流れてハバロフスク、そこで、松花江が黒龍江に合流し、また千キロ流れて海へ出るの
であります。どれだけ大きな河か一寸見當もつかないのであります。

一七 吉林の水電六十萬キロ

松花江の流れは全部合算して見ると、三千三百キロあるといふのであります、その一番上流
にくらゐする、吉林の郊外に河を堰止めてとてもでかいダムをつくり電力を起す工事をやつてを
ります。どれだけの電力を起すかといふと一ヶ所で六十萬キロの電力を發電するのであります。
内地のとはけたが違ふ。内地では十分一の六萬キロといつても大きい。一ヶ所で十萬キロ以上と
いふのはすくないのであります。ところが吉林の一ヶ所で六十萬キロであります。すると一體
白頭山から吉林まで五百キロの間の流域はどのくらゐあるかといへば、利根川や信濃川の約三倍
の流域を持つてをる。そこへダムをつくと、その流域の水がたまつて琵琶湖のやうな湖水が出
來るのであります。しかもその電力五厘以下でさばけて、その附近に石炭液化だとか人造ゴムだ
とかいろんな工場が出來て、その電力を消化する。またこの下流二十萬町歩ぐらゐの土地が濕地
でじめじめとしてまるで使へないのが、良田になるのであります、さういふはればれた廣々し
たところへ行くのはこれも人生の快事であります。日本内地を旅行しいつも山につき當り、隧道
ばかり潜つて行くのは、これも一寸オツなものかも知れませんが、少くとも一生に一度は汽車に
三日乗つても五日乗つても山一つ見えず、隧道一つも潜らないところをはしる、退屈は退屈かも

知れませんが、一生の思ひ出だと思ふのであります。

一八 日本の國策

私がこの「大日向村」に肩入れしてをるのは、さうしたやうに前進座の諸君とは深い縁故もあるが、しかし何よりも日本の國策といふ見地に立つからであります。内地では人口が殖え、失業や就職難のために、いろいろな社會問題が起つたのも十數年前の話であります。さらに又滿洲事變支那事變と引つづいて大きな犠牲が拂はれてるが、この拂はれた犠牲に對してどうしてもあとへ人間がつづかなければその實が結ばれないのであります。その實を結ぶといふところに移民開拓といふ事があり、分村計畫といふものも生れたのであります。分郷移民、部落の分れた移民、さらにこの分村移民が長野縣だけでも七つほどできましたが、大日向村が眞つ先に分村をはじめたから評判になつてゐます。今日日本の農村は人が多過ぎていかに行きづまりつつあるかといふ事と、又困つてをらうが困つてゐなからうが、日本の民族はどんどん海外へ進出し東亞の民族が互に手を握つて共存共榮の一路を邁進しなければならぬ。さうした氣持さうした感銘がこの劇によつて得られたならば、この劇は劇本來の使命の外に、國策に沿ひ一般民衆に何らかの効果を與へうべきものと思ひます。長らく御清聴を感謝致します。

(前進座、十四年十一月號)

大日向村の歌

信濃の國佐久郡千曲川の交流なる抜井川をさしはさみし大日向村は、滿洲拉濱線四家房へ分村移民として移住した。此連作中第一節大日向村行は親しくたづねし折、末節最後の三首も滿洲現地をたづねし折のいづれも實感であり、その他はすべて和田傳氏の筆になる小説大日向村、及びその小説を骨子として脚本化され、前進座により上演されたる舞臺面などより連想されて試作されしものである。

大日向村行

八ヶ嶽高原をはしる我汽車の

一時をふれどまだ同じ山のふもと

千曲川川べをはしる我汽車は

客車二輛引きてあへぎあへぎ

拔井川はさみて山の谷せばみ

日は乏しけれど村あり大日向村

夏山の眞青けれどもよく見れば

炭に焼かれて立木の乏しき

馬かへしの移住民の家はくづされて

運び去られたり桑の木ばかり

村税怠納

村税の怠納つもりで一萬圓

督促したとてあやまるばかり

谷あひの部落部落の家々を

村長はまはる税金出させに

納税のさいそくにまはり村長は

無駄骨折りたり七日もかかりて

はや三月みつき小學校の先生の

俸給がとまる山村の冬

怠納をもてあましたる村長の

「まさか役場は夜逃げもならず」と

「村長さん夜逃げするならおらたちも

一所につれておくんなんしよ」か

子供らは役場が潰れた潰れたといふ

學校も潰れると氣にするらしも

(村長等辭表縣廳の役人事務管掌)

子供らは縣廳の役人に尻をまくる

赤んべえすると先生はなげく

立つ瀬の無い山村

山峽やまがせのなぞへに散らばれる小さい棚田

手笠の下にかくれて見えす

分家して二反分けて貰ひ何んとなる

稼いで見ても買ふ田は無いのだ

山峽の棚田の米は乏しかり

村有林を賣り喰ひするも

村有林つぎつぎに伐りて炭に焼けば

右も左もみな裸山

その昔善光寺さまの親柱を

寄進したるに今は裸山

ぶな、樺、榎、落葉松かろうまつみな伐られ

のびるはしから炭に焼かれつ

朝は四時夜は九時までも山かせぎ

片道三里の炭焼人夫

炭俵あみてわづかの三錢も

かけかへなければ手は休まれず

原木げんぎの拂下げは嚴きつき現金にて

納める炭はみな延べ拂ひ

酒、砂糖、味噌、醤油も傳票買ひ

借金は尻からかさまるばかりか

家も畑も抵當ながれ娘子は

工場おくり立つ瀬無きかも

滿洲の視察報告

滿洲より持ちかへりたる米大豆

大麥小麥におつ魂消しか

稻の穂の粒を一つ一つ數へたれば

百八十粒あり之が滿洲の稻

滿洲出來の粟の穂しつかり手につかみ

ほんにほんにと老嫗のあはれ

日露の役に子を失ひし遼陽の

名を聞きしより老嫗は動かす

粟の穂を握りしままに婆さんは

「遼陽へはお出やしたかい」と

若人は遼陽のいはれ耳にして

老嫗を見つめうなづきうなづく

遼陽も地つづきならば滿洲へ

わしも行かんに亡き子のあとを逐ひ

分村移民

借りのある連中はしほり滿洲へ

行かせねえといふ聲あれば

けしかけてそんな借りは踏み倒し

行つてしまへといふ聲もあり

馬返し八軒一軒のこらす引きつれて

いざ大陸へと眉をあげたり

大陸に日本飛躍の使命背負ひ

浅間左衛門はいざいざ立たうぞ

お蕎麥が名物となるほど米つくる

土に恵まれぬ信濃人よ立て

満洲の野に開かれた大日向で

生一本の米の飯をくはうではないか

婆さんいふには「一日も早く満洲へ

ぐすぐすすると壽命が切れる」

肺を病める女工

胸の病は一生懸命養生して

一處に行かずか満洲へわしも

一所でなくとも追ひかけてでも私しは行く

ほんまに私しはよくなるかしら

「このままであなたや兄を見送るは

私はいやですくるしいです」かも

晴れやかにあなたを満洲へ立たしたい

それが出来ない私は苦しい

私が亡くば母も満洲へ出かけましよ

そしたらどんなに仕合せでせう

母も手をささらのやうにし炭俵

あまずともよかる満洲へ行けば

あなたたかも暗いから暗いまで炭焼に

出ずともよかる満洲へ行けば

若い娘も紡績工場の棉ほこりを

吸はずともよかる満洲へ行けば

仲よくいつて下さい骨になつた

私もつれていつて下さい

満洲の大日向村へ

白も杵も醬油樽も澤庵の

重石も荷造りトラックへ満洲！

位牌つつむ風呂しき包み双の手に

しかと抱けるは八十九歳の媼

婆さんは晒木綿の風呂しき包み

双にかかへたり娘の遺骨を

乏しかれど先祖代々住みなれし

大日向村を今しあとにすも

満洲大日向村建設の

歌を泣きうたふ皆聲をかぎり

信濃の子千里の外に新しき

大日向村立てと氣負ひてゆくも

南北四里東西二里の廣々しき

大日向村生る滿洲に新たに

松、胡桃、白樺の森とところ

丘あり川あり新らしき村

新しき一萬町歩の新土に

日の光りみちて村生れたり

(短歌人、十五年一月號)

民族偶語

お公卿さまやお大名さまたち、名門の出である人々が一座の茶話しである。

どうも名門の家に必しもエライ人が生れない、いや却つてエラくない人々が出て、家名を汚すことが多い。あれだこれだと次ぎから次ぎへと噂が絶えなかつたが、無論比率からいつたならば平民共よりも貴族の方にエライ人たちの歩留りが多い。しかしそれにしても家名を汚す者の絶えないのは近親結婚の多い爲めである。あれでまだ下々から御部屋様をお召しになつてから、餘程フレッシュになつてゐるのだ。さうでも無かつたら退化してゐるだらうといふ話も出たのである。

*

近頃混血といふ事がよく問題になる。それは土地がはなれ人種宗教風俗習慣などちがへば違ふほど混血の結果の好ましくないのも事實である。同じ土地で同じ人種の間すら釣合はぬは不縁の本といふのである。まして我々と白人とか黒人とかの間といふ事になれば不縁になるのは珍らし

くない。これも事實統計の上でどう現はれるか知らないが、四十二歳の厄年といふのと同じく、たまたま災厄にかかる、本人なり家族なりが四十一、二、三歳であつたなら、それ厄だ前厄だ後厄だと噂にのぼる、不縁になるのは異人種の間に限らない。しかし混血間の場合となれば、それ見た事かといふに相違がない。それにしても互の境遇が違ふほど、一家族内親族友人間に協調を保ちにくい事は、疑ひを容れない。

前に述べたのが双方の極端の例であるが、事實各國の歴史はいづれも長い間に幾多の民族が相混じり相接してゐる事を示してゐる。近頃民族研究會における印度支那、タイ、ビルマ、比律賓をはじめ南洋一帯の民族についての講話を聞けば、いづれも数多い民族の集團混住であり、それもジャバ方面には和蘭人と土人、比律賓方面では西班牙人と土人との雑婚は少くない。又さうした混血の種族が、それぞれに社會の中核となり、實力を握つてゐるやうである。

翻つて我等大和民族も古代に遡れば、そこに原住民族もあつた。黒潮により南洋から比律賓、臺灣、琉球方面からの東遷も考へられる。支那から朝鮮からさらにその北部一帯よりの移住も少くない。さうした雑多な民族が、いつの間にか今日の大和民族を形成する事になつてゐる。世界

を通じて多數の民族が所在にそれぞれ入れ交つてゐる。亞細亞にも至るところ同じ現象が認められる。しかもどうして大和民族が今日の如く他の國々を引き放して、斷然大飛躍する事となつたのであらうか。

觀じれば島國として隔離されてゐたことは、自ら他國の侵略を受くるなく、自然に限界されしうちにさうした數多くの民族を渾一化するに與つて大きな原因をなした事は否めない。民族の數が多かつたほど、その長所長所を消化して、そこに特異性ある結合力ある強い民族をつくり上げたのである。それならば島國は皆よいかといつて必しもさうでは無い。それぞれに氣候風土が異なつてゐる。北極南極のやうな極寒な處では問題にならない。さりとして又熱帯地方では天恵が厚きにすぎた民族の緊張を缺く。従つて日本とか英國とかいふ國は、地勢に於て又氣候風土に於て發展すべく、最も能くあてはめられてゐる。さうした意味から云へば、日本の風土は耕地に恵まれず、しかも颱風あり地震あり、自然の環境が絶えず民族を試煉し鍛へ上げてきたとも取れない事はない。

ましてや日本には未だ他國よりの侵略をうけた事のないといふ誇りを持つてゐる。萬世一系の皇

室をいただくといふ榮譽を持つてゐる。ここに日本民族の他にくらぶべくもない特異性がある。一方には他の長所を吸収し消化する不斷不休の進んで止まざる中に、一方には深い深い抜くべからざる自信がある。自尊がある。かうした民族の歴史が持つ雰囲気は、その新領土たる琉球から今や臺灣、朝鮮へと治及されつつある。

この前は比島やジャバにつき、昨夜はビルマにつき民族を中心とせる専門家の話を聞き、今さら思ひを新たにし、日本をはじめ世界の、現在よりその將來につき、いろいろと考へさせられつつ。(一五、二、一七 海を越えて)

比律賓ではメスチゾス混血は却て誇りとなつてゐる。アギナルドは支那スペインと比律賓の混血であり、オスメニアは支那と比律賓、ケソン大統領はスペインと比律賓のメスチゾスである。

第四篇 白雲流水篇

蒙自ばくげき行の歌

三十九機黄塵あげてつぎつぎに

舞ひ上りたり大空どよもし

一機一機滑走する毎にもろ手上げ

おくる我眼に熱き涙あり

笑ひながら空爆の勇士ら語り居り

茶飯事の如し戦の門出に

武人牢獄の歌

一 慕と蜘蛛の歌

這ひやめて身構ふる見れば慕の姿勢

躰からだにつきて確かなりけり

大き獲物のみ込まむとして眼をつぶれ

慕の姿勢はくづれざりけり

呑み込みし獲物大きに過ぎにけむ

慕眼をつぶりあけて又つぶる

大き獲物のみ込みし慕の手をあげて

眼をぬぐひたり苦しかりけむ

これは慕の歌である。もともと慕なんか歌材には不似合である。「小田の蛙の高なく聞ゆ」といふやうな歌はあるかも知れないが、かうした慕の獲物のみ込むところをつかんで歌ひこなしているのは珍らしい。誰しも手にしようとも觀賞しようとも思はない雑草なり、誰しも移し植ゑんとしても移し得ぬ草花を、觀賞し得るやうにつくりなし移し植ゑる、その眼のつけどころ、その歌によみこなすしらべ、そこに歌の道のおもしろ味がある。さらに蜘蛛の歌二首あり、

足長蜘蛛障子をはへりさよふけて

外出の妻子いまだ歸らず

足長蜘蛛すばやく逃げつ既にして

吾が頭の上の天井に居る

蟬と蜘蛛六首の中なる

のき先の蜘蛛の巢網にかかる蟬

夕映の空に透きて動かす

といへるはよく見らるる實景である。

二 燕渡り鳥の歌

餌をせがみ雛の燕がさしのべし

喉が巢に見ゆいくつもの喉が

あき得るだけ大きくあけし嘴は

親のとび来る方向むきに並べり

ひたすらに餌を乞ふ雛は體中

嘴となり大きくは開く

嘴あけて羽根なき羽根をふるはずは

餌をねだる雛のあまゆる態さまぞ

他の雛に押しつけられて居ながらも

嘴だけはこの雛もあく

は雛の燕の親鳥に、餌をせがむさまが實感のままにうたはれてる。又

糞蟲のこれはものぐさ大き葉を

そのまま糞にあみて着けたる

みのもろともつぶさるべしと知らざらむ

みの蟲みのをたのみて居るも

といふは、動物園七首の中なる

檻の中の獅子高吼ゆれ鳥けだもの

その存在を認めぬが如し

いかめしき虎の檻なる餌あさりて

蟻は出で入る列つくりつつ

と共にその着想は好箇の諷刺吟でもある。渡り鳥八首の中なる

渡鳥の空に變へゆく列の推移

無理のなければ見るに快し

渡鳥雲に消えたりわが立てる

山はむなしき穂すすきの明り

鳥さへや渡らふ道をきむるといふ

生命もつものさびしくもあるか

の歌などとりどりにおもしろい。種羊場の歌の中なる

親しげにわれに寄り來し緬羊の

眼のまがなしも異人の持つ眼

といへるは成る程とうなづかれる。干潟五首の中に

船虫のふためき迷ぐるをこがまし

人に獲らるる柄にもあらぬに

は思はず読む者をして破顔せしめずにはおかない。かうした歌想のつかみ方しらべ方は、恐らく歌よまぬ人にも心ひかるところあるべしと思ふ。

三 易者口入人の歌

他の題材に見ても

洋風建築と思ひし店舗見おろすに

しか偽装しあり街路向きのみを

高層建築の重み耐へゐる大地の

息のこもらふ深夜の街なり

目黒不動境内の易者九首の中の

目黒不動の境内ひろし客もなきに

卦をたてて居る易者がひとり

我が顔を我が手を見つつ説きすすむる

易者の相をわれは見て居る

その他、

賣る土地の良きことのみを人説けど

買ひ得ぬを見抜きし眼そらしつつ

買ひ得ぬを見抜きし眼そらしつつ

案内人は他の土地見むと言ふ

案内者が引き廻す故ひき廻され

見るまでもあらぬ土地も見にけり

の如き、又「別府の旅に盗に遇ふ」九首の中の

盗りし金算へし時に良き室に

わが居しことをかしかりけむ

警察の人のしらべはむしろわが

盗られしことを責むるが如し

などを通じてよめば、ぐつとにらみつめて逆に易者の相を見てゐるのだから、只の歌よみと歌よみのちがふといふ事が自ら分かると思ふ。

四 軍人齋藤瀏

この作者は敘景の歌にも

羽二羽三羽四羽五羽四十雀

落葉松葉ちる落葉松の山

月西にひかり衰へて朝光の

みなぎる富士は天を占めたり

別れ来て行きつまる水もどる水

ここにまひまひただまはる水

衝きあたり砕くる水におしかぶさり

たやすく岩を越ゆる水あり

など僕の好きな歌を敷へあげると際限が無い。そこで此作者は何人かといへば武人である。

陸軍少將従四位勳二等齋藤瀏

牢につながらる身の程しらすかも

といふ歌にも知られてる。信濃なる白馬山麓の酒屋の丁稚より身を起し、軍に入りて三十年、その間日露、西伯利亞出兵、濟南出兵等に参加し、昭和五年に濟南事變の將校の一人として退職となる。次で明倫會の闘士として活動をつづけ、二・二六事件に坐せる唯一の將軍として牢獄の人となり、今は獄を出で一布衣の歌人として、ここにその第三歌集波濤が上梓されたのである。

僕は著者と竹柏會の同人であり、煙霞放浪中或は旭川に或は熊本に相會した事もあれば、東京でも随分かはつた時にも又かはつた處でも對面せる事があり、北支の旅には君をたづねて遠く濟南の軍旅に向いた事もある。しかしここに此歌集を披露してゐる心持ちは、さうした因縁からで

もない。武人といふと凡そ歌などには縁遠く思はれたがる現世であるだけに、愛國的志士的ないはば著者の信念を吐露せる歌を、廣く門外の人たちに、せめてその片影にても披露したいからである。殊に牢獄の歌などといふものは、さうザラにあるものではないからである。

五 退職軍人の歌

熊本の旅團長なりし時の退職吟は數多く歌はれてる。その中から次の四首をあげて見る。

滿洲濟南の日將悉く馘られぬ

言はぬ事かはと支那は言ふべし

對支外交建て直し得ば滿洲の

濟南の將くびきるもよし

衣更へて軽くなりつとそばだてし

吾が怒り肩さびしくもあるか

荷造人の荷を造りつつ談ること

吾に及びて聲ひそめたり

次の偶感五首には退職軍人の心持ちがうかがはれる。

怒り移す人をあさましく思ひぬしに

我の心も頼みなしと知る

また今日も人怒らせつもの言ひの

強き習慣ならひは矯めあへぬかも

我が言のますぐにすぎたいたづらに

人の心に衝きあたるらし

つつぬけに人の心を通りぬけ

われの言葉のわれにかへれる

聲高に確かにものを言ひ得るを

とりどころとせむいくさ人われは

六 五・一五事件、二・二六事件

五・一五事件には「業火に合掌す」十首あり、その中に

個人木堂を悪むものあらずしか思ふに

その木堂は殺されにけり

この道は死もて行く道このみちに

汝なれを驅りたる世をば慨かむ

わが心は遂にひそかに汝が所行を

うべなふものか否みつつ居りて

炎々ともゆる業火に合掌し

滅びゆく世に殉すべきかも

の四首あり、次でさらに來りたる業火の中に、合掌せる者自からも、遂に殉するに至りし心緒の動きもうかがはれる。昭和八年の年頭感七首中には

満洲を今日に致さむ願ひもち

願みなくて戦ひき吾も

済南に吾ら勝ちたれ勝ちしゆゑ

支那を怒らせつと時の司責めき

荒木貞夫大臣となれりよろづ世に

生命もつ歌いまだ吾になし

等。「往事茫々」涙自から下る歌である。二・二六事件となりては「悵々獨り憐む」と題し、

言ひつるは曲事まがごとならねあわただしく

手を口にあつる我となりしか

憤り胸に抑へつつ願みて

他を言ふわれを憐まざらむや

眼を耳を口を塞ぎ居り三匹の

猿を兼ねつと憐れまむかわれ

手を足を自ら封じ似るといへど

達磨はかかる泣顔ならず

容姿魁偉堂々六尺の巨軀の持主である著者の達磨に似たると思へば、末の一首など僕には特に強くひびくものがある。

七 牢獄に下る歌

牢獄の歌が之に次ぎ、別に約五百首ある。その折々の歌を順を逐うて拾ひ出して見る。

心決めてここには来つれ軍服を

脱ぐわが動作滞らむとす

高光る大き帝の臣われの

衿持ほこりはもたむ牢獄ひとやに在りても

房内運動始めよと言ふかの檻の

獣けがものの如あるき廻らな

菊を植ゑ朝顔をつくり日を送る

世の許すわれや牢に繋がる

ここに來て幾日か過ぎし聲あげて

わらふ笑はずでになくしつ

囚はれて心もろくやなりにけむ

笑ふとすれど笑ひあへなく

武人そのほこりをすてて獄に下る、その心情は察するに餘りがある。
更に次にあぐる八首は強く心を打つものがある。

君は志を移すか否か牢に居れば

わが呼吸さへや小刻こきまとなる

牢の中にも言ふことのなくて住めば

人間の聲のいでもすかもなる

永牢の苦に耐へずして氣狂ひし

人ありやなしやなしと答へよ

壁に對ひ獨語する吾や獨語しつ

氣は確かなりと獨語するかも

足らずと思へばことごと足らず足ると思へば

ことごと足れりこの牢の生活くらし

食物を貰ひて住めばこの牢の

一室にして生き得るものを

金なくて病やしなひ得ぬ人もあらむ

勿體なしわれは牢に病みつつ

窓まどに獨を守り牢にある

このしづけさは尊ぶべきなり

刑務所に入りし當初より、終り頃に病の爲め身體に異状を感じ

吾が死ぬるを知る人なしと思ふ時
心たのしくなりし不可思議

と歌へるまでのくさぐさの歌はここにあげきれない。

八 歌に生くるもの

獄中より「佐佐木信綱師へ上る」歌五首を以て結びとする。

歌よみうるこのありがたさ牢にあれど

歌よみ居ればしづけく豊けし

歌の道は崇く尊とし牢にある

歎をよめば歎の消ゆる

歌よみ得る幸を戦場にてよろこびしが

今はたよろこぶ獄舎ひとやにても

歌よみ得る幸をよろこぶに處もあれ

齡とし老いし吾獄舎に今は

獄舎にて歌よむが爲めこの道は

教へざりしと師は歎きまさむ

惻々として涙なきを得ない。が、「歎きをよめば歎きの消ゆる」といふのは吾等のかねがね口にし筆にする歌悦の一つの現はれである。

著者の獄中の歌に

先祖代々と言ふ中にわれも入れられて

名さへ忘らるる時到るべし

と歌つてゐるが、著者が「往事茫々」の中に

歌の道は高く遠けど行き得る道

行くを妨ぐるものあらぬ道

中將大將の生命いくばく萬世に

傳はる歌を吾はよむべし

といつてゐる。

歌集「波濤」、武人としての歌、志士としての歌、幾度か死生の間に劍をとりし人の歌、國を憂へて業火の中に身を投ぜし人の歌、牢獄の中につながれし人の歌である。もともと著者は武人であるが、歌人として立派な玄人である。それだけに短歌界における特殊な飛びはなれた存在である。しかも他人の持ち合はせのないかすかすの體驗の持主である。其歌の想と歌のしらべは今後心を專にし時を專にし、歌悦に恵まれてつづけられる精進により、ここに不朽の尊い業蹟が殘されてゆくものと思ふ。敢て歌の門外の人たちに歌集波濤の一讀をすすめる。

歌がうまいのまづい、歌が好きの嫌ひのなどといふ問題からでは無い。

(文藝春秋 十四年十一月號)

齊藤君は今短歌の道に遊ぶ同人と歌のグループをつくり、毎月短歌人と題せる雑誌を發行してゐる。發行處は東京市荏原區戸越千百七十七番地である。

歌心

此間ある歌人と座談のはしに、もつと歌をつくるべく精進せねばならない。もつともつと掘り下げねばならない。上すべりしてはいけない、安價ではいけないといふ事がくりかへされた。

一々御尤であつて何等反對すべきで無いが、しかし歌をよむ人にもアマもあればプロもある。歌の爲に精根を疲らしてゐる人もあれば、餘技として歌の爲に楽しむ人もある。

いづれの道でもプロになると、全力を傾注してかかる、四六時中その道に没頭して又他をかへりみる暇が無い。又その位でなければさうさううまくなるもので無い。碁でも將棋でも素人と玄人では丸で畑がちがふ。素人で高段者には成り得ないのである、玄人となり全生涯を没頭しても高段者には成り得ないが、精進せずしてその道の極意をきはめ得ぬ事は、猶さらたしかである。

もちろん天才肌であり、又相當の人物であつて見れば、おのづから普通のレベルの人たちの企て得ぬ想を取り出しもする、しらべもできよう。しかしすべての大衆に對してよい歌をつくれと

いふ事はいひうるが、名ある歌人になれといつても、さうさうなれるものでも無く、又ならうといふ氣にさへなれないのが普通であらう。

僕は折々交詢社や日本クラブや學士會館や如水會館などに足を、入れる。そこに多くの會員が球突臺に向ひ碁盤將棋盤を圍み、盛んにバラ球をつきザル碁を打ちザル將棋を指してゐるのを見る、となりの間では謡の烏天狗たちは親不孝な聲を張り上げてゐる。僕はいつもさうした光景を見てほほゑまされ、なぐさめられる、といふのはさうした人たちの仕事の苦勞浮世のいさくさをはなれて、ある時をぬすんで無我無心になつてゐると思ふからである。

さうした意味では歌俳句などの爲に遊ぶ人も楽しく惠まれてゐる。或は猶一段と惠まれてゐるかと思ふ。しかも歌の世界では玄人仲間にて種々派閥がおこり、ツマラナイ事で小競合横目ではらみ合ひ、くだらぬ藤口を利いたり、自我獨尊病にうなされるのを見ると、どこでも玄人になると却てうるさいつらい、素人が何より荷が軽い氣も軽いと思はれる節もある。僕は多くの友だちに歌俳句をよめといつてゐる、それは玄人になれといふのでは無い、又名人になれといふのでは無い。忙中閑日月あり、壺中萬天地に遊べといふ心持ちからである。それが一つの心のゆとりであ

る、心機一轉の境地となるからである。むしろあまり深入りしすぎぬところに淡々として水の如き味があるかも知れないとさへ思つてゐる。

ことに年とつた友だちには、餘生を樂しむべく、老先き短かい心境を靜になごやかに送るべく、病氣にありてすべてのきづなから、なやみから解脱すべく、歌悦に入ることをすすめてゐる。

くりかへしていふ、歌の道に入り精進してはわるいとか、名歌をつくるなとか、名人になるなとかいふのではない。歌をよむ人たちに歌を味ふ歌を悦ぶ、さうした歌心を持つてほしいと思ふからである。

(日本短歌、十五年一月號)

趣味を同じくする爲に旅に出ても未知の人たちに迎へられ、舊知の友と異ならざる親しみを感ずる事は有りがたい事である。殊に歌の友によりゴルフの友により。

大谷尊由さん

尊由さんと僕の間は、尊由さんその人の如く誠に茫洋として、間口はかなり廣いが淡々として不就不離の關係にあつた。

*

ゴルフ界における尊由さんは、屈託のない、わだかまりのない、ゴルフアースらしい大まかなプレイヤーである、稀に一緒にプレーした事もある。茨木の六番でマツシー・ショットがホールのそばへ落ちて止つた時の尊由さんのうれしさうな顔がまだ記憶に残つてゐる。

*

黒面會では尊由さんは、中野武二、佐々木久二の兩横綱を除いてランキングが第三位であつた。僕のやうなイミタシオンの遠く及ぶところにあらず、苟くも本願寺の公達？ として……光瑞さん、木邊さん、光明さん、ことに武子さんなどに想到すると、顔の構造はよろしいが、どうして

尊由さんだけ地色がああもくすぶつてゐたのか、科學的に研究の價值がある。

*

大阪朝日の前社長村山龍平翁が光瑞師を茶の會に招待した、光瑞師は海南の同席を條件にして引うけられたといふので、茶會にはいつも御免を蒙つてゐた僕も翁のお茶の招待にお受けをした。光瑞師も僕も無禮講御免といふことであつたが、眞似をするなら見本に尊由師をといふので僕は兩師の間に胡坐をかかせて貰ひ、光瑞師と一緒に無手勝手流をやる、尊由師は斯道の大家らしく進退動作はもとより、器物や軸物をとらへての應對振りは、とにかく僕には分らないが、鮮かなるものの如くであつた。

*

貴族院では同じ研究會であるが、先方は古參で幹部、當方は新參の駈け出し、しかし古い顔なじみであり、茫洋たるが如くにして細心でもあり、情味の豊かな君は、影に日向に僕をかばつてくれたらしく、御互にいつも好感を持つてゐた。

*

僕が體育協會に顔をつつ込んで見ると、君は加盟團體であるホツケーの會長である。御互に會長としては好い加減なものであつたが、しかしスポーツを理解してくれてる君の、朝野各方面に

顔が賣れてる立場を思へば、君の長逝はかなり大きな損害である。

*
君は拓相となると、僕は拓植調査会の委員であり、當然幾度か委員会なり食卓で顔を會はしもし意見の交換もあつた。拓植獎勵館の設立には君の力が與つて大きい。僕も理事の一人として此方面にも多少の交渉を持つてゐた。君の獎勵館建設妙案も時局の物資統制でそのままになつてゐるが、時局が安定したら何んとかものにしたいたいと思つてゐる。

*
君は北支開發といふ荷物を背負はれる、體協の新人レスリングの猛將八田君が祕書役となりこれ又相互に便宜を得たのであるが、八田君も力落しのことと思ふ。僕が半藏門前の大谷邸をたづねたのはあとにも先にも只の一度だが、それは北支の土地の問題であつた。之も今日では一場の夢である。

*
君が五十四歳で亡くなつたのは如何にも心残りであるが、その職に斃れたのである。しかも場所が蒙古の張家口である。誠に羨ましく限りである。遺骨の一部は當然張家口であるべきだが、北京となり張家口の方はヌキになるとか仄聞してゐる、もしさなりとすれば、それはアウバンでない。

いまでも大きなソケットである。

*
ゴルフの方の記事ばかり多すぎると思ひ、又僕のゴルフの方の資料は乏しすぎるので記事がラフに入つてしまつた、どうかあしからず。
(一四、九、ゴルフドム)

(一) 今床にお掛けの幅物(或は額)は誰のかかれたどんなものでせうか。

(和、洋の書畫何んでも結構でございます。)

(二) 何かそれに就てお話がございましたら併せて伺ひ度く存じます。

答

自筆の歌の額をかかれています。ニセモノでない事だけは確實であります。

(阪念美術)

岩永裕吉

岩永裕吉はどんな人か同盟通信社はどんなものか、いづれ日本へかへりあらためて筆にする事もあらう。ここでは大正十二年國際通信社創立以來故人は刻苦經營今日の同盟通信を築き上げた、斯界の唯一の權威者であり恩人であるといふ事にとどめ、只同盟通信の外への通信……アウトゴーイングサーヴキスについて……一言しておきたい。同盟通信は海外各國の通信社及び同盟通信特派員の通信をうけて内地へ供給する。同時に内地外地支那方面の通信をあつめて内地へも又外國へも送る。今日のやうな國際關係が複雑となり情報がちまちなり宣傳が廣く強くなつてくると、各國共にそれぞれ強力なる通信社を必要とするが、その通信社はいづれも自國の爲めに有利な主張もし釋明もせねばならない、さりとて藥が強すぎて黒を白といはぬまでも、青を紫といふ、さうした事が度をすぎ度重なれば、今度はそのパブリシティが弱くなる。信用が薄くなる。さうなるといくらこちらから通信を送つて見ても、先方ではそれを新聞にのせてくれなくな

る。たまたまのせても小さくチヨピットしかのせてくれなくなる。海外への通信には近頃のやうな情勢になると痛し痒しである。そこに同盟通信の外國へ出す通信に、外から想像のできない一方ならぬ苦心がある。

ところで同盟が世界各國の重なる都市ニューヨーク、ロンドン、ベルリンなどへ支局をおき特派員を配置してあるが、同じやうに海外の第一流國の通信局なり特派員が東京に駐在してゐる。この駐在員がそれぞれ本國の通信社なり新聞社へ打つ電報は、これは先づ十が八九まで新聞にのせられる。又それらの新聞の讀者も日本に關するニュースについては、同盟發の電報よりは、自分たちの國から派遣してある特派員より打つた電報に、より信頼をおくのが人情である。そこでさうした東京駐在の外人の本國へ打つ電報に誤報誤解のないやう、日本へ有利になるやう、東京駐在の外人記者をうまくリードしてゆく事がこれ又同盟の大事な仕事である。現在では英國のロイターをはじめアメリカのA・Pアツソシエーテッド・プレスとか、U・Pユナイテッド・プレスとか、I・N・S・インターナショナル・ニュース・サーヴキスとか、佛國のアバスとか、イタリーのスフテハニーとか、獨逸のD・N・B・ドイッチェ・ナハリヒテン・ビユーローとか、ソ聯のタスなど、有名な通信社をはじめ、ロンドン・タイムスとかニューヨーク・タイムスなど大きな新聞社の特派員は殆ど皆京橋、銀座西の同盟通信社の建物の中に部屋借りをしてゐる……但

しソ聯のタスもかつては部屋借りしてゐたが例の日獨防共となつてから同盟より追ひ立てられ他に移つてゐる……それらの外人記者に絶えず實情を説明する、意見を主張する。毎日茶をのみながら談笑の間に理解なりヒントなり暗示も與へる、さうしたところに並々ならぬ苦心がある。

外人記者相手の故人の數多い古い古い思ひ出の談片を記憶からよみがへらせると、或る時に彼は今日松島事件（大阪の松島と云ふ遊廓地にからんで政治家の疑獄事件があつた）の説明で弱らせたよ、あんなライセンス・クォーターの事件が政治問題になるのかといふのである。或る時には朴烈事件は（朝鮮人の朴といふ入牢者と婦人との獄中の寫眞が馬鹿に大きな政治問題になつた。）いくら説明してやつても分らない、なんで囚徒が獄中で寫眞を取つたといふ事が政治問題になるのかといふのだ。或る時は光文事件、昭和といふ年號の發表される時、光文だといふニュースが出たには參つたよ。外人記者に漢字の知識は無しさ、昭和、光文、何々々の字義の説明からしてうまく行かないのさ。曰く何曰く何。

最近日英會談の時彼は今日は英記者であつたかそれともクレギー大使であつたか、會談して天津租界の犯人引渡しで大にやつたよ。おれは頭から租界がイケネーのだ、今度の犯人は蔣介石側からのテロ事件だが、今までの支那ではその時の政府を覆さんとする者が租界に本部をつつて大ピラに陣取つてゐる。政變で敗れた者は租界に遁げ込んでお膝元で悠々とアグラをかいてゐる。

しかもその國の政府が手が出せねえ、そんな事がロンドンにあつたらどうなるのだといつたら、黙つちやつたよと、彼氏例により卷舌で一席辯じた事があつた。

今日も新京で吉野信次君の自邸へ招かれた。星野長官外二、三の相容と故人の爲めに黙禱をさされたが、さて岩永のあとがあるかといふ事になつた。それは無い。誰が誰かといろいろの名前が話題に上つたが、今外交畑言論畑どこを見ても適任者が見つからない。

勿論いづれ誰かが後任となると、よい人を得たといふ事はいふ積りであるが、何分岩永だけの國際通信界の歴史を持つてゐるものは無い。故人が心臓を病んでからいつも無理を押し來た、命にカンナをかけて削つて來た。しかし彼に代る人がない、もし之にかはる人があれば早くかはらして故人に少しラクをさせたかつたが何分にも無い。

ロイターやA・Pなどの幹部と古い顔なじみで知り合ひであるといふ點では他の追隨を許さない。英米の大使などを電話へ呼び出しハローと持かける、ゴルフ場や東京クラブで遊び友達となつてゐる。

さうした付き合ひも各國では珍らしくない、定石だが、日本では殆んど無い、儀式ばつた公式の宴會などで顔を合して二言三言しゃべつて、それで大に歡をつくした事になつてゐる、大に知り合ひになつてゐるつもりである。しかしさうした楷書の人でなく草書の人をほしいが無い。ペラペ

ラ外語のシャペレル人が少ない上に、さらに明かるく朗かな度胸もありウキツトありユーモアあり押しの手もある、そんな男は數へるほどしかないといひたいが數へたくも無い。

彼氏が幾多の國際會議等でいかに裏面に活躍をつづけたか世間には一向に知られてゐないが、さうした舞臺裏の人があまりにも少ない、貧弱である。それだけに大事なポストである。あれかこれかと僕らは今まで随分同人の間に物色をつづけたものだが中々見つからない。

日本も人材益々多くなり、臺閣に列すべき大臣候補に至りては拵にはかり切れないほどある。しかし國際情勢益々紛糾を極むる時、日本の國際的立場に縦横活躍すべき有能の人は喉から手が出るほどに欲しいが、あまりにもその人が乏しい。

その極めて少數の立役者の中の一人が亡くなつたのである、此重大時局に直面して、邦家の爲めかけがへの無い一大損失である。只故人との私交の爲めに暗然自失してゐるのでは無い。何んとしても残念である。

(二四、九、二、新京 モダン日本)

松木幹一郎君

一小引

逓信省の第一期が林董、栗野愼一郎、塚原周造、光妙寺三郎、田健治郎、若宮正音諸先輩の時代とすれば、小松謙次郎、湯川寛吉、中谷弘吉、内田嘉吉、松永武吉諸先輩の時代が第二期といふ事になり、松木幹一郎君はまさしく第三期になる。一面、野村徳、宍戸省三、田中次郎、竹内友治郎君等々既に故人となつた人たちもあるが、一面、川村竹治、角源泉、加藤敬三郎、坂野鐵次郎の諸兄をはじめ、かくいふ筆者などの事を思へば、六十八歳の壽必しも短かしとせざれども、まだまだ君の健康と臺灣電力の將來に多大の期待がかけられてゐたので、交友長く四十年にわたりにし筆者としては哀悼の念と落寞の感に堪へざるものがある。

筆者は近頃は毎月知人追悼の筆を執らぬ事はない、一つは筆者に執筆といふ業病があるからで

もあるが、何分にも近火になつて来た事は争へない。今日となりては逓信省に現役の人たちで松木君を識る人はもはや稀れであり、君と机を共にし卓をならべ撞球臺を囲みたる者に至りては、もはや筆者など數人をあますのみであらうから。ここに思ひいづるまにまに故人追悼の筆を執る事にする。

故人の公生涯は大體三期に分たれる。第一期は日清戦役の直後から日露戦役の後にわたる逓信省通信局時代又は明治時代であり、第二期は鐵道院、東京市電氣局、山下汽船、復興院、東京市政調査會等にわたり大正年間を中心とし、第三期は臺灣電力乃ち昭和時代である。

二 郵務課長の松木君

逓信時代に故人は、知る限りでは郵務課長として又廣島郵便局長として活躍をつづけた。君が郵務課長時代に郵便法及鐵道船舶郵便法、郵便爲替法又犬飼柔吉君の電務課長時代に電信法が相ならんで起案せられ、省内及法制局に於て審議せられ、議會に提案し通過を見たのである。當時の通信局は

局長	久米金彌
庶務課長	中谷弘吉

郵務課長	松木幹一郎
電務課長	犬飼柔吉
工務課長	大井才太郎
外信課長	池田十三郎
鐵道船舶郵便課長	井出繁三郎

といふ顔觸れであつて、各法案はそれぞれ主管課に於て立案せられ、古市次官、久米局長、小松湯川兩參事官、中谷課長外主管課長、爲替貯金管理處の川村竹治君など参加していはば省會議に移された。當時の通信局は木挽町の舊逓信省構内であつたが、まだ横列になつてゐる倉庫の中で、¹屋根は低い風通しは悪い、窓が小さくて晝猶暗い。僕は巢立ちしたばかりであつたが起草委員といふので猪越倉吉、山崎太郎、鈴木龍太郎、遠藤達などの諸君と湘南大磯あたりへ遠出して専門家の起草してゐるのをわき見して折々茶々を入れたり、尻りくつをこねたものであるが、漸く脱稿すると歸京する。例の倉庫の中なる郵務課長室で松木君が音頭をとり随分根氣よく會議が續行されたものである、それがさらに通信局長室の會議になる、この方の議長久米局長のネバリ方といふものは又一段と根氣がよく、三伏の候倉庫の中で毎日夜に入りて、も一ヶ條、も一ヶ條と八時九時頃まで引つばられて庫づめになり、一同汗だけでヘトヘトになつたものである。

當時の省會議さらに法制局など此方にはいろいろの思ひ出があるが、そんな事はここに省略する、今日は遺物として僅に川村君の電信法規要義と僕の郵便法規要義が残つてゐる位にすぎない、關係した諸君も殆んど尙抜けになつてしまつてゐる。何より松木君が急に亡くなつた事を思へば、一度川村、遠藤、猪越諸氏の殘存部隊と一會でもして昔の思ひ出の虫干しでもして見たい。

郵務課の會議であつたか、たしか一と通りケリがついてから、松木君をおん大に十數人が小田原へズンズンノンノンと出かけて大々的慰勞の盛宴？ を張つた事がある。貴族院の書記官から逓信書記官を兼任した故小原駿吉などは、かかる折に一目散にかけつけた事を覚えてゐるが、此へんはあんまり精しく公表の限りでない、ただあの時の浴衣がけの記念寫眞があつたはずである、協會の方でさがし出して轉載してくれたなら面白い記念であらう。

三 廣島局長の松木君

廣島郵便局長時代に日露戦役がはじまつた、いや日露の風雲急となり、松木君廣島へ轉任したのかも知れない。宇品の築港が崇つて知事の職を去つた千田貞曉氏が後年になつて敍爵されたほどあの宇品の港が日露戦争に役立つたので、宇品は兵站の基地となり、運輸司令部もあつたやうに思ふ、吳の軍港もそばにある。何よりも大本營が廣島におかれたのであるから、當時の廣島の

重要性といふのは想像以上である。當時川村竹治君は長崎局長としてこれ又佐世保をひかへ仲々忙しかつたが、當時宇品から出征した野戦郵便長も米田奈良吉、竹内友治郎、多田稔の諸君は故人となつてゐる。健在といつてよいのが加藤敬三郎、小森七郎の兩君位で、角源泉君は今恢復の途中にあるが病床にあり、故人の訃を聞きて僕のところへ感慨にみちた書信をよこしてある。それも無理からぬ事で、角君は臺灣電力創立當時の總督府土木局長であり、又引つづいての副社長であつたのである。

僕も廣島時代に屢々故人に御世話をかけた一人である、恐らく此へんの記事を見て感慨にふける連中は陸軍畑ではもはや一二數へるほどしか残つてゐないが、逓信畑の古顔には飯田精一、坂野鐵次郎兩兄をはじめ、まだ相當に生き残つてゐるはずである。御互にそれぞれ自由に追憶にふけり故人の冥福を弔はうではあるまいか。

四 大正時代の松木君

何故松木君が逓信畑をあとにしたか、それは人の行く末と水の流れてである。當時の逓信省通信局では高等官三等が一打以上行列そろへて足踏みをしてゐた事も一因であらうが、要は君が後藤棲霞伯に知られたからである。逓信大臣として鐵道廳總裁をかねた後藤伯の下に鐵道廳參事とな

り、次で明治四十四年東京市の電氣局長となり、更に市の參與となつてゐるが、少くとも電氣局長としては君は初代であつて帝都の交通及電燈事業には大きな礎石を残された事と思ふ。大正四年市を退き翌五年から十一年まで山下合名の總理事山下汽船の副社長となつてゐる。此間が丁度僕の臺灣時代となつてゐる、歐洲大戰に際會して山下汽船の飛躍をつづけた時で、臺灣はもとより佛領印度支那方面にも航路をのばしてゐたから、多少の交渉を持つてゐたが、僕としては故人の業績の片鱗を知るにすぎなかつた。

その後松木君は帝都復興院と東京市政調査會時代にうつつてゐる。市政調査會の堀切善次郎君の故人を悼む一文があるから、その中より一部轉載する事にする。

大正十二年關東地方に大震災が起り、時の内務大臣後藤新平伯が帝都復興院總裁に任ぜらるるや、伯は松木君を起して同副總裁の地位に置いた。君は副總裁として各方面との政治的事務的の折衝より事務全般の統督に至るまで縦横の手腕を發揮せられ帝都復興のため大いに盡さるるところがあつた。その後復興院の組織に變更があり、君は官を辭して東京市政調査會の事業に専念せられたが、其の後と雖も帝都復興事業に對しては、市政調査會を指揮して直接又は間接に當局を助けて大いに盡されるところがあつた。殊に復興事業の根幹たりし土地區劃整理事業の遂行については都下十四の學會又は研究團體を糾

合して、街頭に進出し或は各區に演說會を開催し、又は文書にその必要を宣傳して、熱心に市民を説得せられるところがあつた。帝都復興事業が順調に進み得たのも、裏面におけるかくの如き努力が大いに役立つて居ることを見遣すことは出来ない。(中略)

東京市政調査會に對する安田家の寄附指定條件中には、日比谷公園の一角に會館(公會堂附設)を建築することなる一箇條あり、この條件は前以て東京市においても市會にはかり承諾を得て居たから調査會は直ちに建築に着手せんとしたが、監督官廳たる内務省方面に異論ありて、種々なる難關に逢着し、又工事に着手後においても、大藏省の方面より意外なる故障も生じて、松木君の苦心は一通りのものではなかつた。この問題がかくの如く行儀むに至つたのは、單に事務的な理由のみによるものではなく、『その以外のある事情を加へたものと見る外ない状態』であつたと同君は追懐してゐられる。しかし君の献身的努力により、昭和二年八月漸くにして建築の認可も下附せられ、その後建築も順調に進行することになつた。當初の出願以來約二年、東京市への出願日より計算すれば足掛五年の長日月を要して居るのである。君が市政調査會のために最も苦心せられたことと言へば、或はこの點が最も大きなものであつたかも知れぬ。君の献身的努力なかりせば、或は今日の市政會館及び日比谷公會堂は遂に建設せらるるを得ずして終つたかも知れないのである。この點からだけ見ても、同君は本會にとつての大恩人であると言はねばならぬ。

五 臺灣電力の松木君

昭和二年故人は専務理事の職を退き四年末に臺灣電力會社に入社した。この臺灣電力は僕にとりては又あまりにも思ひ出の深いものである。とても簡単に片付けられないが、さう長々と書けないから、このほど臺灣日日新報の紙上に筆にせる追悼文の一部を轉載する事にする。

私が臺灣に赴任したあくる年、大正五年の春臺灣共進會の折、松木君は伊澤多喜男君と臺灣に見えた。それから幾もなく臺灣電力の計畫がすすみ、他日其會社が君により育て上げられようとは神ならぬ身の御互ひに知るよしも無かつたのである。臺灣電力は工事計畫よりも電力消化難といふのでかなり非難攻撃を浴びた。會社の機構についてもかなりいろいろ注文が出た。馬場鉄一君の骨折で律令が法制局を通過する、いよいよ豫會に豫算が提案されると今度は一層うるさくなつて来た。よろしくないと言ふのではない、いよいよ甘くなつてくると蟲がたかつてくるのである。さきに非難した連中も百八十度轉回してたかつてくる。株はプレミア付で羽根が生えて飛ぶ非常な景氣である。今度は手際よく賣り飛ばして涼しい顔をする。その代りには？ 歐洲の大戦後のパニックにからみ、産騰は高かつたが肥立ちがわるくなると、今度は又遠慮なく非難の聲を放つたものである。

順調に行かない旨はかどらなければ非難の聲が起る、それは當然すぎた定石であらう。とにかく肥立のよくなかつた臺灣電力もかなり難航をつづけつつ、昭和五年松木君の就任を見ることとなる、外債

の募集により日月潭の再興工事の竣工を見、さらに第二期の發電計畫に移り、さらに日本アルミニウム、臺灣電化會社等の創立を見る事となつた。そこには時の動きもあらう、しかし何といつても臺灣電力は君が約十年に近かい努力によりてまさしく育て上げられたのである、動力には石炭もあらう、石油もあらう、しかし水力こそ不絶恒久の力の源泉である。それが島國であるだけに臺灣には水力が絶対の存在であらねばならぬ。單にソロバンに合ふ合はぬの問題でない。しかし問題でなくても事實問題となり長い間モチについてゐた。かなり長々しい難航であつたが、君によつて船はまさしく彼岸に着いたのである、産騰役をつとめた私としては、君に對し唯々感謝の念に溢れるばかりである。

昭和六年臺灣に遊びしとき松木夫人と既に工事中の日月潭に思ひ出話にふけつた事であるが、私にはそぞろに奇しき日月潭電力の機縁が思ひ出されてくる、電力會社の經營は遞信省で我友であつた角源泉君が土木局長より轉出し、次で同じく父の友であり我友であつた遠藤達君が次ぎ、同じ遞信畑の川村竹治君が總督として監督にあたり、次で同じ畑の松木幹一郎君が社長をつぎ今や復興の途次にある。明治二十四年より二十五年にわたる第一高等中學校の寄宿舎西寮三番室の大城大藏君が此電力事業を提唱し同室の山形要助君が時の土木局長となり、同じ室の僕が長官として會社の創立を見、今や同室の太田政弘君を總督に迎へて回春の光を仰いで来たのである。

上記の文は臺灣の讀者に披露するため客旅の中で匆々ペンをはしませたもので辻つまの合ひにくいところもあつたが、臺灣電力については遞信關係では安達房治郎、高山敏行の二君があるか

ら、此程度でこの上に述べる事はやめにする。只僕としては臺灣電力社長として君がここ数年の仕上げをすませてからといふ感を禁じ能はない。これは僕一人の言では無いのである。かへすがへすも君の急逝が惜しまれる。

六 平河亭の松木君

臺灣日日新報に筆にしたる記事が更につづいてゆく。

公的生活をはなれて私と松木君と一番長く親しく私交をつづけたのは撞球時代であつた。明治三十一年の末ころから麴町平河町俗稱馬丁横丁に程近く住居してみたので、共に平河天神傍の平河亭で撞球の集立ちをした。毎夜のやうに缺かさず通ひつめたのである。あれから木挽町の東亭、日吉町の日勝亭、さては同氣俱樂部と、その頃君とキューを手にして顔を合はさぬ日はなかつたのである。宴會の席からも同氣クラブまで借り下駄でコツソリ抜け出していつた事も一再ではなく、まさしく共に撞球に淫したのである。

春風秋雨四十年、近頃日本クラブで折々顔を合せる、私は今は好きな好きな圍碁、將棋、撞球、そのいづれも再び始め出すと際限が無い、又淫してはと齒を喰はばつて我慢してゐたが、それでも松木君が球つき場で相手なしに立つてるのを見ると、つい二三回久し振り本當に久し振りに君とキューを手にした事がある。今にして見ればせめてもの思ひ出である。さらに最近同じクラブにて川村竹治君などと久

し振りで選信畑の舊友共に一會せばやと話し合ひ、木挽町の清水その昔のみどり屋にて、藤岡組を中心とし、十名足らずが相集つたが、まさしく三十餘年振りの思ひ出の會であり、同時にまさしく名残りの會合となつたのである。それからいくばくもなく田邊新選相の就任祝賀會には又何百人と知れない舊友が學士會館に相集まり、しかも君は總代として委曲をつくした祝ひのあいさつを述べたが、今にして思へば之も君が選信部内の人々への暇乞ひとなつたのである。誠に名残り惜い事ではあるが、そこにいささかせめてもの心やりもある。近頃僕ものべつに友人の追悼記に筆をつづけて、何となく氣が引けるが仕方が無い。僕もなんといつても否應なくあとを追つかけて行かねばならない事だけは確かである。その節は三途の川かどこか知らないが、あの世にも撞球場があつたなら、君に案内して貰ふ事にする。

(六月十日京洛の旅の窓にて)

七 終りに

松木君につき僕よりも長く親しくした友人も少くないと思ふ。しかし故人は遠慮深く注意深く口もどうかといへば堅すぎる方であつた。いづれかといへばチミな方であつたから花々しかつた後藤伯と相表裏をなしてゐる。だからよい女房役の一人であつたと思ふ。堀切君の松木君の人となりにつきいへる中に

俊敏にして精緻、事をおろそかにせぬ半面に温味のある、そして他に對し寛容な人であつた。仕事に

對して熱心で辛抱強かつた。事務家であつたが理想主義者でもあつた。豊富なる經驗を感し事に當れば立ち所に意見の立つ點に於ても他の追隨を許さぬ人であつた。

とあるが、故人の輪郭をよくあらはしてゐる。

まだ筆にしたい事も少くないが長くなりすぎる。いやもう長くなりすぎてゐる。しかし多面にわたりて業績を残した故人はヂミであつただけにつつしまやかであつただけに、かかる機會にせめても紹介さるべきであると思ふ。殊に僕としては臺灣電力に苦心經營をつづけられた故人に對し、ペンを執る事はせめてもの心やりである。重ねてここに謹みて故人の冥福を祈る。

追記 東京會館における故人追悼の會には百餘人招かれてあつたが逓信關係の人は極めて少數であつた、席上乞はるるままに逓信時代の故人につき語つた。昨今は雜用の爲め時が無く、逓信時代の記録をたしかめるべく舊友と話したり又反古をあさる事もできない、脱漏誤謬も多い事と思ふ、幸に補正してほしい。七月二十五日郵便貯金五十億記念會は逓信省の主催として開會され、田邊逓相も出席された、僕も登壇した。その場處が故人にとりて誠に思ひ出の深い日比谷公會堂であつた。

(逓信協會雜誌、十四年八月號)

岡實と僕

一 向陵及び赤門時代

大和の國吉野川の流れに産湯をつかつた男と、その下流なる紀伊の國紀の川に産湯をつかつた男は、明治二十三年憲法發布の年に一中に學窓を共にしてより、影の形に伴ふが如き生活が約半世紀に亙りてつづけられた。

大和の男は岡實であり、紀伊の男は下村宏である。年齢に二年のちがひがあつたとはいへ、この十一月廿日といふに大和の男は此世をあとにした。形か影か盾の表裏か鳥の兩翼か、ともかくにも番ひの一つがその影を消したのである。この追悼文は「岡實を悼む」としてよいのだが……それも岡實君とか岡實兄とかいうては感じが出ない。……あまりに僕との關係が深いから「岡實と僕」としたのである。

一中……その頃は東京に府立の中學は一つしかなかつたが、高等中學校は全國に東京、仙臺、

京都、金澤、熊本と五ヶ處にあつて、今の一高は當時一中となへられ豫科は三年、本科は二年、入學のはじめは寄宿寮に入舎する事になつてゐた……その一中にいろいろの三人男があつた、色が青いので青瓢箪の三幅對といはれたのが、岡實と夏秋龜一と下村宏であつた。……近頃の下村海南の色はかなり黒くなつて、たそがれ會々員にまで推薦されてゐるが、これは年中無帽で日やけしたためであるイミタシオンである。模擬品である、まがひものである、地色では無い、女にも見まほしい皮膚の色は首から下にかくれてゐるのである。

岡も下村も豫科では組もちがひ寄宿寮も隔つてゐてよく知らなかつた。本科の一部乃ち法文科になつて友達付合をはじめたが、僕はどうした拍子か本科になつてから成績は各學期試験を通じ一番をつづけ出した。彼は中軸の上位であつた。上野貞正、松浦鎮次郎、末廣重雄などいふ連中が僕と首席を争つてゐた。ところが大學の政治科では各地の高等中學からも競争者が参加した。それだけ舞臺が廣くなつたが、彼は急にスピードを出しはじめ、卒業の時はたしか上野が一番、彼は二番、それへ僕とか松浦とか松本重威、湯淺倉平、山川端夫、龜山理平太などいふ連中がくつわをならべて之につづいた。さらに官私の大專專門學校などをはじめとし、全國の俊才が文官高等試験の登龍門にしのぎをけづつた時にはつひに彼は首席となり、松浦第二、下村第三といふ順になつたやうに記憶する。ところが赤門時代には彼と我とはあまり親しく付き合は無かつた、

我黨の連中は岡、松浦の連中をラバンド派だとか糞勉強組だとかケナシタものである。自分達の勉強しないのを豪傑氣取りに得意がつたものである。ラバンドとは獨逸の學者の名前で彼等はラバンドのスターツウキルトシヤフトレーレであつたか、何んでもそんな本を輪講してゐるのをシヤクサイと眺めたものである。だからフォックスウエルといふ英國から見えた經濟の先生の放逐運動をした時には、そのガムシヤラ連に僕がお先棒となり、上野、湯淺、山川などいふ名前があり、松浦、岡などが之に相對立したものである。

二 彼と我との結婚

今から考へると誠に他愛の無いもので、若い時は、屁のやうな事に癩癩をおこし、イキリ立つて、なあに文句いふなら退校するばかりだなどと、お話にもならない事にムカ腹を立てて、わざわざ混雜を引き起こし、随分和田垣先生や穂積八東學長に手数をかけたものであるが、さてどうやら無事に卒業してから、彼は法制局に、我は逓信省にお役人となる。我は當時通信法規の改正といふので二年越し三日にあげず法制局の第二部に通つたが、彼は第一部龜井英三郎部長の下に下岡忠治、上山滿之進、江木翼などと卓をならべ、今の法制局とちがつて當時はとても勢力を振り廻したものであつたが、その頃今の政子夫人をめとる事になつたのである。夫人は元第一銀

行頭取佐々木勇之助翁の長女で、長兄の現満鐵副總裁の謙一郎君と、それへ勇之助翁の兄愼思郎翁の長男長女はいづれもイトコ同志だが姉妹以上に親しくしてゐた。その中から政子さんが片づくと、愼思郎翁の長女文子さんも早く片づかねばと、今度は新郎の彼氏は婿さんを物色して僕に白羽か黒羽か知らぬが矢を立てた。僕はカカアは洋行して歸朝の上の事とこの話に油が乗らない。それを彼はとても根氣よく攻めよせて来た。當時彼は書信にシーモアといふ名をつかつたものである。それは北清の團匪事變に北京籠城の急を救ふべく列強の軍隊が天津から北京へと攻めよせある。シーモアはその總大將の名前であるが相當苦戦といはうか、ノロイといはうか、かなり長い時を費やしてゐる。彼自らをそのシーモアにたとへて僕を辛抱強く口説いたものである。僕も學窓時代にはあまりウマの合はなかつた彼にして、我の爲めにそれまでに熱心になつてくれるのかとその意氣に感じたうとうお文さんを貰ふ事になる。そこでかなり入り組んだ事情があつて、見ず知らずであつた石黒忠恵子を媒酌人に願ふ事とし、結婚の式をあげたが、此縁組は彼氏の熱意の實が結ばれたので、それから僕等夫妻は石黒さんと下媒酌の故村上彰一翁と岡實氏此三軒へは春秋ここに約四十年を通じ、廿二日といふ結婚記念日には、毎年でない毎月あいさつ狀を差出している。岡家で書狀を藏めてゐるならば恐らく僕の手紙はかなり多く占めてゐるだらう。又僕の手紙に彼の手紙もけだし少くない。これらは他日ゆるゆる虫干もし披露する時であらうと思ふ。

それから彼は農商務省に入り白耳義に留學する。我も一足おくれて白耳義に留學する。此洋行の前後彼は私立大學の講壇に立ちて行政法の講義をする。僕も今の早稻田、中央、法政、東京商業等の諸大學の前身である各學校で財政學の講義をする。彼に行政法の著作あり、我に財政學の著作あり。彼は工場法それから産業組合法等の制定にかなりの努力をつづけたが、我又貯金法の改正、振替貯金制度の實施、次で簡易生命保險制度の創始に微力をいたし、不思議な因縁で彼は農商務省の商工局により、我は遞信省の貯金局により、いづれも社會立法に多少の業績を残したもので、さうした事が兩人の法學博士となつたゆゑなのであるから、いかにその形影相伴うていついつまでも離れなかつたかがうかがはれるのである。

三 農商務の酒豪連

此間に兩人の間に明かに一つちがつた事は、彼は酒を嗜んだ事であり、我は酒は飲めなかつた事である。卅前後の血氣盛んな頃であり、殊に日露戰役で氣も立つてゐたから、京橋木挽町といふ場處柄もあらう。年少氣銳の若者たちは、かなり新橋村に發展したものである。遞信組はどちらかといへばあまり酒をのますに騒ぐ方であり、農商組はどうかといへば酒は浴びる方であつた。遞信組では松木幹一郎、飯田精一、川村竹治、野村徳、坂野鐵次郎、田中次郎、利光平夫、中山

龍次などの面々があつたが、中山とか僕などはあまり酒がのめない。全く飲めなくて今猶頭健である。農商組では磯部正春、崎川才四郎、松崎壽三、松本丞治、安河内麻吉、勝部（後岡崎）國臣、三松武夫、岡本英太郎、岡實、鶴見左右雄、片山義勝、永井亨などの名前が記憶にうきあがるが、酒豪を以て任じたものが安河内、勝部、三松、岡、松本等々であつて、之に大浦兼武翁の秘書官であつた堀貞は遞信組でもあり後農商組でもあるが、これ又酒豪中の傑物であつた。結局酒豪連は皆丈夫な連中であつたが相次で亡くなつてしまひ、岡、松本兩雄が最後に生き残り、その中から岡が又此度浮世におさらばをしたのである。

外遊中、岡、松本の兩雄がいかに羽目を外づしてブンメツたかは、松本君によりて記憶からよみがへるものもあらうが、彼氏のお通夜の晩の話の中にも、酒豪連が夜深く稻毛から千葉へ徒歩で乗り込んだ逸事譚も出た。又當時彼氏は京橋から自宅へと車に乗つたが、車夫は小石川雜司ヶ谷の邊でたうとうへたばつて「旦那もう走れません」といふ。「なんだ走れない……一體ここはどこだ？」「ここは目白です」「馬鹿目白ぢやない目黒だ」といふので、結局車夫はもう動けないといふ、彼氏は車からはふり出されたうとう交番へひよろけ込む。交番では「ここから目黒へは大變です……省線や自動車など氣の利いたものは無い時代である……もう一時間程すると電車が一番が出ますから」といふので、交番を假ねの宿とししばしまどろんだのも一つ話に残つてゐる。

る。我等も折々彼と酒席を一にしたが、何分相手は酒が強い、顔面ごとごとく青くなつて議論は益々ねばつてくる。どうも宴會ではあいつは苦手だと遁げを張つたものである。尤も彼氏も松本君もその後酒に對し警戒をはじめたから、近頃交遊の諸君は談論風發斗酒敢て辭せざりし酒豪としての彼氏を知らないと思ふが、とにかく早くから節酒したからあとへ生き残つたのであり、又その強酒が十二指腸潰瘍の因を爲し、遂に六十七歳を一期とするに至りし事も、今さら是非も無い次第であるが、とにかく何事も程々にせぬといけない。殊に飲酒その度を過しては何かと感心しない副産物も伴ふから、結局壽命をちぢめる事になるのは今更ここに筆にするも管であると老人のくり言を書き添へさしておいて貰ふ。

四 簡易保險と工場法と米騒動

貯金局で僕は簡易生命保險をはじめんとするや、農商務省は保險事務を主管するといふので、そこに兩省間の所管繩張りといふ點から對立を生じた事は當然すぎるが、當時商工局長は大久保利武氏通信局長は小松謙次郎氏で、保險課長の岡實と法規課長の下村宏が正面對立する。此間彼氏にはかなり苦しい立場もあつた事と思ふが、極めて純理の上に立ち私心や情實の上に超越せる彼は、秉公至平その中正を保ち、政黨や官場によく見る泥仕合に終らざりしは、簡易保險創設の

歴史に逸すべからざる事で、馬場鎮一氏去りて後この邊の事情に通ぜるは、大久保利武、松本丞治、末松借一郎諸氏を残すにすぎぬかと思ふ。——當時の農商務省には猶然るべき人があつた事と思ふが、保険局における業績などに通じてあらためてしらべて見たい。

簡易保険が當時保險會社その他からいかに反對がありいかに難産であつたかといふ事から推しても、工場法制定のいかに面倒であり厄介千萬であつたかといふ事が想到される。當時いまだ社會政策につき朝野の關心きはめて薄き頃、あれだけの立法を見し事は容易ならぬ苦心と努力の結果であつて、これはいづれその道の専門家から産業組合法の制定等と相まちて、別に詳しく筆にされる事があるべしと確信する。

彼の商工局も僕の貯金局もかなり長つづきして、その間に彼も我も身上に折々動きを見んとし
て見るを得ず。我は簡易保險の創設に縛られてる間に、大正四年秋臺灣總督府民政長官に轉出した。その在職中に僕が辭表を懷にして上京したのは、大正七年の米騒動に臺灣米を内地へ出せといふ、出したくも出されぬといふ問題であつた。あたかも今米が時事問題の中心になつて來たから此折を思ひ出でて、今さらに感激の無量なるものがあるが、その米の問題で彼は商工局長の椅子から勇退したのであつた。

大正七年夏寺内内閣の折に米の不足といふ事が政治化し遂に米騒動焼打ちとなり、内閣の總辭

職となつた事は猶記憶に新なるところであるが、當時仲小路農相は米の取引停止とか、小口落としの禁止とか、暴利取締令の發令實施とか、次ぎ次ぎにやる事爲す事次第に逆效果にならぬまでも豫期の成果を見るに至らなかつたが、岡局長は常に理論から實際からかなり農相に意見も述べ反省を求めた。しかし仲小路農相は——それは僕も長らく遞信次官として上司に仰ぎ彼も我もよく叱られたが、よく愛しよく引き立ててくれた先輩であつた——例の強氣でヒタ押しにやらうとする。例の暴利取締令も閣議で話題に出た洋行土産の翻譯であり、彼氏もかなり之には反對したさうであるが、農相は司法官時代から評判の強引に押し抜いたので、彼氏も商工局長であつた以上責を負うて寺内内閣の辭職と共に一介の浪人となつたのである。この邊の事情は同窓でありその後任となつた岡本英太郎君から、精しい當時の述懐談を聞いておいてほしいものである。

五 四月會の話

ここで一寸話が横道には入るが、いつの事であつたか、とにかく學校を巢立ちしてまだ間の無い頃である。とにかく四月の事であつた。何かクラス會でもあつたか寄り合があつた。その席上に顔を合はしてゐた連中のうちから、御互に縁ありて同窓となり世の中へかけ出したが、朝に野にこれから先きの運命はどうなるか分らない。こつちがしがみ付いてゐても突き放される事もある

らう。又先方が引止めても當方から引き下がらねば男が立たぬといふ事もあらう。難病にかかつてみじめな生活を逐はねばならぬ事もあらう。御互に今から毎月なにか積立てて、さうした羽目になつた時の仲間を幾分とも手助けする事にしようぢやないか、まづ五圓から、そのうち十圓にも百圓にもなりうる時はあるだらうぢやないかといふので、よしそれもよからうと名も四月會となづけ、即座に満場一致賛成し實行しはじめたのが、

岩田 宙造 岡 實

小橋 一太 坂井 鐵次郎

下村 宏 松浦 鎮次郎

の六名で岩田宙造が胴元となり會計兼利殖掛となつて居た。當時懐中寒しい中から一同チビチビと掛金をする。胴元からの督促にも相當骨を折らしたもので、これがいつまでつづいた事であらうか、もし今までつづけてゐたなら、かなり莫大なる資産となるのだが、そのうち胴元は辯護士界の大物となる、小橋は政黨の幹部となるといふやうに、いづれも健康であるばかりで無く、胴元の外の五名は然るべく健康で官海も相當長く游泳する、はや職を去つてもすぐ食ひはぐれる懸念もなくなる。そんなケケチした掛金などは、不用である贅物であるといふので、いつのまもなく中絶される。胴元ではただ受け入れてあつた金を利殖する。たまたま會合した節に胴

元から報告がある。一同はウンさうかと鼻の先で聞き流す、事ほど左様に、金額も知れたものであるし、またそれにこだはらないほど我等も裕福に？なつたのであつた。

六 巴里會議勞働會議國際聯盟

四月會の連中が岡が浪人となつた、どうしたものであらうといふので寄り合つたが、たまたまパリの媾和會議がはじまる、ここに經濟上の相談相手になる人をと人材を物色してゐる。岡君は適任であると推舉する。たしか同窓山川端夫君なども口を利いたかと思ふが、彼は深井英五君と共に隨員として巴里に出かける事になつた。この時の事を山川君は次の如く語つてゐる。

この媾和會議で、もつとも岡さんの働かれたのは勞働條約の問題で、當時、戰爭中勞働者が非常の功績を挙げた。だからこの勞働者の社會的地位を改善しなければならぬといふ問題が俄に起り、政治家も輿論に押されてそれでは勞働約定を作らうといふことになつたのである。岡さんはこの専門委員に落合謙太郎氏とともになられ、英國流の勞資の觀念から脱却し日本の特殊地位を各國に認めさせることに成功したのであつた。この功績は没することの出来ないものである。その關係で第一回の勞働會議には政府代表として出席されたが、終始對立し續けたわが國の勞資の代表間に挟まつて、非常な困難な立場に立ちながら、よくその難局を處理され

たのは、岡さんであつたればこそと俚げられるのである。

いづれ精しい事は又別に當時親しく關係した諸君の中から筆にされる事と思ふが、ここに一寸挿話としておきたい事は、當時の労働會議における彼氏の代表問題にからんだ伊東巳代治伯の手記である。伊東伯がいつも大事記を記録にとどめておく事は有名な話であるが、その手記中にこの國際労働會議に鎌田榮吉が首席代表、岡實が次席代表である事の不可にして岡を首席とすべき事を力説しある事は、全然伊東伯を知らざる岡實としては未見の知友を得てゐたわけで、しかもさうした史實が此親にして此子あり、現に東京帝大法科教授岡義武君の文献涉獵の中から發見されたといふ事も奇しくも又美しい因縁談である。

彼は次でジエネーブの國際聯盟に經濟封鎖に關する帝國を代表して出張した。現状維持の建前である聯盟創設當時に、海外に延びんとする日本の立場としては彼はかなり苦闘をつづけたものであつた。此間僕は又臺灣の職からはなれる事になる。今度は小橋内務次官の官邸で同友の人々から京都府知事の職をうけよとすすめられたが、もう役人といふ職に飽き飽きした僕は一介の浪人になる。次で朝日新聞社に入社して歐米に外遊する。大正の十一年の一月である。巴里の客旅ホテル・カムベルで彼と我と、語れど語れど語りつくせぬ幾日を送つたのも、今更に忘れぬ思ひ出であつた。

七 毎日の岡と朝日の下村

彼と我とは相前後して歸朝する。我の朝日に相對して彼は毎日に入社する。それからは又遞信農商の當時よりも、同じ大阪に同じ日本の二大新聞社の一員として公私の交情さらに深く且つ密なるものがあり、いはば商賣敵の二大新聞對立の中に、互に赤心をおいて仕事の上にも何等の疑惑を持たず、互の交友の上に何等の間隙も生ぜず、互に相信じ相許し、ここに又十有餘年の春秋を経た事は、只々感激あるのみであつた。

彼と我と二大新聞社には別に前々から何等の緣故があつたわけでも無い。別に株主でもない。寄書家でもない。兩家ではない、兩社の社長も幹部も皆未知の間柄ともいつてよい。さうした中へしかも風變りな新聞社へ相ついで入社した。それがどれだけ新聞社にお役に立つたのか、之れが適任であつたのかどうなのか、そんな事は問題では無い。とにかく、まるで鳥のちがつた官界より、極端から極端へ新聞人としてまで相ならんで立つ。それから彼と我との經歷から、又兩社代表の意味から、くさぐさの委員會に名を列し席をならべた事も數知れずである。一體どこまで深い深い宿世の因縁やら不思議といふも愚かなりである。

八 盟友岡實兄逝く

趣味としては彼は釣や謡曲に我は撞球や圍碁に、後ち共にゴルフを遊んだが、そのうち健康は彼のゴルフを許さず、釣もいつしか怠りがちになり、専ら謡曲の道に楽しんでゐた。交詢社の謡曲の仲間には大口喜六翁がある。物價委員會の席上で翁の曰く、私は謡曲の友を失つた。いや謡曲では無い、折々大口さん一寸といふのでよく國事を談じたものでしたが残念な事をしましたといふのであつた。病床中新聞やラヂオから縁が切れても、令息からニュースを聞かねば承知しなかつたといふ。故人には臥床前に妻とたづねて話し合つた時も、例により例の如く時局につきかなり話しが長くなつたものである。せめても此時局の解決まで生き長らへてといふ念を禁じ能は無いのである。

今少し早く新聞社の方を辭職したら相當健康も維持されてゐたと思ふ。いろいろと僕のやうな雜業で相携へて縁の下の力持ちも出來よう。彼も舌もあり筆もある。さらに彼はなにかまとまつた作品も公けにした事であらう。彼にせめて今年十の健康を以てすればその信念、その材幹、その語學の力は、少くとも益々複雑怪奇を極むる國際關係において相當御奉公ができた事と信する。正しく楷書で堅實な足取りを印して六十七歳をむかへたる彼は、若い時の深酒が累をなしてたう

とうより弱體であつた僕を残していつた。いや實はもう四五年前から残していつたといつてもよい。彼と我は折々は語り合つた「御互は同じ時に此世をおさらばするわけにもいかない。いづれが先になつても残された者はさびしい」そしていつも彼は詞をつづけた。「どうもお前は活動しすぎる無理しすぎる、からだを虐使しすぎる、今少し休息せよ、静養せよ」さういはれて見ると、事實彼の亡くなつた日は朝彼の邸を弔問してから、次で某將軍との面會それから物價委員會、それから私的の二つの委員會、さらに一つの座談會と二つの講演、しかもその一つは横濱で壇上から東横電車で家門を通りすぎ、又目黒に彼氏の邸の通夜にいつた。

もちろん此日のやうに一日ぶつ通して氣忙しない事は例外であるが、これからは生前の彼の詞もあり、もうあまり無理はしまいといふ氣持ちで彼の寫眞の前で僕は彼の言を追憶した。御互に我々は引つづき健康だといつてゐた中から、この夏小橋一太君これもとても頑健であつたが酒のためにとても長命であるべきが年順とはいへ、最初に四月會の中から亡くなつた。そして今日はその五十日祭になる。今又君を失うていよいよこれから寥しくなる。彼は七月臥床してから今までない微熱がある。何よりも食慾が進まない。同窓である稻田國手の言によりても、何んとなく不幸な豫感に襲はれてゐた。僕は滿鮮の旅の宿にも、又故國に歸つてからも、いよいよ彼が亡くなるまで、いつも何か曇り日に重荷を背負つてるやうで、電話一つかかつてきてもハツと胸を打

ち彼の家からかとビクとする。重苦しい日がかなりつづいた、今やその不幸なる豫感がたうとう實現され、さて今猶夢のやうな感じがする。今日は原稿の締切りといふのでペンをはしらせて見たが一向に記事がまとまらない。只だらだらと思ひ浮ぶまま書きつけて見た。ここに此時局に際し、君の長逝を惜しみ謹で盟友岡實兄の冥福を祈る。

(追記) 故人と僕の思ひ出はそれからそれと湧いてくるが中にも東京市政調査會と故人の關係は逸する事ができない。同會も池田宏、松木幹一郎、岡實の諸氏が引つづき物故した。同會は後藤新平伯によりて生れたもので、ここには同伯と故人又僕といふつながりが、總選舉と倫理化運動の前後を通じ、ある思ひ出を残してゐるが又の機會にゆづる事にする。

盟友逝く

一と日一と日やせ細る君を胸にゑがき

會はでかへりしも幾度なりしか

君遂に此世を去れり身にしみて

かなしみ去らず日を重ぬれど

津村素雨と僕

上 學友津村秀松

紀元二千六百年の元旦を、筆者海南は今海南島の南端三亞に迎へてゐる。

暮の二十九日素雨津村秀松病篤しといふ電報を臺北に手にし、心落ちぬす夢結ばれず、あくる三十日遂に長逝せる入電を耳にしなから、朝臺北を發し、夕べ海南島まで飛行をつづけ、今三亞に着いたのである。

昨秋の滿洲の旅窓に、岩永裕吉君の凶電を耳にし、歸來岡實君の逝けるあり、今又南國の旅に素雨逝けりと聞く、傷心又焦心夢見る心地である。

門松は冥途の旅の一里塚といふ。海南島には松が無い。木麻黄の松に似たるを竹に添へて、海南島の軍衙の門に、街頭の店先に、飾られてある。海南は大日本帝國紀元二千六百年の新年を海

南島にむかへつつ、椰子しげる南國の旅の窓に胸にうかぶまま、元旦の夜筆始めに故人をしのびて此一篇を筆にする。

津村素雨は紀州日高郡御坊の産である。おなじみの道成寺は御坊町の郊外にある。その御坊に程遠からぬ名田村が僕の九人兄弟の母の里であるから、僕には數知れぬ名も知らぬ従兄弟や再従兄弟がある。素雨と海南とは何等親になるのかは知らない。かなり遠い事は遠いが縁つづきであるといふ事である。

彼れが一つ橋の高商に遊んでゐる頃は、僕は本郷の高等中學ついで大學に在學してゐた。當時和歌山學生會を中心として、本郷の大學と一中と神田の一橋高商との間に紀州の學生が相對立し、伊勢の荒神山といふやうに血の雨をふらした大ゲサなものではないが、とにかく出入りがあつた。その時の立役者が本郷に海南と西風重遠あり、神田に素雨と窪田四郎老などがあつた。俗に玉川樓事件及び金清樓事件といはれてゐるが、いづれも兩人共にかつて筆にせるものがあるから、ここには省略する。

もともと個人々々の間のにくしみから出たわけで無いから、その後さうしたいさくさは水に流され、明治三十一二年の交まだ學校から巢立ちしたばかりの時、東京商業學校に御互に先生ともなれば、悪友としても肝膽相照らした。彼がいよいよ獨逸へ留學といふ時には、送別と號して三

日三晩照らし合はしたから相當なものであつた。

その素雨がドイツで一と通り染め上げ、日露の風雲も次第に急をつぐるの時、さらに仕上げにベルギーに立ちより、フランス語をカチリつつあるとき、僕は同國へ留學を命ぜられて、はからずも萬里の異郷に落ち合ひ、ブルツセル市リユー・ド・ラ・リミット四番地のパンションに寢食を共にする事となつたから、かなり因縁は深くつながつてゐる。

當時武府在住のチャボネはいつも一つになつてカフエーセジノで球をつく。あとは下町をブネル、左なくば加藤公使の邸へのり込んで屢々曉にいたる。今當時の交友をかへりみるに、公使館の加藤恒忠、龜山松二郎、松村貞雄、民間の久野安雄、柴崎雪次郎の諸氏いづれも故人となり、近く旭ガラスの山田三次郎君逝き、今又津村秀松君の長逝を聞く事となつた。もはや彫塑の大家になつて善友武石弘三郎君を残すあるのみ。さりとは心さびしき限りである。

歸朝した素雨は神戸高商の教授となり、君の國民經濟原論は洛陽の紙價を高からしめた。當時の神戸高商は天下の俊才をあつめ、津村教授の名は神戸高商の名を重からしめたのである。

僕は貯金局に陣取つて傍ら君と同じ學界の畠に足を入れて居たから、交友ますます深く、僕が簡易生命保險事業の創設に手をつけそめると、君は社會政策學會などで助勢をしてくれたのみならず、當時僕があつて來た歐米朝野の簡易保險に關する資料の翻譯は、大部君の門に集まりし

俊才によりて仕遂げられたのである。

外務省の加藤外松、松島鹿夫、三宅哲一郎、故原田萬治、宇治川水電の小池卯一郎、東京朝日新聞の石井光次郎の諸君は、當時貯金局の一員となつて翻譯を受持つてくれたのであり、それはいづれも君を介しての事であり、又それが石井君と僕との臺灣入りとなり、次で朝日入りとなり、さらに現在の東西朝日に數多い神戸高商出身の人材の集まりとなつて來たのである。

僕は一時しばらく神戸商大の講壇に立つた事もあるが、僕の神戸高商とかなり縁のふかくなつてゐるのは、一に津村素雨と親しく友として相よれるが爲めに外ならないのである。

彼れ博士となり我又之に次ぎ、我官界を去りて朝日新聞社に入るや、彼又官界を去りて久原商事に、後大阪鐵工所を主宰する事となつた。

此間の故人については君の門下生であり、君の女房役となつた飯島幡司君が尤もよく知つてゐるから、いづれは飯島君の筆をまつ事であらう。

下 盟友津村秀松

その後君實業界を去りて純然たる浪人となる。我又朝日を退社して一介の野人となる。悠々自適しつつかある彼は、いつも僕を促らへて「お前のやうに五體を虐使してはいけない、もう年が年

だ少しはラクにやれ、休養が肝要である」と切言してくれた。僕は又浪人暇なしで今日が一生中一番忙しい生活を逐つてるのである。それだけに「お前のやうにブシャウでは困る、今少し活動してはどうであらう。あまり休養しすぎてゐる」といつたものである。

もちろん素雨は僕にくらべてブシャウといふまでで、ツムラ式のオトノサマ式又レデキース式のゴルフは警戒により取りやめたが、菊の手入れにかなり忙しいやうであり、常に時局を憂へて危言を筆にした事は、周知の事實であると思ふ。

殊に君が晩年筆にした隨筆は君の學識と俳人素雨を以て知られし文才と相まちて堂に入れるものである。君の近著隨筆集を一見し、その文藻と筆致に魅せられる人が少くないはずである。

俳人素雨としての彼の作品をいくばくに評價してよいのか、僕にはよく分らない。恐らく僕の短歌と相似たる程度のものに過ぎないのかも知れない。しかし彼れの隨筆はこれから益々油が乗つてくるはずである。筆を染めてよりあまりにも歳月に恵まれなかつた事は、遺憾といはねばならない。さらに君の政治財政經濟に關する意見は、經世の筆として重きを爲せるもので、國家益益多事なるの秋、再び君の情理つくせる椽大の筆を見る能はざるに至りし事は、さらに遺憾の極である。

君と僕とは年は一歳ちがひであり、上來筆にせる如き關係で、學生時代から留學時代から、學

界及び業界の分野に於て、あまりにも長くしかも相近く、相似て相親しきものがあつた。

僕とその徑路に於て相似たるものが實に岡實、津村秀松の二兄であり、今相ついで長逝したのである。僕としては誠にたとへ難ないショックである。僕は今我心にむち打つてゐる。まだ僕は存外頑健である。臺灣で連日連夜自動車、汽車、見學、宴會、放送、講演をつづける事旬日にわたりて少しの疲労をも見ない。少閑を盗んではゴルフもプレイしてゐる。海南島に入りては連日デコボコ道を百キロ前後ドライブしてゐる。今の僕の氣分は此上は自重自愛しつつ見等の分をもあはせて、限りあれどいつとは分かれぬ玉の緒のただ絶ゆるまで、微力のかぎり活動をつづけてゆく。之れがあとに残されし僕の、亡友へのせめてもの務めであると思ふ。

素雨かつて我に曰く「御互にあまり親しいから却て御互の揮毫ものが手には入つて無い、今のうち御互に我は俳句を君は短歌を筆にし、表装せる上交換して置かうではないか」と、僕立ちどころに共鳴して然諾、互に筆にし表装し交換したものである。

之れから僕は南支中支を経てかへる。そのかへり路には君の墓前に弔ひ、さてかへりては君の書幅をかかけ、さらにさらに思ひ出を新にしたいと思ふ。

君についてのくさぐさの追憶もあるが果てしが無い。海南島三亞の客旅に、この邊で筆を止め、更に他日を期する事にする。

淡水にて素雨病あつしといふ報を耳にす

球打てど心ここにあらす外れ球の

あと逐ふ前に友の姿うかぶも

千里の外に遠くはなれて旅の宿に

友をしのべば夢結ばれず

あまりにもはかなかりける津村素雨の

うせしといふもそれはまことか

我逝きしあと弔はん我友の

あわただしくも先たつとははや

(二五、一、一、海南島 實業の日本)

津村素雨の隨筆集

社會小景(双雅房發行) 道成寺(中央公論社發行) 春秋劄記(小山書店發行)

俳句集花野ゆく(双雅房發行)

津村素雨逝ける日

前文は一月元旦の夜海南島三亜の旅窓にペンをはしらせたのであつたが、一月五日臺北に飛びかへつて見ると、故人の愛弟子の一人である東京朝日の睡蓮石井光次郎君から次の如き航空便がついてゐた。ここに追てがきとして轉録する。

津村先生の事あまりにも突然で驚ろきました。二十七日朝高熱で病名不明だが入院させるから秀夫君に歸神せよとのたよりを見、翌日見舞の電報を出したら、その夜危篤の報に接し、翌二十九日見舞に行くつもりで社に出たら死亡の通知を受けました。原因不明の敗血症でどうする暇もなかつたさうです。

その夜西下三十一日に葬儀。生きてるやうな、「先生」といへばふり返りさうな死顔でした。もとの生徒たちばかりに囲まれたやうな情緒の深い葬儀でした。

侍立しながら先生の遺愛の花の残れるを見、先生の得意だつた俳句を二三つくりました。

椿の花たわわなるに君今や亡し

花輪の菊その白菊の佗しさよ

もぎ残る柿の實もあり師走空

蠟梅が風になげいてをり候

風の強い空は晴れたれど佗しい日の告別式でした。

以上は臺北の旅の宿で入手した石井君よりの來信である。一月八日臺北をあとに上海に入り、十七日朝上海を飛び立ち夕刻前東都羽田に安着した。

朝風莊に入り、早速押入れより、故人からおくられてあつた二つの軸をとり出した。

一つは

肱つくや机つめたし春の雨

といふのであり、一つは

みちのくの吟

新涼や湖上を渡る鳥の數
稻の風鳥海山をふきゐたり
空ら鐵砲鳴子代りと響きけり

とある。昭和十一年初夏としるじてあるが、前田米藏君等と行を共にした十和田行の旅の作品である。床の間にかけて香をたき、翌十八日朝澁谷南平臺に秀夫君の邸をたづねた。遺影を飾れる床の間には故人の筆になれる

入雲不見雲

出雲初識雲

といふ軸がかかげられてある。中支の旅をつづけて朝夕支那事變といふ大きな謎をとくべく數知らぬ内外の要人と話を交はして見たが、結局誰人にも分らない。廬山の眞面目その身山中に在るによるといふ感をふかめるばかりである、故人の筆にせる軸の前に、又その感を新にしつつ、今更ながら故人健在ならばといふ追慕の念にふけりつつ。

(二月十九日、追記)

滿洲移民宣傳の暮

鮮滿支の旅からかへつて、絶えず筆にし口にしてるのは日本民族の進出といふ事である。

北滿數萬の移民が廣漠たる原野に鉄を振つてゐる。しかも滿洲發展には海外移民として熊本、山口、廣島とならんで四本柱であつた和歌山が、さうした部落に影をひそめてゐる事は縣人の一人として何よりも遺憾に堪へない。

十月の九日に歸宅して

十三日は宇都宮市へ、十五日は甲府市へ

移民講演に赴き甲府では放送も試みた。十八日は滿洲移住協會で打合せをする。十九日の

華族會館の一水會は移民問題であり

六日の國際觀光協會理事會には移民問題にふれ、二十二日の國語協會座談會にも移民と文字を課題にする。二十三日の

協調會館の勤勞者教育大會。二十四日の東亞調査會の鮮滿支視察談
共に移民問題であり、この間各方面に膝を交へて視察の報告を試みた。

二十七日の千葉縣船橋市の精神總動員の講演も

二十九日の中央放送局の「人の統制」の放送も共に移民にふれてる。

十一月に入りては大阪朝日會館の

民族衛生學會大會の演題も

移民としての日本民族

といふ題目であつた。あくる二日の

新大阪ホテルの木々會でも

夜の名古屋市公會堂の國際協會大會にも

同じ題目にふれてゐた。三日からは精神作興體育大會が六日までつづいた。四日の夕景から

東京會館の拓務協會にも

幸樂の紀州人會にも

日比谷公會堂の體育大會講演會

にも移民問題にふれてゐた。九日の

厚生省の融和會設立委員會
も移民問題ならば、十日の國際協會には

鮮滿支移民問題

と銘を打つてゐた。その夜の朝鮮協會の寄り合も又然りで、十一日からは毎日暇さへあれば

新著滿洲移民問題

の起草に逐はれてる。十四日の

國語協會理事會は移民と日支の文字

國際觀光協會理事會では滿支と觀光

であり、十五日の

教育審議會特別委員會も鮮滿支の移民とその教育

であり、十七日の教育改革同志會も又然りであつた。

二十日の大阪朝日會館に於ける

關西體育大會に伴ふスポーツ講演も

移民にふれてる。

この頃から企畫院へ大藏省へ人口問題を中心にした豫算案件で連日かけ廻る。

北支から殷同氏などの見えたのもこの頃であり、二十六日の京都嵯峨天龍寺における府工業聯合會の講演も移民にふれてる。

二十七日からは

改造新年號の 鮮滿支民族問題

中央公論新年號の 滿支の日本人の體位問題

に筆をとりはじめてる。二十九日は

臺灣クラブにて鮮滿支めぐりの講演に

移民にふれ、その夜の外相官邸の懇談會にも同じ問題にふれてる。三十日の日本クラブは演題も

鮮滿支の移民につき

と題してある。同じ夜の拓相官邸の鼎座の會は、殆んど大部は移民問題の話であつた。

十二月に入りて二日の早稻田大學の交通學大會も

滿支との交通問題より移民にふれ

六日の午の寄り合は拓殖大學評議員會であり、移民指導者問題にふれる。夜は

東洋協會の講演は鮮滿支をめぐりて

である。この月中には和歌山に入りて所見も話すべく吉永知事と打合はせたが、何分年末いろいろ

ろの委員會が殺到してゐる、教育審議會は中學校制度の特別委員會に入つた。議會制度委員會も大詰にさし迫つて來た。東京がはなれがたくなつて、毎日ゴタゴタとその日その日を送つてゐる。

來春にもならばかつては海外進出に名の賣れてゐた和歌山、しかし現時の國策移民には不振である和歌山に出かけて見たいと思つてゐる。

來年度は集團移民は一萬戸、青少年義勇隊は三萬人、滿州へ進出されるのである。

(紀州人、十四年一月號)

浪のうねり

運命の波は人間一匹はもとより國も民族も世界もゆりうごかしてゆく。

浪のうねりの先きには尊い犠牲がある、幕末の歴史を見ても多くの志士仁人の千差萬別の行藏の

あとがしのばれる。

浪のうねりのあとへあとへとついてゆくのは大衆であり、中にはおくれすぎる者も少くない。

新聞は尤も現在に即しやすい、又即すべきであらう、しかし冷靜なる批判、公正なる報道が生命である。時には先きへはしりすぎる事があつても、附和してあとへついてゆくべきでなからう。

(新聞日報)

代々木の御苑

初夏の或る日

六月二十一日（水曜日）

電話がかかる、原稿の催促である、講演の依頼である。ベルの音でペン先きの運びが一寸止まる、思索が中途半に切れてしまふ。

困るけれども仕方がない、さうした文句をならべるよりも、さうした註文のくるのを有りがたいと思はねばならないのかも知れない。さう思ひかへして、三四十通の朝の郵便、手紙葉書雑誌等々に眼を走らせつつ、返信の雑用などをすますと、締切に逐はれてる、いやもう締切をパスした原稿二くさりにペンをいそがせる。

午前の商工省なる中央物價委員会定例会に出席する、おひるになる。國際協會の晝の催しかかる藤井啓之助公使のチェッコ引揚話を聞きたかつたが、再び見る折無かるべき新造船南米通ひ

アルゼンチナ丸へかけつける。半世紀前にまだ東海道に汽車が通じなかつた頃、此船の十分の一にも足らぬ一千トンといはれた近江丸で、神戸をあとに横濱へ向つた昔を思ひかへす。何んといふ立派な豪華な船であらう。このとてもでつかい船が、遠浅の海がいつか埋め立てられて、今はお臺場も眼の前となりし、築港新に成りし芝浦の岸壁に横づけになつてゐる。

飛鳥山や湯島まで浪打ちよせた大昔、浅草あたりで海苔がとれた中昔、さうした昔にさかのぼり、さらに未來を想像したら、そのうちには東京灣も大分は埋立てられてしまふ事であらう。

午をすぐる半にして大阪ビルの國策研究会の時事懇談會に顔を出す。次で一時半から、開かれる中央物價委員会の第三部會に出席する。このあたり楷書に屬する型苦しい記事は筆をはぶく。四時から華族會館に國際文化振興會の主催により、此度歸國する東京外語の印度語の先生エヌ・エッチ・バルラス氏夫妻の送別會があつたがどうしても時間の都合がつかない。次は日露協會主催の外務省西春彦君のソ聯の話の聞きたいが、拓殖獎勵館理事會の方が相當時刻がのび、此夜は丸之内會館だけで引揚げ。

六月二十三日（金曜日）

朝の行事は例によりて例の如く郵便類のうけと差出しにこれ二時間は消える。

午前には文部省の教育審議會あり、研究會の物價統制の報告會あれども出席かなはず、前十時

から如水會館なる人口問題研究會理事會に臨む、時下内地の勞力不足に伴ふ朝鮮半島人移入問題の建議案を評定する。

おひるには、拓殖評議員會に顔を出す、それから國策研究會の戰時國民生活改善委員會に列席する。後三時頃、體育協會に出頭。

次で半藏門外なる興亞院に推參、五時には鐵道ホテルの日本旅行協會の通常總會に、座半にして日本クラブで開かれてゐる國語協會へかけつける。

昨今文部省は、上海、北京、新京、京城、臺北等各地より、教科書の編纂等國語國文にたづさはれる人々を召集して會議をつづけてゐる。その參同せる諸君を招待しての座談會である。問題は「各地における日本語日本文字」の教習を中心にして、外地相互間の統一といふ事もある、日本語そのものがまだ充分調製されてない、東北からの先生、九州からの先生、それぞれにまちまちになつてゐる。さらに日本語を不必要に支那文字に譯するの愚、又その譯し方の過誤、日本漢字の數知れぬ亂雑な讀み方、同文なるが爲めの一層の混雜、支那の固有名詞の支那讀み、日本讀みの混線、曰く何、曰く何、主客歡談語れども語れどもつきず、時の移るを忘れる。

こんな事を書き立ててゐると際限がないが、實は「日本短歌」から先月より寄稿の督促を受けてゐる。さて此の雜誌にふさはしい隨筆様のテーマは一寸浮ばない。たまたま六月二十二日、明

治神宮御苑なるあやめの拜觀にまかり出た。支那事變戦たけなはなるのとき、都大路の中なる別世界にしづかにあやめを拜觀する。有りがたい事である。勿體ない事である。さうした心持ちから一文をと思ひついたものの、代々木御苑のあやめ拜觀の記は、もはやあまりにも知られすぎてゐる。日記帳をくりひろげて見ると二十一日、二十三日は例により相當に時間が切りつまつてゐるが、僕だつてさうさう毎日毎日寸時なく追ひ廻はされてゐるわけでない。二十二日は國際協會の特別委員會、東亞同文會の評議員會、外に日本クラブで私の會合があつたが、先づ以てのんびりした一日であつた。午前は代々木の御苑でしづかに聖代のありがたさをしみじみと感得しつゝあやめを觀賞した事であつた。

代々木御苑の案内書きをやめ、その前後の日記帳をくりひろげ、思ひうかぶまま筆にし責をふさぐ、とはいへ歌もせめて一首位は

神います代々木の森はふかふかと

池をたたへてたたにしつけき

(七月一日の午前あわただしく、日本短歌)

書齋漫語

鶴見祐輔君に招かれて

「朗」といふ雑誌から根氣よく、原稿を送れ送れと督促の電話がかかつて来た。六月二十八日の事である。

鶴見祐輔君の麻布櫻田の邸へ午餐に招かれた。町田忠治、芳澤謙吉兩翁をはじめ主客七人、お座敷金ぶらの卓を圍んで、雑談つくるを知らず、というて楷書のやうな堅苦しい話はここに披露するにも肩が凝る。草書のやうな他愛もない話は、その場かぎりの笑ひ草で、お座敷に出せる代物ではない。

鶴見君の此催しには改築された書齋の披露といふ事もこもつてゐたらしい。食卓を終へてから一同書齋に案内された。書齋の間取りなどは寫眞でもその真相はつかめない。況んや筆によりて高さ何メートル幅何メートルなど記して見ても意味をなさない。只鶴見君の場合は廊下の書架に

は和漢書をかさね、書齋の中は殆んど洋書でギツシリつまつてゐる。僕は洋書の分量がどの位あるとか、どうした奇書珍書があるとか、そんな事を紹介しようと思はない。いや紹介したくもさうした知識がゼロである。只外語を自由自在にこなす鶴見君をいつも羨ましくおもひ、さうした人が今日日本に多々益辨するが、いかにも貧弱すぎるといふ事を遺憾に思うてゐるばかりである。

それよりも話題になしうる事は書齋の廣さといふ事である。

別に之といふ目標も無いが大體狭いのでよいといふ人と、廣い方がよいといふ人がある。故人で例をとれば新渡戸稻造博士などは狭きを欲し、花井卓藏博士などは廣きを好んだのである。廣いと氣が散る、讀書にしても執筆にしても、小チンマリした場所がよろしいといふのが新渡戸式であり、廣くして自分の視野に出来るだけ多くの書冊をならべておく。さらにデスクの外に處在にテーブルや書立てなどならべて、手ののびるところ眼のふるるところ、なるべく多くの文献をならべて積み重ねる。さうした好みは花井式である。

六甲の海南莊では花井式の書齋をつくつたが、あまり廣すぎて煖房などにも困る。それに書冊が多くなるばかりだから中仕切りをつくり、その表裏に書箱をならべる事とし、三つの部屋に區切つて見た。それでも猶書齋プロパーは神田の昔の花井博士の書齋位の廣さであつた。

今度の田園調布の朝風莊は廣くとりたくも地所も家屋も狭すぎるから、止むを得ず小づくり

なつてゐる。それでも新渡戸博士の書齋よりはすつと廣い。鶴見君のよりも廣い、その代りといふのもおかしいものだが、新築の書齋はランドル式になつてゐるので、應接室にも使ふ。食堂代りにも使つてゐる。

それから付け加へたいのは、書棚はガラス張りかカーテンか、ムキ出しかといふ事である。鶴見君の書齋はカーテンにしてある。僕はムキ出しにしてある。ムキ出しはゴミホコリで汚れ易いが、出し入れに便宜で書冊への親しみがある。ものたとへがお風呂である。僕はお風呂はあまり好かないが温泉は好きである。その条件の一つに風呂は一々足をまたいで入らねばならないが、温泉はフラットになつてゐる。コンコンと湯があふれ流れてゐる。あの風呂の足をまたがなければならぬといふ事と、書棚のガラス戸をあけてせねばならぬといふ事と、そこに一脈相通するセンチがあるやうに思ふ。

(一四、六、二八、朝風社 題)

書齋に毎日のやうに書冊雜誌類が堆かくなつてくる。とてもやり切れない。書架が背中はせとなり、書齋の中程へ半島形に進出しつつある。今に此書齋が書架により、八幡の藪くぐりのやうになるのではあるまいか。

有樂座の半日

一 傷病將士の慰安

八月六日の午前に伊豆の伊東町で催される文化講座に臨むため、前日に到着あるやうとの案内である。

八月は暑中の峠であり、六日は日曜日である。世が世なれば川奈のゴルフコースへでかけるべき好機であるが、何分昨今は引つ切りなく物價委員會に逐はれてゐる。後日割に狂ひの生じないやうに、講演は日曜と定め、もしその前後に差支がなければ、川奈行きも便宜善處することと心組をしておいた。

果して前日には物價委員會の纖維品會開會の知らせがある。土曜でもありおひるにすめばすぐ伊東に向ひ、久しぶりで温泉にも浸らう、たまつて原稿のペンもはしらせようといふ心構へてゐると、その前日にモダン日本から、あすの有樂座へは是非顔を出して下さいといふ電話である。い

かさまさういへば傷病將士慰安の爲めのロッパ劇へ招待の入場券が届けられてあつた。零時半からのマチネである。それならば委員会次第で一寸のぞいて見よう、そしてモダン日本社長馬海松君に敬意も表しておかう、慰安會の様子も味つて見ようといふ氣持ちで、六日の朝宅を出て商工省の委員會にのぞむ。お晝で閉會になる。そこで有樂座にかけつける。

颱風の御すそ分けて風も強くなり雨は吹きつけてる。有樂座の中は傷病兵で一杯である。しかしいづれも若い兵隊さんである。ここへ出かけて来る位であるからとても元氣である。しかし片目が繻帯されてる、片腕が亡くなつてる、撞木杖による、さうした人たちを見ると胸がいたくなつてくる。

二 林美美子さん

馬海松君に引つ張られてとある廊下の一隅にくる。そこにはロッパ一黨やら文士たちが超高速度で色紙に筆をはしらせてる。兵隊さんの群れが山のやうに盛り上り、ギツシリ取り圍んでる。

小さな卓子を前に新店が開かれる事になつた。僕と小型な別びんさんが筆をとる事になる、美人は壁をうしろに卓を前にしたが、僕は不覺にも取り残されて美人と卓をはさむ事になる。つまりむらがる兵隊さんの中にもみ立てられる事になつた。兵隊さんの一團がどつと集つてくる、別

びんのサインを見ると美美子とある。林美美さんである、此間戦地慰問に出かけて兵隊さんにはおなじみの美美さんである。そこへ女性であり美人であります。僕も多年いや何十年と色紙に筆をとつた事があるが、後ろから左右からわつしよわつしよと押しよせられ、眞夏の人イキレのさ中で、右の手が思ふ様に運ばれないまま筆を運んだのは始めてである。況んや美美さんに於てをやである。たうとう卓上の墨汁の壺が引つくりかへる、美美さんの一帳羅か二帳羅かのおべべを眞黒に染めたらしいが、何分にもこの雑踏である。兵隊さんは口々に失敬とかすまないとか何とか言つてるらしいが、雑音に紛れて聞きとれない、しかし美美さんは平然と……イヤ、ニコニコと笑顔で迎へてる。時局風景の一場面だなあと感心する。

三 馬海松と緑波

いよいよ開場となる。いろいろの人たちが主人側もお客側も入り代り立ち代り、相次で舞臺からあいさつを述べたが、ここでモダン日本の名づけ親である菊池寛君のあいさつなるものが又大きなヒットであつた。

モダン日本の社長馬海松は朝鮮人である。十四五歳のとき兵隊さんに連れられて日本へ来た。といふふれ出しから、長い文藝春秋社生活よりモダン日本の社長となつた馬君につき、あつさり

としかしなんとなくホロリとさせる紹介がある。さらに菊池君は緑波につき文博の孫であり醫博の子である、それが映畫が好きでたうとう役者になつた、しかし日本では博士の一人二人よりも六七十人喰はしてゐる彼の方が相當な者である。

といふ逆手なほめ方をする。さらに君の口先が

諸君は慰安といふ名前でいろいろ見たり聞いたりするだらうが、中には随分つまらないものもあると思ふ。野球を知らずにスタンドにエンコしてゐるのも退屈だらうが、競馬へ招かれて辨當は出してくれるだらうが、馬券を買はずに見てるなどはおよそつまらないものと思ふ。とまくし立ると、僕の坐席は平土間のうしろで、兵隊さんの只中であつたが、引つきりなく笑ひを止め能は無かつた兵隊さんたちは、此時は全く爆笑がつづいて止まなかつた。そして

ロッパ劇は決して退屈させない、その上此催しに、モダン日本はさう金は出してないから、みなさんも氣樂に見物して下さい。

で最後の笑ひのとどめをさし

今日は色紙は書き切れなかつた。届けてくれば百枚でも千枚でも書きます。といふ結びであいさつをすませた。

四 菊池寛君の挨拶

満場は笑ひどよめきわたり、兵隊さんたちはウマイナ、ヤルモンダナアと感嘆詞を連發してゐた。事實馬海松の爲め、古川緑波の爲め、當座興行經營者の爲め、すべてに行きわたつた、逆手なあいさつで百パーセントの効果をあげたのである。

日本ではどうも辯論といふ事が誤解されいやしめられ、自由にシヤベレル人たちまで、それも閣員にでもなるとみな朗讀……朗讀なればよいがとにかく棒よみになる。近頃ドイツ、イタリアばかりであるが、ヒットラー總統の辯論の要を力説してゐるマインカンフを引つ張り出すわけでない、ムツソリーニの數ヶ國の詞を自由につかつて長廣舌を振ふ例をかつぎ出すわけが無いが、いつも無味乾燥なる式辭の連続線になやまされる我等は、今日の菊池君のあいさつでこれではなくてはといふ感を新にし深くした。そしてモダン日本はよい催しをした。そしてかうしたあいさつによりその効果が實にダブられたといふ事を馬海松君の爲に喜んだ。

たまたま東寶からの再度の寄稿トクソクをうけて。

僕の映畫の思ひ出

僕の日本映畫の最初の古い思ひ出は、明治何年頃であつたか分らない。只赤坂演伎座であつた事だけはたしかである。

首相官邸から見おろした赤坂の溜池、今は名ばかりで溜池は無くなつたが、六本木へむけてまがる福吉町となれるあたり、あの電車通りの西側に、ヘンボンとノボリをなびかせた演伎座といふ芝居小屋があり、能く新派劇がかかつてゐた。僕の淡い記憶では八百屋半兵衛その半兵衛に伊井蓉峰が扮した事は覚えてゐる。一座にはその時に福島清と藤井六輔だけはたしかに存在してゐたが、高田實や藤澤淺二郎は居つたかどうか、その外はアイマイモコである。

その演伎座で今度活動寫眞なるものがかかるといふので出かけたものであつた。正味の活動寫眞は誠に短いアツケなもので、その前後を何んでつないだかよく覚えがない。とにかく日本製の活動寫眞は半玉が五六人揃つての活惚れであつた。フィルムが悪いのかどうか知らぬが、全面

に夕立雨のやうに白いすぢが引かれてゐるから誠に見にくいものであり、その又半玉連の踊りの足どりが急にチヨコチヨコとテンポが急になつたり、緩くなつたりリズムがなつてゐない。しかし新しい珍しいといふので、見物はみな驚きもし満足もしたものである。

この頃の活動辯士に駒田好洋といつたやうに覺えるが、「頗る非常に」といふ詞を連發し「頗る非常」を賣り物にしてゐた事も連想される。それから西洋劇で例の探偵劇ヂゴマがトリックがうまく使はれてゐるので、ヂゴマだけは見ておかねばと市中の評判になつたものであるが、之れが演伎座の活惚れと、その間にどれだけ時の間隔があつたのか、これ又茫として見當がつかない。

(日本映畫、十五年新年號)

日英會談に際し

地理的關係文字の關係等々の理由も手傳うて、日本では國民の大多數は國際世相の實際につきあまりにも知らない、國民に知らしむるといふ程度があらうが、少くとも現狀に比してより多く知らしめたい。

(二四、八、帝都日日新聞)

映畫と動物園

名古屋の市内ではあらうが瀬戸の街につづく郊外に、大きな動物園が出来上つた。これは恐らく今日では東亞を通じ屈指のものであらうかと思ふ。

伯林でも東京でも、その規模に廣狹の別があり、背景などに趣きを異にせるものがあるが、虎にしても獅子にしても熊にしても豹にしても、皆檻の中にある鐵格子に圍まれてある。それにくらべて名古屋の動物園は全然野外で飼ひ放しである。觀覽者とその間に大きな溝があるのみで眼をさへぎる何ものもない。それだけ大仕掛であり、在來のそれと面目が全く變つてゐるから大評判となつたのである。市内や付近の住民はもとより、旅の人たちも名古屋に入れば見物にくる。わざわざ見物の爲めに名古屋にくるものさへある。爲めにこんなトテツもない大ゲサなものを遠い郊外につくつてどうするのだといふ非難の聲もあつたが、今では此間をつなぐ電車の乗客も増すばかりで、入園料の外に電車収入も増してくる。沿道の市有地など地價は値上りになる。收支の

ソロバンからも黒字になつて來た。まさしく近頃の大きなヒットであるといふ事である。

至つて縁の遠い動物園を引つ張つて來たのは、映畫にも大がかりなものがほしいといふ事を強調したいからである。映畫はその構想脚色とその技術演出が兩建てになる。しかしそこには舞臺装置として山が無ければならない。その山にも色々あらう、大仕掛けな自然又人工の大きな道具立てもあらう、數知れぬ多數の人馬などの登場もあらう、又その兩者の組合はせもあらう。いづれにしても、西洋映畫に對し僕がアットラクションを持つのは、その大仕掛けな點にある。とても大きな建物の中に數知れぬ群衆のダンスもあらう。式典やお祭りなどもあらう。野外に何千何萬にも及ぶ群衆の行列もあらう、作業もあらう、催しものもあり戦争などもあらう。いづれにしてもさうした大仕掛けな場面が山になり、しかもさうした場面はトリックなどの關係もあらうか、もう少し見て居りたいと思つても惜し氣もなく早くカットされてゆく。日本映畫に折々見うける、もう早く變つてほしいと思ふ、小人数の單調の長すぎる場面とは、まさに大きなコントラストを爲してゐる。

近頃の映畫で例をとるならばスエズである、此映畫の脚色にはレセツプが若すぎるとか、その戀愛關係に無理があるとか、不自然であるとか、いろいろの非難もあるやうである。映畫そのもの

の可否を批判するには数多い俳優があるから、さうした點からの非難は非難として、僕の取り上げたい俳優としては、あの埃及のピラミッドあの沙漠地帯に於ける數知れぬ群衆の場面である。ああした大仕かけなものは経費が難點となつてと思はれるが我國では見られない。此前外國から渡來して撮影した、「新しき土」であつたと記憶するが、あの時は淺間山の噴煙を山にしてある。淺間山は大きな背景だが、そこには人數は缺けてゐた。これがかりに會我物語とする。あの富士山を背景にして富士の卷狩といふ大きな場面を、西洋並みにつくり上げられない事は無い。猪ばかりではない數知れぬ人數を狩り出して、富士の狩場の光景を映し出すが如きがそれである。

そんな事は、現在のやうに人に物資に不足をつける時には困難でもあらう。その時期とか方法にはいろいろ異見もあらう。が宣傳ばやりの今日、テーマを現在のどうした點に取つてよいか、とにかく時局下に直面してただけ、海外諸國に有効に宣傳するための映畫には、平凡なものを多くするよりも、圖抜けたもの一つだけでもよい。思ひ切つてやりたくもある。とにかく數多く生れてくる日本映畫には、一つ思ひ切つて大仕掛な場面も寫してほしい。

それが國內に國外に評判になつて、経費が巨額を要するほど、その収益が大きくなる。さうした裏書を爲すべく名古屋動物園をここに引例して見たのである。(エヌエヌ、十五年一月號)

座談會

近頃は引つ切りなしにいろいろの座談會に引つ張り出されるが、その座談會とても色とりどりである。

或る座談會では席に列する者が三十名位もあつたらうか、いかにも座談會としては頭數が多すぎる。私は中ほどで退座して放送局の海外放送に出かけ引かへしてきたが、隣席の杉村楚人冠に進行の状況如何と聞くと、

「この多人數の中で一人で三十分もシャベルのだからやり切れない、これでは夜通しやつても明日までかかるよ、こんな座談會なんてあるものぢやないよ」

と云ふ事であつた。いかにもこれでは列席の人たちが互に話をとりやりする事は出来ない。只順次座長の指名するままに、此時より折りはなしとばかりに、それぞれ長々と意見を陳述するのである。

引つづいて或る座談會があつたが、その時は有馬頼寧伯が主人役でそれへ山本英輔大將、竹内しげ代醫博、古屋芳雄醫博、菊池寛の諸君に僕が食卓を圍んだ。フオーク、スプーンを手にし口をバクつかせながらの質問應答であるから、一人で長々しく話を引つ張る事もなく、軽くなごやかに話がやりとりされ、いかにも座談會らしかつた。

引つづいて十一月の二十六日人口問題を中心にした放送の座談會が二時間ぶつ通してつづけられた。此放送には相當今までよりも好い反響があつた。此時は菊池寛古屋博士中川博士及び僕と四人で林春雄博士は差支へありて缺席される、中川博士は話を遠慮されがちで、大體あとの三人が語りつづけたのであつた。

この放送がとにかく二時間の長丁場を持ちこたへたのは、題目が誰にも關心の深い分かり易い人口問題であつて、あまり専門的でなく、むつかしくなく、分かりやすく、それぞれ我身につまされる話題であるからであつた。

さらに座談する人が極めて少數であつたから、現場は見えない只耳にするばかりのラヂオの前で、アアあれは誰が話してるといふ事がそれぞれに聴分けられる。話す人の顔まで浮んでくる、その人の名前も音聲もなじみになつてるといふ事が、聴く者にとり、どれだけ興味をひかれうるかわからないのである。

さらに考へられる事は、その中に種變り、型破りというては云ひすぎるか知らないが、その題目にふれた専門家以外の、いはば素人の参加してるといふ事である。

菊池寛君は「僕は人口問題なんぞ何にも知らないよ」といはれたから、僕は「人口問題は誰も知らぬとはいはせない、君に於てをやであるが、しかし君のやうな専門家以外の人が一枚は入つてるので座談に花が咲く。よしんば知つてゐても知らぬつもりで、世間の人はこんな事も聞きたい知りたいと思つてゐる事を、座談の中へ時々織りませて貰ふ、専門の人が獨りよがり獨り合點で話すところへ、それはどういふ事なのか説明してくれ、さうでもあらうが、かういふ事實もあるよと、質問もする半疊も入れて貰ふ、それで話の數多い枝々にとりどりの花が咲く事になるから」といつたのであつたが、事實菊池寛君が少くとも素人の態度で、いろいろの質問や意見を織りませてくれた事が、二時間の長丁場を飽きさせなかつた上にいかに効果的であつたかは、當時聴いてゐられた人々の等しくうなづかれるところであると思ふ。

だから座談會、殊に放送の座談會には、参加者が多いと聴衆は一々誰が話してるか聴き分けにくくなる。

とかく玄人同志だと樂屋落ちになり、大衆には合點しにくい事が多い。

それだけに新聞雑誌講演等の畠から出た玄人ではなくも常識がある、相當無遠慮に突つ込んで

おもしろをかしく質問もし意見もいふ、さうした知名の役者が入用であるといふ事が、ここに如實に證明されたのである。

そこで終りに詞を添へるが、それは放送の座談會ばかりでは無い。

一事が萬事である。内閣にしてもそれぞれ各大臣閣下が専門家氣取りで堅くなつて中へ、第三者として玄人ばなれのした、常識に富み大局を觀察する役者が入用である。首相の立場をおのれの立場として首相のよいワキ師になり、閣議などでも全體の足並を揃へる調整をはかる。

熱しすぎるもの、固くなりすぎるものを緩和し、機械ならば油の役目をつとめる、さうした役者が入用である。

左もないと機械が乾きやすいキシみやすい。

あまり近いところでは例をあげるのもどうかと思ふが青嵐永田秀次郎君の如き、少し古いところで原敬内閣の時を例にとれば、大塊野田卯太郎翁などが、さうした役どころをつとめた一例であつたと思ふ。さらに古いところで西郷従道侯の如きはまさにさうしたタイプの典型であつた。

(二四、一一、九、モダン日本)

築地の同氣俱樂部

今から約四十年の昔話である。

當時自轉車が今の自動車とまでは行かないが、紳士用高級品として愛乘された頃であつて、撞球も又専ら紳士用室内遊戯として、今日のゴルフ程度にハイカラがられたのである。

さらに上古史にさかのぼれば麹町元園町の球場で故中御門侯とか和田垣謙三博士のキューをしごいた時代になるが、我等の時代は古代史の末期で、同氣俱樂部時代といつてもよい。

今から見ての古色蒼然振りを披露すれば、日露戦役前の築地の同氣俱樂部には、將棋では關根名人が見える、圍碁では本因坊名人をはじめ巖崎健造、中川龜三郎、廣瀬平治郎、岩佐銈などの名手が交代に連日詰めかけたものであり、吾等碁打連には和田彦次郎、中村雄二郎、清浦奎吾、中谷弘吉、坂野鐵次郎、楠秀太郎、森本邦治郎、田健次郎、佐々田懋等々の名前が浮んでくる。いかにも先生の顔は揃ひすぎてゐたが、お弟子は數に於て質に於て當時はあまりにも貧弱なもの

であつた。

球場の方では獨逸がへりの郷誠之助君が撞球界のアマチュアの巨頭として殆んど連夜見えたものである。……市井？ の球場には、同じ獨逸がへりの玉乃一熊氏が之に呼應してゐた……外務省連としては赤羽四郎、石井菊次郎、西松二郎などいふ當時の若手連が通勤してゐる、貴族院からは新田忠純、長松篤榮、平野長祥、佐々田懋の諸君が見える。近所の逓信省からは湯川寛吉、中谷弘吉の諸先輩のあとへ、我黨の士として松木幹一郎、川村竹治、坂野鐵次郎、田中次郎、今岡純一郎、若宮貞夫の銘々が響をならべて日參する。その他記憶に残つてゐた勇士の面々は楠秀太郎、谷道清之助、岡崎久次郎中にも老先輩として大江卓老翁があつた。大江さんと球をついてる時に、私は西南戦争の歴史の試験には、あなたの名前を土佐の志士として片岡健吉、岩神昂、林有造など、あはせて、答案に書いたものですよと話したものであつた。

月次の撞突會には何十人といふ老武者若武者はキューをしごき第一戦第二戦と回を逐ひ、七八名の三勝者の残されるのがはや夜も十二時近い、それから百姓一揆といはれたが、三勝者連が同時に決戦して順位を争ふ事になる。早くすんで夜中、時には夜も白々と明けそめる。

考へて見るといや考へるまでも無いあの頃は泰平だつた、吞氣だつた。

(大隈、十四年二月號)

玉川樓事件

その昔の一中時代……第一高等中學校をつめて一中といつたもので、當時府立の中學校が、廣い東京で築地に只一つしか無かつた時代には、高等中學は東京仙臺京都金澤熊本と五つしか無かつたので、今の一高の前身が一中といつたのである。……と引つづいての東京帝大法科の時代に二通じて、くさぐさの思ひ出もあるが、多少身上に異變でも起らんとしたのは、一中時代では和歌山學生會を中心とする出入りであり、帝大時代ではフォックスウェル師放逐事件であつた。

和歌山學生會事件には虎城同窓會……虎城は紀州和歌山五十五萬石のお城の名である虎伏城の頭字をとつたので、和歌山縣出身の大學と一中との學生たちの集まりの名であつた……と神田一ツ橋高等商業學校の同じ縣人の集りとの間の一こんざつがあつた、

立役者になつた芳名を列記すると僕の外に、

本郷側

栗本勇之助（栗本鐵工所社長）

西風 重遠（元代議士和歌山政友會支部長）

山本安之助（前京都第一中學校長）

上野山重太夫（前富士紡績重役）

神田側

中村 巍（元代議士前通商局長）

窪田 四郎（元日魯漁業社長）

津村 秀松（法博、元大阪鐵工所長）

根岸 信（經博、元東商大教授）

の各々であり、

フオックススウェル事件には立役者として、

放逐運動側

上野 貞正（元東亞同文書院）

湯淺 倉平（内大臣）

山川 端夫（法博、貴族院議員）

同運動反對側

松浦鎮次郎（樞密顧問官）

岡 實（法博、元大阪毎日社長）

の名々が記憶から浮んでくる。これらはいづれも、姓名は呼び捨てにする。學生時分の出入りに一々君づけでは、気分が出て來ないから。

上記の名前を通覽すると不思議な事は春秋ここに半世紀近くなつてゐるが、上野貞正といふ最近物故した岡實を除いて皆健在である。達者で呼吸をしてゐる事である。

フオックススウェル事件は又他日ゆつくりと筆にする折もあらうから、ここには和歌山學生會事件だけ、それも簡単に筆にして見る。今になつて精しく話したくも記憶も薄れてゐる。又記憶に残つてゐても他愛の無いストーリー・ヴァリエーの薄いものである。

日清戦役直前頃でもあらうか。今まで微々として振はなかつた和歌山學生會をもち立てて、たうとう舊藩主徳川頼倫侯を總裁に又男爵川口武定翁を會長に祭り上げた。その學生會で五名か六名の幹事を改選するに當り、高商側は中村巍再任の外さらに一人よこしてくれといふ。

當方では今少し早く申し込んでくれたればよいに、もう改選の候補は豫選済みになつてゐる、此

次まで待つてくれといふ、いや待たれない、豫選とは内輪の話である、是非今期の改選期からといふのがモミアヒのはじまる動機なのだから、誠に他愛の無い話であるが、それを餅につきはじめて兩者の間に幾度か交渉がかはされたが、次第に問題が深刻となり、たうとう總裁會長の耳には入る、いや先方の側から耳に入れているいろいろ策動したらしいとか。その間かなりイサクサがあつたが、結局虎城側の負けいくさとなつたと記憶する。とにかくケリがついて、双方手打ちといふ事になつた。場處は九段中坂下の川ぶち、いや溝ぶちの風呂屋の二階で、たしか玉川といふ屋號であつた。その玉川の手打ちの数日前に、虎城同窓側の一人からは、當日は本郷側の元兎下村を袋叩きにするといつてゐるから、假病か何かで缺席する方がよくはないかといふ注意がある。又ある一人からは味方も結束して之に對戦すべきであると氣色ばむ者もあつた。西風、栗本、山本はじめ幹部は僕の自炊してゐた本郷四丁目の清嘯齋をたづねるから、當日は一處に東になつて出かけようといふのであつた。

僕も考へた。假病までつかつて缺席するといふ事は馬鹿々々しい意氣地の無い阿呆らしい話で一顧の價すら無い。さりとて味方の一同に圍まれり立てられて出かけるなどいふのも感心しないパツとしない。とにかく亂闘となりてなぐられるとすると痛い、しかし痛い痛くないよりもそれでは向陵一中男兒の耻辱である。

殊に仲直りの席が修羅場になつて血の雨は降らなくとも、拳闘の雨を降らしては、折角もり立てた和歌山學生會も頓挫してしまふ、丸潰れになつてしまふ。一體こりやどうしたらよいのかといふので、かなり思案にあぐねたものである。

元來妙に意地を張りたがる僕の氣性として、之を先輩や同人に相談に行く事が何んとしてもイヤである。只獨り黙々として考へ抜いた事は、先方へ逆襲する事である。それも同勢揃つて喧嘩を買ひにゆくのでは無い、單身敵陣へ捨て身になつて乗り込むといふ事である。

もともと個人々々としてさう憎い憎いと、腹に据ゑかねてゐるのでは無いはずである。いはば本郷と神田の盆墓蘆の繩張り争ひである。裸一貫相手の本陣へ乗り込んだら、存外話が分つて水に流されるかも知れない、それでもまだ下村をなぐらねば承知せぬといふなら、裸一貫なぐられて見ようぢやないか、多勢に無勢である、別に耻でもない、おひるすぎ制服制帽では一中の柏のボクンや帽章を傷けてはならないと、和服烏打帽といふいで立ちで本郷を飛び出した。

前以て味方の面々に相談して見たら止めるであらう、左なくば一處にといふであらうと、獨り思案で飛び出した先は神田の錦町、その頃の錦城學校の前あたりであつた。津村秀松の下宿屋の二階へかけ上つた。そこには十数人狭い一と間から廊下にあふれてざわついて居る。まさしく玉川へ乗り出す出陣の用意最中である。

僕は今日の手打の會に君等の方でおれをなぐるといふ話を耳にした。虎城同窓會の連中は手打する爲め出かける事になつてゐる。しかも手打の現場でおれをなぐるといふのでは手打ちが逆になつてしまふ。どうせおれは素手で只一人やつて来た、それほどおれをなぐりたければここで思ふ存分なぐつて貰はうぢやないかといつたものである。

無論僕をなぐらうといふのは一ツ橋連全體の總意でも無く、又なぐらうといつてもそれは酒の酔も廻つてのハズミから、拳固が振り上げられるので、シラフで晝日中乗り込んで来て、あいさつする。そこで來意の趣委細承知した、それでは一つなぐらして貰ひませうかと、そこで拳を振り上げる者は無かつたのである。

味方の面々は清嘯窟をたづねたら下村ははや外出してゐる。ハテ玉川へ出かけたか、さては玉川行きを避けたのか、とにかく會場へと出かけてくる。一方で僕は一ツ橋の連中に圍まれて乗り込む。そこで玉川の手打は無事にすんだのか、九段下玉川樓上の一席は、講釋や浪花節だと、事や細かに明晩言上する手順になるのだが、面倒臭いから序でに書いてしまふ。

●酒の酔が廻ると五六人僕をなぐらうといふので、かなり氣色ばんでつめよつたが、いつも味方よりも一ツ橋側の連中が仲へ割り込んで、結局袖の綻び位で事なく散會になつてしまつた。まあよかつた。之れで四方八方へ申わけも立つ、自分も面目は潰されずにすんだと腹を撫でおろした。

次第であるが、それから數十年立つて後の事である。一體あの時におれをなぐりにかかつたのはお前だらうと前高商の先生支那通の根岸博士に伺ひを立てると、いや僕は止める方にかかつたのだよといふ。前の日魯漁業の窪田四郎君に伺ひを立てると、おれも止める方にかかつたのだ、それよりもお前たちこそ、あれからあとでおれをなぐりにかかつたぢやないかといふ。

窪田四郎は茨城の産で山口縣人の家へ養子となり、養父が和歌山の縣廳に奉職した關係上中學は和歌山であつた、三國に股をかけた股旅者である。誰が考へても窪田はかういふ騒動の持ち上る時には旗頭となるだけの徳か不徳を備へてゐる事は、恰かも本郷側における僕に髣髴たるものがある。それだけに吾等の側からは窪田が先方の元兇だとにらんだ事は事實である。それだけに虎城の若い連中が、今度は窪田をやつつけよう位の事は問題になつたに相違ない。

神田淡路町の金清樓の和歌山學生會の大會に、窪田とその一黨はビール瓶では少し大きいビールの小瓶かサイダー瓶を懐ろにし、イザといへば反撃しようといふ心さまへして出場したといふ。そしてなぐつたかといふと、折々素振りが見えたが、結局明き瓶を振り廻はす迄には立ち至らなかつたといふのである。喬木風多しといふか、その頃中村啓次郎翁（故人になつたから特に翁とつけ加へる）をなぐつた事もある。窪田四郎の狙上りのぼつた事はけだし不思議では無い。

只いづれの場合でもなぐられるといふ被告の側に立つたものは、かなり深刻にさうした出入り

につき深い苦がい記憶を牢として心の底に存してゐるが、なぐらうといふ原告の側に立つものは、それほど深刻に考へてゐる者ではない、存外ケロリと忘れてゐるといふのが事實らしい。

恐らく之は古今東西を通じての事例ではあるまいか。つねられる方が痛い、つねる方はそれほど感じる物では無い。戦争でも黨争でもテロでも下つて殺傷強盜いづれの時にも、やられる方はかなりこたへるが、やる方は存外こたへてゐない、アツサリしてゐるものである。

さらにつけ加へておく事はその昔若い頃につかみ合つた連中は、いづれも學校在學中はイガミ合つても、卒業していくばくもなく、逆に親友中の親友になつてるといふ事である。とにかく津村雀田は親友中の親友となつた。玉川樓事件は津村素雨の麗筆にのつた事もあると思ふ。現に生きてゐる連中も少なからず、就て聞くべし笑ふべしである。更にフォックスウエル事件でイガミあつた松浦岡もその後親友中の親友となつた。かへりみればあの時分は罪が無かつた他愛が無かつた。春風秋雨五十年、觀じ来れば夢の又夢である。

(現代、十五年二月號)

同じ事件を取扱つた津村素雨の隨筆が上梓されてゐる。何よりも此一文が雜誌に現はれたときは素雨は既に此世に居なくなつてゐる。

一二直角の靴

和歌山中學時代の思ひ出

僕の和中談は、半世紀前の和中談である。

一つの縣で縣廳所在地に中學校が只一つといふ時代の話である。明治にしても十何年時代の古い古い思ひ出である。

無論交通が不便であり、金の値段の高い時分であるから、一縣に中學校は只の一つであつても、さうさう入學志願者が雲集したとまではいへない。しかし相當志願者が多かつた。従つて落伍者も少くなかつた。

その上に明治十九年でもあつたらうか、そこに和中異變が起つた。といふのは十錢の授業料が一躍六十錢にハネ上つたのである。さらに洋服を着すべし靴をはくべしといふ事になつた。さらに教科書の多くが洋書になる。いまだに忘れもしない。

文法は スキンントンのグラムマー
地理は モーレーのデョーグラフィ
算術は ロビンソンのアリソメチック
幾何は ウキルソンのデョーメトリー
英文は ナシヨナルのリーダー

といふやうに、どれもこれも英書になつた。たしかモーレーの地理は一冊一冊を越えたと思ふ。さらに辛かつたのは英語の字引が入用になる、というて近頃のやうに安くて手頃なものは無い、カサ張つた大きな辭書、それも例の薩摩字彙は四圓を超えたかと思ふ。

授業料は飛び上がる、教科書や字引に少からぬ金がかかる、洋服も靴や帽子ぐるみではどうしても五圓臺から下ではむづかしい。

この異變に直面した爲にばたばたと中途退學が出来た、本人は學術優等であるが父兄の懷中が寒いため、止むなく學業を中止した者が少くない。氣の毒な事であり遺憾な事であり、勿體ない惜しい事であつた。

俄かに英書が多くなつたところへ、英語の先生の試験が相當にむづかしい上に點が馬鹿に辛い。

我等同人間では専ら箕浦義質といふ英語の先生のおかげなりといはれたが、事實のほどは保證の限りでない。恐らく鈴木大瀧などいふ數學の先生たちのお蔭でも、かなりやられた事と思ふが、とにかく百餘名は越えてゐた中學の第一學年生が、第二學年となるときに半分は落第した。こんな事が當今かりに持ち上つて見給へ、それこそ中學校の校長や先生は攻撃非難の鎗玉にあがり、そのままではすまない事になるのはうけ合であるが、その頃は諸事泣寝入りでケリがついたらしく。

僕はその第二學年に在學中東京の父の許へ一家をあげて引越をした。その頃は東京遊學の爲め半途退學した者も少くなかつたが、それやこれやで僕のと看に入學した同窓にして一年一年と順當に及第し、豫定通り五ヶ年で卒業した者は只の四名であつた……その首席が北海道廳長官京都市長等になつた土岐嘉平君であつた……只の四名。まるで弘安四年の颯風に遇つた元寇の兵隊さん見たやうな目に遇つたのである。

實際あの時は學科の上からも金錢の上からも、不意に過重な重荷を背負はされたのである。

僕の家は父は東京へ出奔してゐる、留守宅はやつとの事喰つてゆくのがセイ一杯である。

だから洋服はまさか父の服をといふわけにいかない、帽子も親爺の山高でもあるまいが、靴は父の靴でよろしい、いや我慢せよといふ。その頃の靴は先きが細く尖つてゐるのが流行してゐる、

ところが父の靴は先きが廣くなつてゐる。そこで級友は僕をアダナして二直角といふ、靴の先きが尖つてない、平面で一直線をなしてゐる、幾何學の覚え立てで早速二直角といふ名をつけられたのである。

二直角であらうが無からうが大きなお世話である、少しも意に介するに足らないのであるが、どうも氣の小さい子供であるからとてつらい。いささか大きい親ゆづりの靴の先きへ、綿をつめてある、その二直角の靴をはいて體操するとき整列するとき、どうも氣になつて仕方が無い。財政の不如意は圖畫の鉛筆にしても2Bでも3Bでも一本しか買へない、何よりも字引が買へない、薩摩字彙は求められない、二圓のナツタルの字書さへも手に入れられない。だから財政の方からも學科の方からも、ひしひしと重壓を感じるばかりである。

だからいよいよ東京なる父のもとへ一家引越しときまつた時には、東京へ行く嬉しさよりも和歌山でない和歌山を去る嬉しさで、手の舞ひ足の踏むところを知らなかつたのであつた。

こんな事をダラダラと書きつけるのは、いはゆる試験地獄といふものは何も近頃はじまつたものでも何んでも無い、昔から珍らしくない事である。高等中學——今の高等學校入學にしても當時東京では千餘人受験して十分の一も合格しなかつたのである。又麻布赤坂あかりから本郷への

通學にしても、いつも親ゆづりの二本足でテクル外に道が無かつたのである。その昔和中でも一里二里の遠方から通學してゐる學友も少くなかつた。

近頃は交通が便利になつて省線でお茶の水驛で下車する。それから又電車に乗つて大學へ通ふ、事變前には三四人組みになり、タクシーを赤門まで走らせる例さへあつた。

それもこれも文化の發達交通の進歩に伴ふ自然の數でもあらうが、近頃は高等學校の入學試験いや大學の入學試験にさへ母親と一緒に來る事も、時代の動きに伴ひ目につくのである。我等の時には中學校の入學にさへ母親は付いて來なかつた。試験場にまで付いてくるのが母性愛の尺度といふのであつたなら、今に文官高等試験さらにお役所や銀行への通勤にまで、付いてくる時代がくるのぢやないか……。

皮肉な惡口も此邊でやめにする。

僕等の時代よりさらに古い和中時代を知りたければ杉村楚人冠とか窪田四郎などいふ先輩がある。さらに少々新しいところといふならば野村吉三郎大將などがある。いづれは時代により又校長さんにより、半世紀を越ゆる和中的の長い間には、其間いろいろの曲折を経て來るのであらうから……ここには授業料六十錢に飛躍時代の片影のみを。

昭和十四年身邊雜話

何か新年號へ隨筆をといふ事である。しかし場面は和歌山方面への畫報であつて見ると、今さら中央貯蓄獎勵委員會や中央物價委員會や、教育審議會や拓殖委員會等々から引きぬかれた店さらしでもあるまい、というて體力審議會や大日本體育協會の樂屋話しも、國際協會や滿洲移住協會や國策研究會から小耳にはさんだ小話もどうかと思ふ。

*

社會畫報は名の示す如く畫報であつて、眼を通して肩がこらない。そして故郷の消息が氣安く知られるのだから、僕はふだんより畫報に負ふところが多い。その畫報にあまり虫が好すぎる、あまりにも勝手がましいが、此くれば年末のあいさつ状をやめる事にしたので、身邊消息の一片を筆にさして貰ふ。

僕の年末あいさつ状は約一萬通に及ぶ、浪人になつて大分その數を整理したが、絶えず旅行も

し講演に廻はる、くさぐさの委員會などに顔を出す、つい尻から尻から新規の友人が増すばかりである。僕は金蘭簿にのせられる知友の數の増すのは、自分の健康を裏書きするものとして自視してゐる。年末にあいさつ状を差し出すのは、年初には東になつて配達されるから眼が通されにくい、年末におくる方が利き目が多い、それだけにかなり長々と一年中の消息を認めてある。しかし年末を撰んだのは、年賀状の爲めに郵便局はいかに繁忙を極めるかといふ事を、逕信省に在職して親しく體驗してゐる。だから年末年始の郵便局の仕事の重荷を心ばかりでも輕めたいといふ氣分も手傳うてゐるのである。

*

年賀状の廢止は僕は賛成できない、年に一度の事である、せめても友人に一言のあいさつをする事は悪い事でもけしからぬ事でも無い、厄介だ面倒だと思ふ人はやらぬまでである。やる人はやるで自己満足がある、僕はその自己満足を忠實につづけて來た。僕の妻は毎年十月はじめから毎日々々机によりかかり、あいさつ状の表書を筆にしたものである。

妻が健康を害したならば代書人に頼んでよい。今年止めたのは、一つは物價委員會で紙の不足といふ事を一層強く感じて來たからである。一つは東京府の精神總動員の委員として年賀状廢止の決議に参加したからである。だからかうした事態が無くなれば、いつでも復活する事はもちろ

んである。

*

そこで僕の本年中の消息にさかのぼると、あまり筆にすべき事が多い。何としても数多い委員會の中で中央物價委員會の爲め尤も多くの時日を費した、僕は常任委員であり、その特別部會の二つの席に列し、別に纖維品及び小麦の部會に顔を出してゐる。さらに食料品専門物價委員會の委員長であり、ひいては醬油その他の専門部會の委員長でもあり、近頃又特免織物の委員會の會長となつてゐる。昨年滿鮮北支に旅したから今夏は臺灣在職以來の宿題となつてゐる表南洋巡遊を企てた、又樺太や裏南洋からの招待もあつたが、凡てが物價委員會の爲めオヂヤンになつた。

しかし日本滿洲支那の交驛競技大會が、九月はじめその第一回を滿洲新京に開く事になつたので、八月下旬東京發新潟羅津を経て新京に入り、大會に臨みしあと拉濱線の自由移民部落や吉林の六十萬キロ發電のダム工事を見、朝鮮を経て歸路に對馬壹岐を巡遊した。之れで八十何ヶ國かの國々は凡て足を印した事になつたのである。

この暮はせめて臺灣に遊び我がペンネームであり、又最初の探險を試みさせた因縁ある海南島に、紀元二千六百年の元且をおくり、中支を経て議會前に歸る豫定になつてゐる。

*

五體は幸にも又不思議にも丈夫である、只大學の同窓の舊知が梧桐の葉の散る如くに失せてゆくのは傷心の極である。今年になりて既に六名、しかも最近には小橋一太、太田光熙、岡實と相次で長逝した。小橋、岡は特に親しくしてゐた。特に岡君については「岡實と僕」と題しサンデー毎日にのせたから既に御承知の方もあらうと思ふ。岡實君とは妻が従姉妹同志である。共に東京都の大學の講壇に立ち、彼は行政法を我は財政學を講じて各書冊となつた。彼は商工局長として工場法を、我は貯金局長として簡易生命保險制度につき力をいたした。共に法學博士となり、共に相次で官界を去り、我は朝日新聞社に彼は毎日新聞社に入社した、天下かくまで相似通うた形影相伴へる生活を、半世紀の長きに亙りておくりし者が他にあらうか、その岡君は十一月二十日に亡くなつた、それは僕には大きなショックである、打撃であつた。

故人の寫眞の前に僕は、いつも達者に達者にといつたに何故先きにいつたかといふ我思ひをくりかへし、さらに又彼が何故お前はさう忙しく五體を虐使するか、休息せよ休息せよといつた彼の語をくりかへして見た。事實十一月二十日には午後貴族院の研究會で酒井農相を圍んでの懇談會があり、夜は恰かも小橋君の五十日祭があり、又親友青山君の令息の結婚披露宴もあつた。しかしどれもこれも先約の爲め行けなかつた。といふのは此日は朝は偕行社で梅津關東軍司令官と會見の約束があり、十時から商工省で小麦の特別物價委員會があり、おひるは國際協會で近く

かへつた同郷の貴族院議員阪西中將の支那についての懇談會がある。二時から帝國教育會館で厚生省主催の健康保險講習會に二時間に互る時局と經濟の講演があり、四時から國策研究會の第一委員會で米國より歸朝したばかりの郷敏君の日米通商條約談がある。引つづき五時から丸之内會館で有馬伯爵山本海軍大將菊池寛君等と「母性をたたへる」といふ座談會に列する。七時近い横須賀電車で横濱に下車、すぐ横濱會館にかけつける、つないでくれた永田青嵐君と入れ代つて壇上に立ち「歐洲大戰と極東」につき一時間半講演する。之れで大森田園調布にかへつてからが、その間寸時のひまもなくそれからそれへと渡り鳥をしたのであるが、しかもその朝岡君が亡くなつた。妻と岡邸へかけつけた、又横濱からのかへり路に田園調布の家宅を通りぬけて、又岡邸の通夜にかけつけたのである。まさしく五體を虚使して。故人の寫眞の前でこれから少しらくに體をつかふ事になると口のうちにつぶやいたのである。先づそれだけ僕の健康は今のところ相當なものである、只々有りがたい事と思つてゐる。

筆先の方は今年「支那朝鮮滿洲」といふ書冊が第一書房から「對支工作と宗教」及び「對支工作と民族問題と教育」といふ二つのパンフレットは啓明會から、又新潮社の「これからの日本と世界」は今年中にさらに二回版を重ね、「動く日本」は再版になつた。

十五年には書きおろしの書冊三部をどうしても仕上げねばならず、それへ第四の歌集と、例に

より隨筆集が上梓されるはずである。猶此年にこそ宿願の南洋へと遊志が動いてゐる。手前ミソの樂屋話をだらだらと書きつけ、身邊の消息をのべたるは誠に恐縮であるが、以て郷里の知友へのあいさつにかへる。終りにみなさまの御多祥と御健康をいのり上げる。

(社會書報、十五年一月號)

笑ふに笑へなかつた話

婚禮の席で媒人が新郎の親、杉山四五郎君を三四郎々々と再三ならず繰り返す。一同笑ふに笑はず皆下を向いて、笑ひを噛み殺してゐる。

來賓奥田義人君が立つた、お仲人は四五郎君を三四郎々々といはれたが、之は新家庭がむつまじく、早く、産しろう産しろうといふ氣持ではれた事と思ひます。ここで一同朗かに大笑。

第五篇 時事解説篇

乳幼児を生かせ

一 多産多死の日本

B 乳幼児童をもり育てよといふ運動が盛んになつて來ましたが……

A さうだよ。

B 日本は母性愛を看板にしてるのだから、何も今更子供を可愛がれといはなくても……

A 可愛がるといふことと、丈夫な子供に育て上げるといふことはちがふからね。数多い中にはたまには貰ひ子殺しもある、生みの親とても我子を虐待するためしも無いではない。

B しかしそれは少い。

A 無論少い。多かつたら騒動だ。焼野の雉子夜の鶴といふ、禽獸猶然り、況んや萬物の靈長たる人間においてをやだね。問題は、親は子を可愛がるが、丈夫に育て上げたくとも力が足りない、栄養が充分でないとか、醫藥の手當ができないといふのも少くない。

B 醫師へかけつけた時はもう手おくれといふのが多いね。

A そこへ、力が足りてゐても育て方が見當ちがひになつて逆効果になるのも少くない。また氣づかずに子供の健康を見す見すこはす例も多い。つまり衛生知識の缺乏といふことになるね。だから歐米にくらべて著しい開きがあるね。

B そんなにちがつてますか。

A ちがつてればこそ日本は多産多死の國といはれてゐる。先づ人口千につき出産率を見ると次の表のやうになる。

	日本	イタリー	ドイツ	フランス	イギリス
一九〇一年	三一、八人	三三、六人	三四、三人	二一、一人	二八、一人
一九二一年	三四、六	二九、一	二二、一	一九、五	一九、九
一九三一年	三二、二	二四、七	一六、〇	一七、四	一五、二
一九三六年	二九、九	二二、五	一九、〇	一五、〇	一四、八

これで日本の多産といふことが分るが、序でにこの表の中から唯一の例外として、ドイツが歐洲大戦後激減した出産率を、かなり取りかへしてゐることに注意してほしい。

B なるほど、ドイツだけは逆に増して來てますな。

A そこにドイツの底力の強さがあるね。それから今度は出生百人につき一年未滿に亡くなる子供の統計を見ると次のやうになる。

	日本	イタリー	フランス	ドイツ	イギリス
一九〇一年	一五、四人	一六、八人	一三、九人	一九、九人	一三、八人
一九二一年	一五、九	一二、五	九、四	一二、二	七、六
一九三一年	一三、二	一一、三	七、六	八、三	六、六
一九三六年	一〇、七	一〇、一	六、九	六、八	五、七

これで見ても、日本の乳兒死亡率は年を経て次第に減少して來たが、それでも猶イギリスの倍になつてゐる、折角生れた子供を澤山亡くするのは、何としても勿體ない。

B 全く勿體ない。

二 乳幼兒死亡率の高い日本

A 僕のいつも口癖にしていることだが、何故に日本人の平均壽命が歐米人にくらべて、ならし十年も短いのか、北歐人は平均が六十歳以上を超えてゐるのに、何故日本人は四十五歳前後に止まつてるか、一向に延長されさうにない……

B もうその話は耳にたこだよ……つまり乳兒幼児青少年など、若い者がコロコロ死ぬから、平均も短くなるといふのでせう。

A さうだよ……そこでその乳兒の死亡につき調べてみると、満一歳までに亡くなつた總數を千とすると、

先天性弱質のもの

二七七八

下痢及び腸炎によるもの

一八二八

肺炎によるもの

一七一八

先づこの三口が一番多い、千人中に六百三十人といふ數に上つてゐる。

B 先天性弱質といふのは……

A 親たちの精神病とか、酒毒、微毒等々の原因による先天的の弱體者だから、この方は親たちからして健康になつてくれないと、いかに手當をよくしても丈夫な子供に育て上げかねる。しかし下痢、腸炎とか肺炎とかいふのは、母親の注意次第で病氣にならずにすむ、また病氣になつても命をとられずにすむ、何も、弱い子供だからさうした病氣にかかるとは限らない。命も助ければ丈夫な子供にも育て上げることができはすである。そこでこの乳兒幼児の死亡率を少くしよう、丈夫に育て上げようといふのが今問題になつてゐる。もともと平時に於ても心がけねばなら

ないが、この戦時になつて一層その必要が痛感されて來たのだね。

B といふと……

三 時局に直面したる人の需給

A それはくどいやうだが、戦場の第一線に多數の出征者がある、滿支方面の公私あらゆる方面にも澤山の渡航者がある。滿洲へは移民も相當に進出する。

B 第一線では戦死者もある、病歿する者もある。

A その通り。ところが、さうした人たちの亡くなるのは僕のやうな老人の亡くなるのとはちがふ、僕らは亡くなれば僕らだけの人口減であるが、若い人たちは、生存してをればあとへ何人かの二世を生み残してゆくべき人たちだから……

B なるほどね。

A そこへ、凱旋する將士にしても、變つた風土に出あつて、いろいろの病氣にかかる、病氣にならぬまでも、多少共みな體位が低下する。歐洲戦争の時なども、交戦國は戦後人口の増加率はうんと減じた、何よりも體位が低下した。

B いかさまなう。

A ところが更に更に憂ふべきことは、若い人たちが多數外地へ出かけたなら、その間内地における妊孕率出産率が著しく低下するといふことである。

B なるほど。

A 支那事變は一昨年の七月に突發した。初めのうちは出征者の數も少い、また細君たちの妊娠中のももありうるが、月を重ねるほど出征者が多くなる、細君たちも新規に妊娠する機會が無くなつてしまつてる。だから昨年になると一昨年にくらべて出生數は著しく低下した。

B その證據は？

四 事變に伴ふ出生數の激減

A 昨十三年中の出生、死亡は

出生	百九十二萬八千五百〇六人
死亡	百二十五萬八千九百〇二人
差引増	六十六萬九千六百〇四人

といふことになつてる。我々は口癖に一年に人口の差増百萬人といつてる。それが六十萬人臺などに落ちたといふことは未曾有の出來事である。あらづかみ三十萬人の減となるが、これを昨

年と一昨年と月別にくらべてみると、昨年は三月から多少共前年同月より減じはじめ、年末十月から十二月まで三ヶ月間になると、

十三年は	四十二萬二千三百四十一人
十二年	五十三萬二千百九十一人にくらべ

十萬九千人の激減を示してる。

B それでは本年になると……

A 無論一層減少することは明かである。なほ今年生れた子供はすぐ鐵砲かついで出かけるわけでもなく、工場で作業をつづけられるものではない。しかしこの状態が二年つづけば二年だけは人口が減少してる。さすれば二十年ほど立つと、壯丁が相當缺乏をつけることになる。またその頃の出生率も低下することになる。

B それでは、歐洲では今丁度壯丁前後の若い連中がゲッソリ減つて困つてるのは……

A 人口の増加はその後次第に取りかへしうるとしても、一旦減少した年はそのままいついつまでもついで廻る。

B 物も無駄のないやうに充分に活用せねばならないが、人はさう機械的にふやさうといつてもふやされない。この際體位の向上につとめ、健康に留意し、充分にその能率を擧げしめなければ

ば……

- A 分つたよ……どちらが説明してるのか分らなくなつたぢやないか。
- B イヤ先走つて大きに失禮、いつも聞かされつけてるのでつい……

五 日獨間の乳幼児の比較

A そこでこの際、生めよ殖えよといつても、さう右左に出生数を増すことはできない。かねがね問題にしてゐた乳幼児の死亡率こそ、この際せめて歐米並に切り下げる。

- B それには何かめどがなくては……
- A それには少し細かすぎるが、零歳の時の死因別につき日本とドイツとの比較表をかかげることにしよう。

日獨零歳死因別死亡率（一萬人對）

病名	一九三四年		一九三三年	
	男子	女子	男子	女子
麻疹	日本 一六、〇	ドイツ 四、四	日本 一五、五	ドイツ 三、八
猩紅熱	日本 一〇、五	ドイツ 一五、二	日本 一五、七	ドイツ 一五、五
百日咳	日本 二、一	ドイツ 一、七	日本 一、八	ドイツ 一、六
チフテリア	日本 五、八	ドイツ 七、四	日本 四、八	ドイツ 六、〇
結核	日本 一六、七	ドイツ 二、八	日本 一五、一	ドイツ 〇、四
微毒	日本 六、二	ドイツ 五、八	日本 五、六	ドイツ 三、七
脳膜炎	日本 四、七	ドイツ 二、八	日本 四、九	ドイツ 九、七
気管支カタル	日本 二、三	ドイツ 一、八	日本 二、一	ドイツ 一、七
肺炎	日本 二、五	ドイツ 一、九	日本 二、二	ドイツ 一、〇
下痢及び腸炎	日本 一、〇	ドイツ 七、二	日本 二、九	ドイツ 五、三
腎臓炎	日本 一、一	ドイツ 〇、九	日本 九、七	ドイツ 〇、八
先天性弱質	日本 四、七	ドイツ 三、五	日本 四、八	ドイツ 二、七

この數字を見ると、いかに下痢及び腸炎、肺炎、脳膜炎による乳児の死亡率が日本に於て特に高いかといふことが分る。

- B 一歳からさきは？
- A 日本では一年に約百二十萬人の死亡者中、三分の一近くは四歳以下の子供たちになつてゐる。一歳乃至四歳の主なる死因別について見ると次の如くなる。

病名	一九三四年		一九三三年	
	男子	女子	男子	女子
麻疹	八、四	八、五	八、二	八、六
猩紅熱	〇、二	〇、三	〇、二	〇、二
百日咳	四、五	六、一	六、二	八、五
チフテリア	五、二	四、一	四、二	三、六
結核	六、〇	五、〇	五、八	五、六
脳膜炎	一〇、一	一、一	一八、九	一、二
気管支カタル	四、一	四、一	三、六	三、五
肺炎	四、三	九、八	三、七	三、三
下痢及び腸炎	六、三	二、〇	五、五	一、八
腎臓炎	六、一	〇、五	六、〇	五、〇

この表を見ても下痢、腸炎による死亡率が高く、ドイツの三十倍になつてゐる。脳膜炎もドイツにくらべ、零歳で十倍、一歳から四歳で二十倍、肺炎はいづれも四倍、気管支カタルでも零歳で六倍、それから……

- B もう澤山……頭が痛くなつて来た。
- A もう少し聞きたまへ。結論を……
- B 結論は？

六 乳幼児死亡率の減少

A 先づ病氣持ちのまま結婚しない。また結婚してからも、殊に男子は病氣になつた時は一段と注意して、先天的の弱質者をつくらないやうに用心する。

B オー・ケー。

A 次に妊娠すると、その手當なりをすべて特に講習せしめる。歐米諸國では、やかましく妊娠に伴ふ衛生知識につき、よく妊娠者に習得せしめてゐる。日本では不注意の爲に現に死産率は歐米の二倍三倍に上つてゐる。

- B オー・ケー。

A 乳幼児に對する衛生、また病氣に對する手當、さうしたことが日本では全然缺けてゐる。少し注意すれば早いところで回復できるものを、うつかり氣づかずにゐる。また、加減が悪いなと氣づいても、冷すのか温めるのか、食事の調節なりその他應急の手當がどうしてよいか分らな

い。時には逆なことすらやりかねない。いよいよ醫師にかけつけるころは、もう手おくれといふことが多い。

B それから、子供が泣きさへすれば、かまはずに食はせる、時間も分量も品目も見境がない。更に、幼い子供を活動小屋などへつれ込む、汚い空気の途中で、うつたうしくて泣く子供にノベツに乳房をふくませる……

A また僕のお先へ廻つて……

B いやもう何度聞かされたか分らないから、たまには立てかへさして……

A もちろん多數の中には、あまりやかましく切りつめすぎて小食となり、シワのよつてる赤坊もある。まあいづれにしても託児所の設備の普及、それから健康相談所の活用、特に婦人たちの妊娠育児の衛生知識の習熟、更に乳呑児を盛り場へつれて行くことなどは警察で嚴禁する。まあさうしたならば、少くとも十萬や十五萬の子供の命は助かる。

またそれはただ十萬二十萬の命が助かるばかりではない、五歳から先へ今まで生きのびてきた子供たちの體位も順ぐりに上ることになる。

B それから先は……

A 青少年をむしばむ結核退治といふことになるが、今日はこの邊で。(二四、六、二七)

日英會談

一 日本外交の勝利

B 七月二十二日午後十二時外相官邸で署名された日英會談の覺書!! かはれば變る世の中になりましたな……

A 感慨無量だよ。

B 先づこれまでは成功ですな……

A 失敗ぢやないね。

B いやに皮肉ですな。フランスの新聞まで、英國が日本と妥協せざるを得なくなつたことを認め、英國が東亞にその勢力を割く必要が無くなつただけ、歐洲でニラミが利くことになつたと喜んでる。アメリカの新聞は……

A いや、よう分つてるよ……

B まあ序だから聞いてください。アメリカの輿論は、日本外交の勝利、英國勢威の失墜といふことを認めてる。アメリカ第一の新聞ニューヨーク・タイムスには、

英國の讓歩によつて日本は二重の利益を得ることとなつた。交戦國としての日本は自衛上、或は占領區域の治安の確保上適當の措置を取ることが出来、同時に戦争をしてゐない國としての日本は、米の中立法を免れ、軍需品の供給を受けることが出来るからである。

といつてますよ。

A 分つてるよ。そこで……

これからの見通しを……

A それは今日（七月二十七日）のところではまだ何ともいへない。しかし見通しをつけるために、どうして東京會談が開かれたか、またはじめから決裂のうはさが高かつたが、どうして意外に好轉して來たか、そのあらましを話さうぢやないか。

二 天津租界問題の火の手

B 賛成！ それでは事の起りは？

A 四月の九日に、聯銀の支店長程錫庚が英國租界で抗日テロに殺された。こんなことは、今

まで數へ切れないほど度重なつてる。

B 上海では随分やられましたね。

A 暗殺犯人四名を當方へ引き渡せといつても、酔のコンニャクのことについて承知しない。たうとうシビレを切らして六月の十四日から英租界に通ずる七つの大道に關所を設け、出入する者は一々審問検査する。現實に英租界を封鎖したのだね。今度は英國の方で大痛事さ。

B なるほど。

A しかし斷つておくよ、英租界といふ痛があるために、とれだけ我が作戦が妨害されたり、またとれだけ現地の治安が亂されたか……

B たしか臨時政府へ引繼がねばならない支那の銀行の正貨も、租界にあるので手がつけられないといふことでしたな。

A 僕は昨年秋口に北支方面を旅したが、當時毎日のやうな鐵道事故がある、山海關から天津北京へゆく幹線にさへ事故がある。列車の危害はもとよりステーションが焼き拂はれる。

B よく放火もありましたな？

A 僕の北京入りの夜は有名な中原百貨店が焼かれた。天津の放火は實に頻々たるもので、積み重ねられてる棉花の中へ火薬を仕込む、數時間立つてからブスブス燃えあがる。毎日のやうに

抗日テロが出没したね。實際天津殊に上海で、支那軍と戦つたとき、租界がはさまつてゐたため我が作戦は想像以上妨げられる、これに反し支那軍は租界を利用してどれだけ便宜を得たか。東京でいへば、京橋、日本橋、大阪でいへば中の島、船場が租界になつてゐる。四方八方から交通は自在である。銀行會社官公署めぼしいものはみなその中にある。それで我軍はその中へは手がつけられない。爆弾を落すといつても租界を避けるのが一と通りや二た通りの苦心ぢやない。

三 阿片戦争と租界の誕生

- B 一體一國の街の中へ、手のつけられない場所、いはば外國の領土見たやうなものが……
- A 支那側にとつても今度はテロや共匪の連中には、租界があるので都合がよかつたらうが、いつも支那で政變が起る毎に負けた方が租界へ遁げ込んでしまふ。また現政府を倒さうといふ一味徒黨は租界に巢を喰ふ。租界の方ではまたさうした連中をかばつてゆく、支那の方からはいつも眼の前にダイナマイトを抱へさせられてるやうなもので、これぢややり切れたものでない。
- B こりやお説御尤もだ。
- A だから程なにがしの暗殺犯人を引き渡さないといふ一事は、いはばシビレを切らずに至らしめし最後のキツカケだね。昨年の秋僕の旅してゐた頃にも、電話などは英租界の分はほかと

中繼しないことにした。だから英租界内の日本人は次第に引きあげてゐたよ。

- B その頃からいぶつてゐたのですね。一體そんな租界なんか、なんで出来たので……
- A 遠くさかのぼれば、今から約百年近くなるが、例の阿片戦争！
- B 支那の方で英國の商人が密輸入する阿片を焼いた……英國は逆ねぢで……
- A ケンからぬといふので戦争になる、支那は負ける。千八百四十二年の南京條約により、英國は六百萬圓の賠償金をとる。香港島をペロリとちやうだいする。五ヶ所の開港地を強要する。その時に租界地が出来る。それから歐洲の列國が相次いで、四方八方からどれだけ支那を蠶食したることか……

四 支那の癩——租界

B 暑さの折からその邊で御免を蒙らう、僕等は阿片戦争だけで澤山ですよ。阿片吸飲を嚴禁してゐるものに、戦争をしかけ、土地や償金などしぼり上げたが、それは一時の問題である。しかし、たうとう阿片輸入公許にまで漕ぎつけ、支那四億の民を阿片の癩者となし、道德衛生を破壊し、精神的に肉體的に支那の民衆を去勢してしまつた。英國の仕打ばかりは、これは殘忍といはんか酷薄といはんか、言語道斷といはざるを得ないね。

A その阿片戦争から各開港地に租界地が生れたが、千八百五十三年長髮賊の亂で名高い洪秀全の太平天國軍が上海縣城を陥れる時、清國の軍隊と長髮軍とが相對立する、租界は嚴正中立だといふので、ここに中立性が強調される。それから前にもいつたやうに租界は別天地として政治運動の策源地と保障される。支那の政治は亂れて動搖常ないから、民衆も租界の中で營業する方が安全だといふので、銀行會社みな租界の中に集まつてくる。たうとう今日に至つたが、支那政府も租界還附運動で九江とか鎮江とか重要性の乏しいところは還附したが、上海、天津などは正しく支那より見れば千古の鐵壁である。それが今日日本の手によりてガラガラと崩れつつあるのだね。

五 租界封鎖の苦藥

B 租界については大凡分つたが、さて英國の轉回することになつた理由といふのは？

A これには、いろいろの理由が考へられる。先づ何よりも日本の鼻息が荒い強いといふことである。封鎖して出入するものを一々とりしらべる。支那民衆の群がつてる眼の前で、英國人もあらう者が、上着を脱ぐチョッキをとるズボンを脱げ、さうした目に遇ふことは、ミルクが乏しくなつたとか野菜が手に入らないとか、物價暴騰とか租界内の不景氣とかそんなこと以上に、

英人としては想像以上の苦痛でもあつたであらう。殊に他の外人にくらべて相當手ひどくやられたから、これも英人としては堪へがたいであらう。

B 他の外人にくらべて？

A さうだよ。僕は歐洲大陸に留學中いつも見聞したが、英人にはアイムブリチッシュといふ自尊心がある。他の白人よりも一段二段と上のクラスであるといふ心構へがある。だから有色人種に對してはその氣分が一層強い。僕は義和團事件直後一年半ばかり北京にゐたが、外人は支那人を人間扱ひしない。二度目には蹴るなぐる。人力車の上でステッキで後から車夫の肩をなぐるお尻をつく……

B その支那人の前で、英國人が檢閲をうけるのですかな、成程こりやひしひしと思ひ當るだらうな。

A そこへ誰でもその土地にひいきがつく、カー大使は蔣政權にクレイギー大使は日本側に、それぞれひいきがつく。ただカー大使のひいきはひどすぎる。これは萬人が見て眼にあまつた。

六 英國時局再認識の秋

B それから……

A そこへ、日本はなかなかヘコタレない。ますます根強く手廣く奥深く長期應戦を強行する。どうも奥地の蔣を此上力持ちをしても次第に見込薄である。此邊で日本と握手をしなければアブ蜂取らずになる。これちや東亞の權益も身も粉もなくしてしまふ。

B そこで經濟戰で日本をとつちめると……

A 大分にカラ聲は上げてゐたが、英の本國と日本との貿易は我が輸入高三十八億圓中一億圓、輸出高三十二億圓中一億五千萬圓ぐらゐにすぎない。というて外地の印度、濠洲などで、棉花は賣らさぬ羊毛は賣らさぬといつても、日本は外から手に入れうる。賣らない印度、濠洲の方が困る。そこで北米合衆國が片棒かつくとこれならモノになるが、これもニューヨーク・タイムスの言つたやうに、今頃米國は英國と手を握つて縁の薄い極東で火中の栗を拾はうとはいはない。

B それなら、武力ではどうかといふと、太平洋方面の英艦隊に佛艦隊が参加しても、我が海軍の精銳の前ではテンデ問題にならない。

A 何よりも英國の支那における權益は日本と相伯仲してゐるが、英國海外權益全體の上から見れば問題にならない。それよりもビルマから印度、パレスチナ、到るところプスプス煙りが立つてる。何よりも英本國の本家の方が大變である。ミンヘン協定以來煮え湯をのませられてゐるが、さらに今ダンチツヒ問題を中心として風雲急なるものがある。氣にそまぬソ聯まで身方へ

巻き込みにかかるが、ウンと云はぬ。もし波蘭に火の手が上つた時に、今度はまさか眼をつぶつて頬冠りもできない。その時はすぐロンドンの上へ爆弾といふことを覺悟せねばならない。

B 豺狼途に横はる何ぞ狐狸を問はんやかね。

A まあさうもいへる。僕は千八百五十七年二月のアロー事件……支那領海内の支那船中の犯罪乗組員引渡問題から横車を押した事件……あの時の英國議會におけるリンドハースト卿の詞を引いて見る。

『イギリス人がアジア諸國民に對する場合になると、その道德的觀念は弛緩し、法律に對する考へも全然別人のやうになり、非常に傲慢になる弊がある。』

どうか此惡夢がかうした機會にすつかり醒めてほしいな。

B ところで米國は味な手を見せましたな。日米通商條約廢棄を……

A 藪から棒にやりをつた。しかしまだあわてるには當るまい。どうひびくかは六ヶ月先の話で……

B 米國の肚の中は？

A 米國としては英國への同情がある。英國へ讓歩させた日本への反感がある。しかしこれ以上手荒なことはせんぢやらう。歐洲大戰で拂つた犠牲がまだ忘れられんから、英佛に好意を寄せ

る姿態は示すだらうが、それ以上火中の栗を拾ふやうなことはやらんぢやろ。

B 重慶政府はエライ喜びやうで……

A 頼みの綱の英國が頼りなくなつて悲憤慷慨しとつたところだから、鬼の首でも取つたやうに、隨喜の涙を流して米國禮讚をやつとるが、これも氣が早すぎる。まあどつちにしても我國は既定方針どほり進むまでだね。

(主婦之友、十四年九月號)

結婚十戒讀本

百萬人のお嬢様のために

第八則 迷信や因襲に捕はれるな 内地だけでも一年に百萬人以上の女子が生れる。その百萬人が丙午だらうといふので揃ひも揃うてよろしくない、丙午の婦人とは結婚してはいけないといふのは、あまりにも非常識な想像すら出来ない事だが、いつの間にか迷信され、随分不幸な境遇におかれる婦人が多い。こんな馬鹿々々しい事があつたものではない。一體一年を通じて生れた男も女も何んの性だとかいつて、どうのかうのと片付けるのは無茶である。亂暴である。

(婦女界、十四年十二月號)

ヨーロッパの動亂と日本

一 戦亂勃發まで

B たうとう始まつたね。

A 始まつたよ。

B やるぞやるぞと言つてたのが、たうとう傳家の寶刀を抜いたわけだね。

A だから、ヒットラーも今度こそは「勝利か死か」と言つてる。

B そのヒットラーには、一ぱい食はされたね。

A 獨ソ不可侵條約かね。國際問題は、ああしたものだな……

B おつに悟つてるやうだが、あんまり馬鹿にして貰ひたくはないね。

A 馬鹿にしないが、由來日本人は馬鹿正直だからな。尤も今度のお仲間には、ロシアへ乗り込んで手を握りにいつてる、一層念入りの英佛もあるがね……

B あれはきびしかつたね、佛の顔も三度といふが……イギリスもアア立てつづけにうつちやられては、全く氣の毒見たやうだね。ところでまあイギリスはイギリスとして……一體日獨伊樞軸は防共……あのソ聯の赤に對するイデオロギーから來たのでせう？

A さうだよ。

B 今までソ獨の間は共産とナチは相容れずといふので、悪態のつきつこをしてゐたのが、宙返りして手を握る、それぢや防共もナチもヘツタクレもあつたものぢやない、本當に、わてよう云はんわ……

A ところが、ドイツ政府のフリツチエ情報部長は、

「防共協定は、その名稱の如くコミンテルン破壊工作の防遏を目的とし、特定の國家を對象とせざる思想上の協定であるに對し、不可侵條約は特定の國家間における政治協定なのである。」といつてるよ。

B それですな、ベルリンやローマからの情報として、

「ともかく日本としては、その世界政策を再検討して、ドイツと共同の目標に進み、ソ聯と不侵略條約を締結して、英國打倒に共同戰線を張るべきだ。」

などとおつしやつてるのは？

A さうだよ更にドイツの外相は、日本のためには日ソの不可侵條約を結ぶべくお手傳ひする用意があるとな……

B 御戲談でせう！

A まあさう怒り給ふな。昨年暮日露漁業問題の交渉中に、リトヴィノフ外相は東郷大使に、防共協定の對象はソ聯である、コミンテルンとソ聯の使ひ分けは片腹痛い、日獨共に假面を脱いで出直せとまで放言したさうだよ……

B ますます怪しからんね……

A リッペンントロップ外相は、我が大島大使より「獨ソ條約締結により日獨樞軸關係は變更を受けるのか。」と質したるに對し、「遺憾ながら、變更を餘儀なくする外はないと考へる。しかし日獨樞軸の關係は更に別の觀點から考へたいと思つてゐる。」と答へたとあるね。

二 波蘭より見たる日本とソ聯

B 御親切は大きに有りがたいが……こんな事なら早く日獨伊軍事同盟を結んでおくんでしたね。

A さあなあ……

B 小首をふりましたね？

A ふつたね……

B とは又なぜに？

A といふのは日ソ相戦ふとき、ドイツがソ聯の心臓肺臓にあたるモスクワやレニングラードへ爆弾を落すのと、獨ソ相戦ふとき日本がソ聯といふ大きな象の後足にあたる浦鹽あたりへ爆弾を落すのと、ソ聯への手ごたへは相當ちがふ。

B そりや地理的關係ぢやから仕方がない。

A さうだらう。ところで今ドイツは、ポーランドの廊下なりダンチツヒの町をとりあげようとしてる。

B 今度の獨ソ間の密約には、ポーランドを獨ソの間に分け取る、ソ聯のフィンランドやバルトの小國を鷃呑にするのを默認するといふ……

A そんな事もあらうよ。兎に角、チエツコ以來煮え湯を飲ませつづけられてゐる英佛は、この上下ドイツがポーランドをねぢ倒す、勢ひに乗じてルーマニア、ユーゴなどへも食指を動かす、更に英佛へ植民地の返却を要求する、イタリもコルシカ島、東アフリカへの註文を押しつける。

B イギリスは面目丸潰れになりますな……

A 面目はもうかなり潰れてるが、今度は大英帝國瓦崩の絲口を開くといふ事になる。そこでルーマニア、ギリシア、ポーランド、トルコなどと矢繼早に協定を結び、ドイツに對しては今度手を出せば實力に訴へて争ふといふ態度を明かにした。しかしそれだけでは安心できないから、歐洲の大きな謎であるソ聯、棒組になるには少々小氣味が悪いが、背に腹はかへられぬと、英佛からソ聯へ交渉をはじめてはや四ヶ月、今まで英佛の使節がモスクワにつめかけてた。

B 豈圖らんや、さうした間にソ聯は片方でドイツと手を握りはじめてゐたのでな……

三 何故に獨ソは手を握つたか

A さうだよ……もともと歐洲大戰で戦争には手を焼いてる、コリコリである、血は流したくない。だからヒットラー總統はかねてより、敵は共產國家である、ドイツ民族はソ聯のウクライナに新天地を開拓すべしと呼號してゐた、そのソ聯と手を握るといふ事になつた。ポーランドをしてコリヤ仕方がないとおとなしく？ 頭を下げて泣寝入りさせる、英佛をして手を引き眼をつぶつてをらざるを得ない破目に陥れ、更に血ぬらす獲物を手に入れるには、英佛と手をつながんとするソ聯と、宙返りして手を握る。ヒットラー總統としては背に腹はかへられず……

B いやにドイツの肩を持つね。

A いや事實を語らしめよだよ。ヒットラー總統は日本に對しても必ずや心苦しく感じてゐる事と思ふが、何よりもドイツの教育上の根本方針として、反ソ態度を堅持したいといふ信念はよく口にしてゐたくらゐだから。しかしあつたツバゼリ合になつてくると、よしんば日本が軍事同盟に加盟してゐても、ソ聯を抱き込まずに敵に廻してをるかといふと、さうもいくまい。何も日ソいづれを強い弱いとか好きとか嫌ひとかいふのではない、双方共味方にしたい、しかしポーランド問題に直面しては、ソ聯の向背の方が、日本よりもどれだけ影響が大きいかわからない。

B そりや、まあさうだが……

A ポーランドは、境を接してゐる獨ソが手を握つたとなれば、往生觀念して兎を脱ぐかも知れないが、極東の日本がいづれになつてもさしてひびきが薄いから……

B いや分つたよ……しかしそれならばそれと前以て日本へ打合せ……打合せでないまでも一應のあいさつぐらゐは……

A そりや全く水臭い……しかしそれも何より秘密が大事だから、現にモスクワには英佛會商をやつてゐるのだから……

B 大いに釋明これ務めるね、アア分つたよ。

四 不可侵條約と平沼内閣の辭職

A そこで今までの不可侵條約はお互に侵略しない、相手國が第三國の侵略を受けた時に第三國を援助しないといふ約束に止つてゐたが、今度はその外に共通の利害に關係ある諸問題についての通報の交換と、互に相手國に直接間接に對抗する國家群不参加の約束が加はつてゐるから、實質上一種の同盟である。さうなると、もし日獨伊軍事同盟が既に結ばれてゐたとして、獨ソ不可侵の成立となれば、今度は日本はそのまま眼をつぶつてゐるべきか、同盟から脱退すべきかといふ問題が起る事になる。

B それも一つの見方だね。

いづれにせよ、獨ソの提携といふ事は防共協定の精神には反してゐる。

それですな、政府がドイツに對して抗議したといふのは……

A さうだよ、あれで結構ですとも異議なしともいへないぢやないか……

というて今更日英親善でもあるまいし……

そこで全然白紙にかへつて立ち直る外に道がないから……

ここで平沼内閣總辭職となりにつけりですか。

A さうだよ。

B しかし歐洲の一角の外交の動き一つで、日本の内閣が變るなどといふのは……

A 同感だよ。しかしそれは平沼首相が「日本は從來準備し來つた政策は之を打ち切り、別途に政策樹立を必要とするに至つたから、輔弼の重責にかんがみ恐懼に堪へない。此際は國內の體制を整へ外交の機軸を革め非常時局を突破せんには、局面を轉回し人心を新にするの要あり。」といふ聲明にある通り……

B まあそれが國家將來のため得策といへばそれまでであるが、さうするとこれからは？

A 國內の體制を整へ外交の機軸を革めるのだよ。

B さあそれには？

五 獨ソ不可侵と支那事變

A 英佛獨伊ソ聯諸國の本家は歐洲にあり、我は極東にある。日本は極東に離れてゐるが第一流國である。日本を味方にしようとする國もあれば日本を煙たがる國もある。だから世界列強と密接なる利害關係を持つてゐるが、いづれにしても日本は極東中心に考へなければならぬ。そこで獨ソの握手は支那事變にどう響くかと考へて見ると、ソ聯は自分に對して日獨の間に密約がな

かつたといふ安心と、極東に力を移してもドイツにより後から胸腹をつかれるといふ心配がなくなつた。それだけソ聯は蔣介石の援助に一層拍車がかけられる、ノモンハン事件、これも明かに日ソ間の現實な戰爭であるが、これにも拍車がかけて得る事になつて來た。

B 貴見の如し。

A 現に重慶發特電には重慶當局談として、

「もともとドイツは日本と親しくすべきではなかつたが、ソ聯と英國とを制壓するための便宜として日本と提携したのである。その必要が薄くなつたので日本から離れることになつたのである。ドイツはソ聯と協力して支那側を援助することになるかも知れない。支那は將來有望な市場である。日獨樞軸の存在にも拘らず、ドイツと支那との關係は緊張することなく、ドイツは支那市場に於ける地位を維持し來り、事變開始以來今日までドイツはパートナー制の下に支那側に絶えず軍需品を供給して來たのである。事變後の支那復興事業にもドイツは参加するものと豫期される。」

といふのだね。

B ありさうな事だね。

六 歐洲の動亂と日本の行く道

A ロンドン特電では又、英政府は支那事變の全面的調停提議を行ふやう、クレイギー大使に訓令が發せられたとも傳へられてる。

B ますますややこしくなるばかりだね。

A それだけ極東に離れてる日本の地位の有りがた味と、又日本の自らの認識を新にすべしだよ。何も好んで敵をつくるべきではない。というてあわてて右をむいたり左をむいたり後をむいたり、キョトキョトせぬ事だよ。

B 昨日の敵は今日の味方、今日の味方は昨日の敵……

A 佛ソ相互援助條約が出来てまだ久しくはないが反古になつてる、獨波間又しかりだ、近頃の條約は少しもアテにならない。吾輩は先づ何よりも内に相結束し、苟くも相剌摩擦なき事である。何よりも國內の堅い結束により、そこに光榮ある孤立もありうる。僕は日獨伊間の關係はもとより特にヒットラー總統に好感を持つてゐた。さうした氣分のくづれて來た事を世界のモールの上から悲しむよ。

B そこで歐洲の天地はどうなるかね……

A 獨ソ握手でポーランドが兜を脱ぐかと思つたが、ポーランドも唇破れて齒寒し、どうせ免れぬ運命だからといふので、遂に焦土戰術に出た。ドイツとしては意外だつたね、しかし勢の赴くところ、すぐ國軍を總動員してポーランドへ攻め入つた。さうなると時の氏神がイタリアだが、さてイタリアがどの程度までドイツを援助するか、甚だ微妙な態度を示してゐる。

B 英佛も今更あとへは引かれぬから、ハッキリ肚をきめたわけだね。

A さうだよ。一度火の手が上れば欲すると欲せざるとに拘らず、すべての大國は戰亂の渦中に投ぜられるわけだ。

B さうなると、また第一次の世界大戰のやうな慘禍を残すことになるかね。

A そのへんは神様でも分らない、只いづつどうなつても、禍は變じて福とする覺悟が大切だ。人の禪で相撲はとらない事だよ、先づ内をかへりみるのだよ。彼は彼、我は我だよ。